



アジア共同学位開発プロジェクト

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

実施報告書

2013 年度

東北大学大学院教育学研究科
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター

アジア共同学位開発プロジェクト

実施報告書

2013年度

東北大学大学院教育学研究科

東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター

はじめに

2013年度は2011年4月に始まった「アジア共同学位開発プロジェクト」（概算要求特別経費「東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究」）の3年目に当たります。期間としては5か年の計画のプロジェクトの中間の年ということになりますが、具体的な方向性を定めるという点では最終年度に当たるという気持ちでプロジェクトに取り組みました。

今年度は継続の事業に加えて、いくつかの新たな試みを行いました。継続の事業としては、サマーコースが挙げられます。昨年度の経験を活かして、実施体制の見直し、授業内容の改善を図りました。新たな試みとしては、大きく2つあります。1つは「集中セミナーin 仙台」です。中国・韓国・台湾の学生を招くという点では、「サマーコース」と同様ですが、授業はすべて日本語で行われました。これは、各国・地域の言語を用いて授業を行うという点で共同学位を開発するための試みの1つです。もう1つは、2014年2月に実施された「ウィンターコース」です。これは、期間は「サマーコース」と同様の8日間、使用言語は「集中セミナーin 仙台」と同様の日本語というように、「サマーコース」と「ウィンターコース」を合わせたような形式で実施されました。また、「ウィンターコース」の特徴としては、フィールドワークを多く取り入れたことが挙げられます。これは、アジア共同学位開発プロジェクトで養成する教育指導者に求められる4つの力のうち、とりわけP(Practice)に関連したカリキュラムを開発することに繋がるものです。

「アジア教育リーダーコース」（AEL Course : Asia Education Leader Course）のカリキュラムを作成したことも大きな進展です。2014年のサマーコースを皮切りに2016年までの期間、日本－台湾－中国－韓国を学生が移動して学ぶコースです。2014年1月には、連携大学、すなわち、東北大学（日本）、国立政治大学（台湾）、南京師範大学（中国）、高麗大学（韓国）の代表者が一堂に会し、①授業科目、②授業内容・方法、③学生募集、④運営体制について検討を行いました。

来年度以降は、上記の「アジア教育リーダーコース」の運営に加えて、新たなカリキュラム開発と共同学位の授与条件などについてさらなる検討を進めていく計画です。私たちは大学院の質の高い教育の実現を目指して、この「アジア共同学位開発プロジェクト」を一層積極的に推進していきたいと考えています。今後とも関係各位のご助言、ご指導を賜りますようお願いいたします。

2014年3月

東北大学大学院教育学研究科長
本郷 一夫

目 次

はじめに

研究科長挨拶

1 プロジェクト概要

1-1	プロジェクトの目的	1
1-2	年次計画	3
1-3	実施体制	6
1-4	会議報告	8

2 実践報告

2-1	海外教育演習	29
2-2	集中セミナー	31
2-3	サマーコース	45
2-4	ウィンターコース	65

3 調査報告

3-1	国内調査報告	82
3-2	海外調査報告	88

4 連携事業

4-1	合同カリキュラム委員会	98
4-2	AEL Course	131

5 イベント報告

5-1	国際セミナー	133
5-2	国際シンポジウム報告	139
5-3	交流協定報告	142

6 広報活動

6-1	ニューズレター	143
6-2	ホームページ	165

総括

1 プロジェクト概要

プロジェクトの目的

年次計画

実施体制

会議報告

1-1 プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、グローバル化時代を迎えつつある東アジアにおいて、教育職員や教育行政に関わる職員の資質向上を図るため、東アジア及び ASEAN 諸国の有力大学と連携し、東アジアにおけるリーダー養成のモデルとなる国際的教育指導者共同学位プログラムの開発を行うことにある。

グローバル化の本質は資本と人的資源の国境を越えた流動化である。しかし、その現れ方は一様ではなく、国や地域によって異なる。東アジア諸国では、グローバル化の進む今日、21 世紀的人材育成、多文化共生、経済的格差、文化的アイデンティティなどの諸問題が共通する喫緊の教育課題として浮かび上がっている。このような新たな時代的課題に対して、国際的な視野を持ちつつ、知識偏重と言われる東アジア型教育を改革し、新たな教育の創造を指向する人材育成が求められている。

近年、東アジア諸国では、各国の教育課程改革に示されているように、知識偏重の教育を改め、価値や態度、さまざまな社会的スキルなどを含め、全面的な人間発達を促す教育への転換が模索されてきた。しかし、少なくとも日本では、知識偏重の教育は改善されているとは言えない。オルタナティブな現実を創り出す力が未成熟なのである。

また東アジア諸国とは反対に、日本では留学生数の減少に象徴されるように、若年層の内向き姿勢、安定志向は強まっている。この問題は単に留学するか否かの問題ではない。かりに、自らの実力以外に頼ることのできない新しい世界へ挑戦するマインドが枯渇してきたとするならば、問題は深刻である。先人の創り上げてきた枠組み、既存のプラットフォームにひたすら依存し、自分自身の頭と心、そして身体で事実を確認し、思考し、行動することが停止しているとすれば、そのような社会にイノベーションは起こりえないであろう。

もちろん、これらの社会変革への意志とその責任は若年層に求められるべきものではなく、われわれの社会全体の、閉塞的な精神構造と合法性を遵守する社会システムとが責められるべきである。

さて、東北大学ではグローバル化に対応する一つの選択肢として、グローバルな変化を身体的感覚として知り、またローカルな教育事情にも通じた教育専門職（教育行政関係者、学校教員など）の育成を構想している。このため、東アジアの有力諸大学とネットワークを形成し、国際的教育指導者共同学位プログラムの研究に着手した。

本プロジェクトは、教育学研究科・教育ネットワークセンターを活動拠点とし、国際的なネットワークの強化・拠点形成を行う。この組織的整備の上に、共同学位プログラム開発のための基礎的研究と共同学位プログラム開発の実践的研究の 2 つの部門が置かれる。

基礎的研究の目的は、国内外の先行事例の調査を通じて、国際的共同教育、国際的共同学位プログラムの実態を把握することである。制度、教育目的・教育内容、スタッフや施設、学生募集と入学者選抜（アドミッション）、奨学金をはじめとするさまざまな生活支援、そしてプログラム全体のアセスメント方法などが主たる研究対象である。成功事例はもとより、失敗事例からも多くの事柄を学びたいと考えている。

なお、この基礎的研究は、高等教育研究においてアカデミックな研究業績を上げることを

目的とするものではなく、共同学位プログラム開発のための実践志向の基礎的研究であり、将来、私たちの共同学位プログラムで学ぶ学生たちのための研究である。

共同学位開発の実践的研究は、東北大学を中心とする共同学位プログラムの開発研究である。現在、東北大学では世界の主要教育研究機関と学術交流を重ねてきた。今回のプロジェクトでは、これらの大学・機関の中から東アジアの7つの大学を選択し、ネットワークを築く。これらをコアとして、共同教育プログラムの開発研究を行う。なお、現段階では、修士課程に焦点を絞り、共同教育プログラムの開発に取り組んでいる。

これらの基盤の上に、平成26年度より実験的に共同教育プログラムを開始する予定である。本プログラムの効果として期待できる事柄は、以下のとおりである。

1. 国際的教育指導者共同学の研究拠点の形成
2. 国際的共同学位プログラムの共同開発
3. 国際的な視野、新たな資質能力を備えた教育専門職のリーダーの育成、また教育研究の養成
4. 将来的にはアジアの課題に協働して取り組む人的ネットワークの形成

こうした長期的な展望を持ちつつ、国際的共同教育の開発に取り組んでいる。

平成25年度の目的は、以下のとおりである。

1. 本プロジェクト専任スタッフを採用し、プログラムを遂行するための組織的基盤を強化
2. 基礎研究として、国際的共同教育プログラムを創設するための情報収集
3. パートナー機関を中心とするシンポジウム、セミナー、ワークショップを開催
4. 共同学位コースを運営するためのノウハウを得るために、各種集中コースを開催
5. コアとなるパートナー機関を定め、共同教育パイロットプログラムを創設

最後に改めてわれわれの目的を確認しておきたい。われわれが目指しているのは、国境を越えた共同学位（ジョイント・ディグリー）プログラムである。もちろん「共同学位」の定義にもよるが、少なくともわれわれの目指しているのは、単位互換制度の一つのバリエーション、あるいはその延長線上の「共同学位」ではない。そのような「共同学位」であれば、すでに日本国内にも多数存在している。パートナーと協働して制度を運営し、教育理念を共有して、まったく新たな人材育成を図る。そして新しい人材育成を通して、新しい世界の創造に貢献する。これがわれわれのプログラムの目的である。

1-2 年次計画

〈図 1-1〉は、本プログラムの年次計画である。

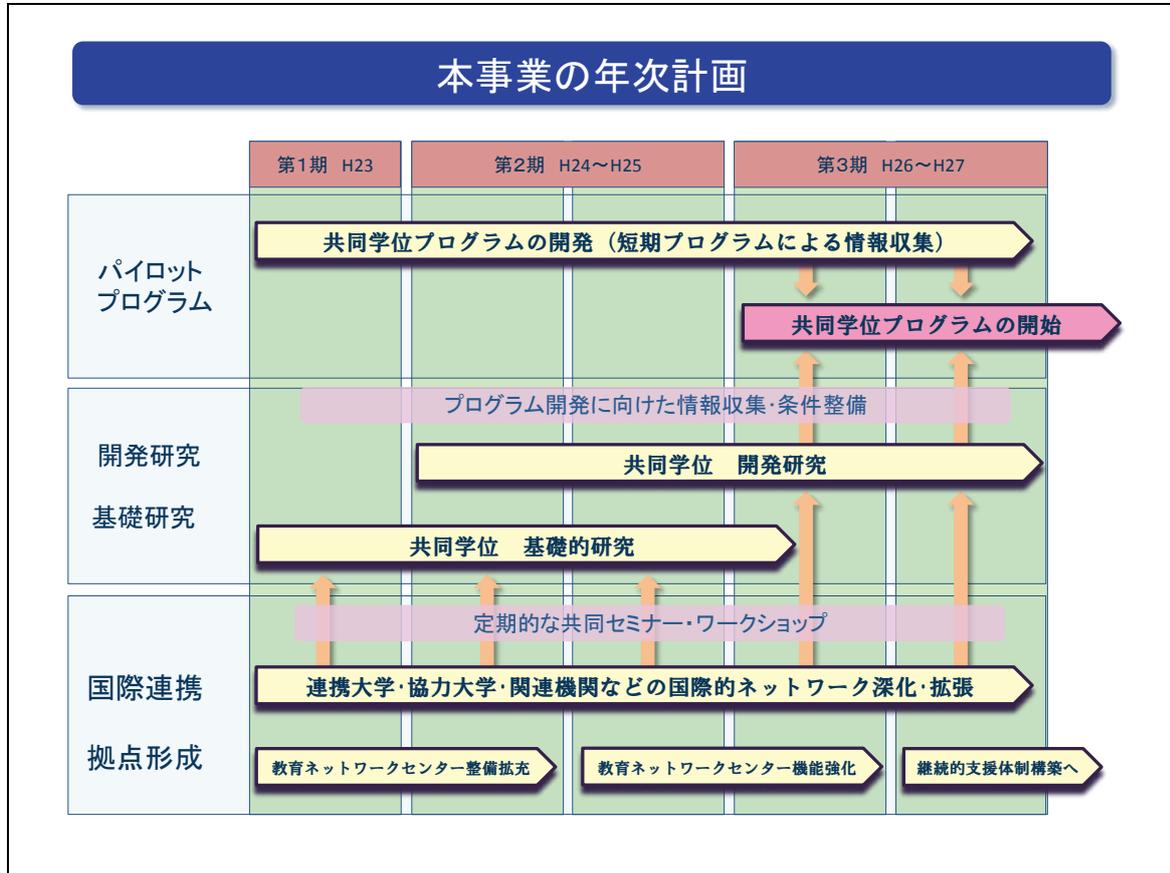


図 1-1 アジア共同学位開発プロジェクト年次計画

上の図に示した通り、本プログラムは、(1)国際連携・拠点形成部門、(2)開発研究・基礎研究部門、(3)開発研究・実践研究部門の3つのレベルから成り立つ。

(1)の国際連携・拠点形成部門は、本プログラムの実施基盤となる教育ネットワークセンターの整備拡充・連携強化である。本プログラムを遂行する上で、専任教員2名、教育研究支援者2名、事務職員1名を雇用する。また連携大学などから客員研究員を招へいする。

(2)の開発研究・基礎研究部門は、共同学位プログラムを立ち上げ、遂行していくための情報収集を行うもので、5年間の期間の中では、次第に基礎的研究から開発を意識した研究にシフトしていく予定である。

(3)の開発研究・実践研究部門は、平成26年度から開始予定のパイロットプログラム実施のための研究を行う。平成25年度は各種集中コースの運用を通し、プログラムを運営するためのノウハウの蓄積を行う。

次の〈図 1-2〉は、本プログラムの全体的なイメージを示したものである。

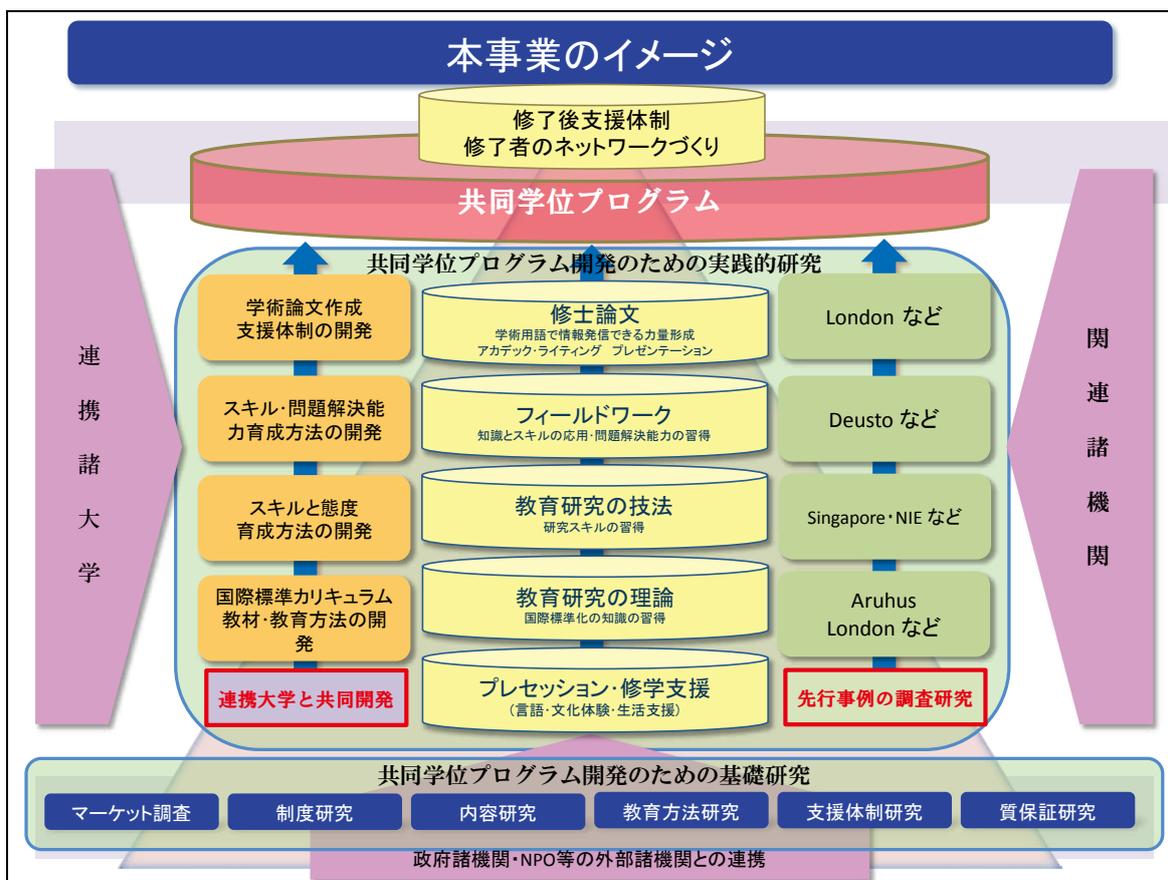


図 1-2 アジア共同学位開発プロジェクト事業イメージ

外縁から見ていただきたい。「連携諸大学」は本プログラムに直接的に関わることが期待される大学である。現在、ソウル国立大学、高麗大学、北京師範大学、南京師範大学、華東師範大学、国立台湾師範大学、国立政治大学の 7 大学をコアとして、教育学研究科の有する国際的ネットワークを指示している。

「政府諸機関・NPO 等の外部諸機関との連携」は、国際的共同教育を実施する上で法的・制度的な整備は不可欠であり、また実際に留学生に対する生活支援等を行う上では、不可欠な連携である。将来的には、政府諸機関・NPO 等の外部機関におけるインターンシップも構想している。

右側の「関連諸機関」は、やはり教育学研究科の有する国際的ネットワークを示している。たとえば、ロンドン大学教育研究院は EU の支援を受け、国際的共同教育プログラムを運営してきた。共同教育プログラムを実施していくためには、先行事例の情報収集およびその評価分析は必要条件と言える。また今日、高等教育機関のグローバル化・ネットワーク化が急速に進展しており、そこから共同学位プログラムへの発展も予想される。したがって、これら諸機関との緩やかな連携も重要である。

次に、下の「共同学位プログラム開発のための基礎研究」を見ていただきたい。ここでは、

実際に共同学位プログラムを開設し、運営していくための研究を示している。これは、教育ネットワークセンターが中心となって実施する基礎研究である。この基礎研究として「マーケット調査」「制度研究」「(教育)内容研究」「教育方法研究」「支援体制研究」「質保証研究」を例示した。

さて、次に中心部分に示された黄色の部分を見ていただきたい。外部の諸機関との連携、基礎研究を踏まえた上で、共同学位プログラムのカリキュラムが編成されることになる。ここではあくまでもイメージを示したものであるが、下から入学時期のギャップを活用した入学前の「プレセッション」、第1学期「教育研究の理論」、第2学期「教育研究の技法」、第3学期「フィールドワーク」、そして第4学期「修士論文」と積み上げていくカリキュラムを構想している。

このカリキュラム開発と密接に関わるのが、そのすぐ左側の「連携大学との共同開発」である。連携大学の中からコアとなるパートナー機関とともに、カリキュラム開発を行っていく予定である。

カリキュラム構想の右側に示したのは、先行事例の調査研究である。われわれのカリキュラム構想は、EUのプログラム「ヨーロッパ生涯学習修士課程」(European Master of the Life Long Learning)に近い。したがってEMLLLを実施しているArrhus、London、Deustoの3大学等の先行事例も参照しながら、カリキュラムを構想していく。

なお、われわれの研究課題は、東アジア共同学位開発研究である。ここには2つの意味合いが含まれている。1つは、実際にプログラムを開発し、運営することである。もう一つは、われわれの取り組む共同学位プログラムの開発プロセス、および運営システムそれ自体が研究の対象となっている。それが「共同学位プログラム開発のための実践的研究」の意味するところである。

さて、最後に再び〈図1-2〉に戻っていただきたい。これらの過程を経て、最終的には「共同学位プログラム」を開発する。そして、長期的課題として、この共同学位プログラムの修了者のネットワークを形成していきたいと願っている。しかし、この願いは、本プログラムが終了する平成28年度以降の課題となる。

以上の全体計画の下、平成25年度に取り組むべき課題・目標を改めて確認しておきたい。前節で述べたように、5つの課題・目標は以下のとおりである。

1. 本プロジェクト専任スタッフを採用し、プログラムを遂行するための組織的基盤を強化
2. 基礎研究として、国際的共同教育プログラムを創設するための情報収集の継続
3. パートナー機関を中心とするシンポジウム、セミナー、ワークショップを開催
4. 共同学位コースを運営するためのノウハウを得るために、各種集中コースを開催
5. コアとなるパートナー機関を定め、共同教育パイロットプログラムの創設

5年という期間は決して長くない。平成23年度に実施したシンポジウムで、早稲田大学の江正殷先生は、ダブル・ディグリーを開設するまで、最低2年間の準備期間を要することを指摘された。平成25年度中に共同学位プログラム開設のためのパイロットプログラムを創設する必要がある。

1-3 実施体制

実施体制は、＜図 1-3＞の通りである。

教育学研究科・教育ネットワークセンターに「アジア共同学位開発プロジェクト部門」を新設する。事務局は、専任教員（2名）、教育研究支援者（2名）、事務補佐員（1名）の体制である。

なお、本プロジェクトを進めるにあたって委員会を設けている。プロジェクト実施委員会（通称、推進会議）は、ディレクター1名、サブディレクター2名、委員（10名）と専任教員（2名）、教育研究支援者（2名）・外国人客員教員（1名）から構成されている。実施委員会は月1回開催され、プロジェクト実施に関する共通理解を醸成しつつ、全体の動きを総括する。

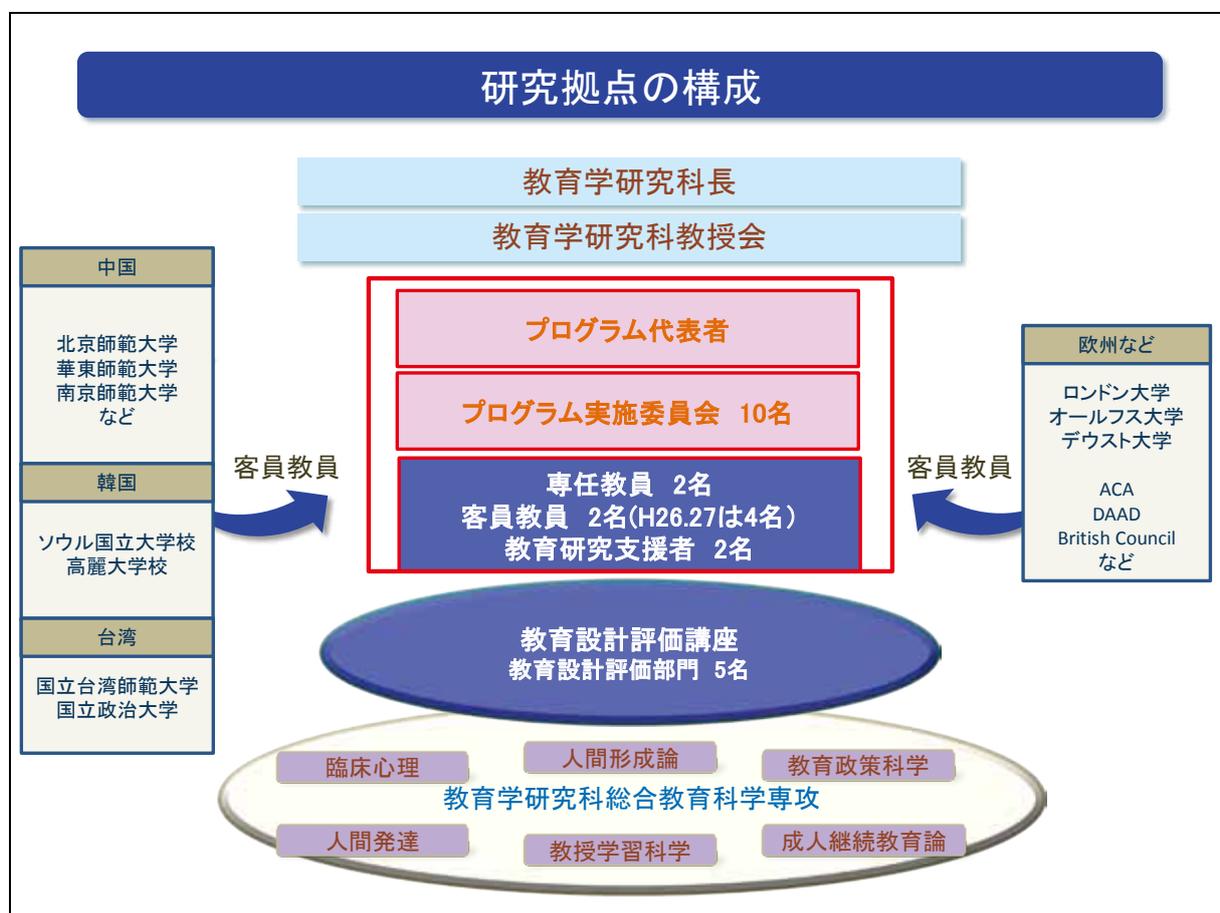


図 1-3 アジア共同学位開発プロジェクト実施体制

プロジェクト実施担当者は以下の通りである。

表1 アジア共同学位開発プロジェクト実施委員会の構成員

共同学位開発プロジェクト実施委員会		
役 割	氏 名	役 職
	本郷 一夫	東北大学大学院教育学研究科長
ディレクター	小川 佳万	東北大学大学院教育学研究科教授
サブ ディレクター	安保 英勇	東北大学大学院教育学研究科准教授
	谷口 和也	東北大学大学院教育学研究科准教授
委員	上埜 高志	東北大学大学院教育学研究科教授
	柴山 直	東北大学大学院教育学研究科教授
	笹田 博通	東北大学大学院教育学研究科教授
	工藤 与志文	東北大学大学院教育学研究科教授
	有本 昌弘	東北大学大学院教育学研究科教授
	神谷 哲司	東北大学大学院教育学研究科准教授
	三輪 哲	東北大学大学院教育学研究科准教授
	深谷 優子	東北大学大学院教育学研究科准教授
	若島 孔文	東北大学大学院教育学研究科准教授
	清水 禎文	東北大学大学院教育学研究科助教
専任教員	朴 賢淑	東北大学大学院教育学研究科助教
	田中 光晴	東北大学大学院教育学研究科助教
客員教員	陳 陳	南京師範大学心理学院准教授
事務局	鳥澤 誠	東北大学教育学部・教育学研究科事務長
	佐藤 広美	東北大学教育学部・教育学研究科庶務係長
	加藤 高明	東北大学教育学部・教育学研究科教務係長
	大塚 正皆	東北大学教育学部・教育学研究科会計係長
	朴 仙子	東北大学大学院教育学研究科教育研究支援者
	小野寺 香	東北大学大学院教育学研究科教育研究支援者
	黒田 由希子	東北大学教育学部・教育学研究科事務補佐員

1-4 会議報告

会議報告については<資料 1-4>に代える。

会 議 報 告

委員会名 2013 年度アジア共同学位開発プロジェクト 第 1 回 推進会議

2013 年 4 月 10 日 (月) 開催

1. 議事録について

2012 年度第 12 回推進会議の議事録について、原案どおり承認された。

2. 組織・体制について

小川教授より、平成 25 年度の AJP 組織案について以下の提案がなされた。

- ・ AJP に関わる会議は、推進会議とカリキュラム委員会の二つとする。
- ・ 推進会議は AJP における各種事項の最終決定権を有する。
- ・ カリキュラム委員会は毎週 1 回 (月曜午後)、推進会議は毎月 1 回 (火曜午後) のペースで行う。

3. 共同学位カリキュラムについて

(1) 学部授業の新設

上埜教授より、4 月 10 日に開講された学部授業科目新設「海外教育演習」(2 単位) について報告がなされた。

(2) サマーコースについて

上埜教授よりサマーコースについて説明があった。

4. 2013 年度年間計画について

(1) サマーコースについて

上埜教授より、サマーコースについて説明があった。日本人学生の参加が少ないことが懸念事項として挙げられ、積極的に広報することとなった。招聘講師数を昨年度より減らし、各講師の担当授業数を増加させることで、授業内容を系統的に組み立てるようになることとなった。

(2) 集中セミナー in 仙台について

朴助教より、セミナー開催会場として 306 教室を確保したことが報告された。

(3) 国際シンポジウム・ワークショップについて

上埜教授より、カリキュラム開発のための打ち合わせを行ない、小川教授、安保准教授、田中助教が 4 月末に高麗大学を訪問しカリキュラムについて協議することとなった。

(4) 広報物について

今年度はニューズレターを3か月に1回のペースに増やして広く関係機関にAJPの活動を周知していくこととなった。

(5) 外部評価について

外部評価委員の先生方と日程を調整し、夏休み前に外部評価委員会を開催することとなった。

(6) 学術交流協定について

今後、北京師範大学教育学部、華東師範大学心理与認知科学学院・教育科学学院、南京師範大学心理学院、ソウル大学校師範大学と協定を結ぶことが報告された。

会 議 報 告

委員会名 2013 年度アジア共同学位開発プロジェクト 第 2 回 推進会議

2013 年 5 月 8 日 (火) 開催

議 事

報告 1. 外部評価委員会について

上埜教授より、外部評価委員会について報告があった。外部評価委員と日程調整の結果、6 月 15 日 (土) に外部評価委員会を行なうこととなった。出席対象者は推進会議構成員となった。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案 (4 月 10 日(月)) を承認した。

審議 2. プロジェクト組織について

小川教授より AJP 組織の再編について説明がなされ、下記検討事項を調整したうえで平成 25 年度の AJP 組織体制を決定することとなった。

- ・教育ネットワークセンター副センター長 (国際交流担当) を委員に入れる。
- ・授業担当予定者はカリキュラム委員会に出席していただく。

審議 3. 2013 年度計画について

(1) 集中コースについて

上埜教授より、平成 25 年度集中セミナーに申し込みのあった応募者について報告があり、可否を審議した。募集要項の規定を見さない応募者 2 名は受け入れないこととした。

合格通知、不合格通知については研究科長名 (日本語、英語両言語で作成) で作成し、応募者と所属機関長宛に送ることとなった。

集中コースの講義の水準について参加者の知識と日本語能力に留意し設定することとなった。効果測定の方法について今後検討していくこととなった。(終了後アンケートなど)

(2) サマーコースについて

小川教授より、平成 25 年度サマーコースについて説明があった。応募者全員合格とし、合格通知 (研究科長名義、英語) を送付することとなった。また、追加募集はせず、日本人学生に多く参加してもらうよう募集をかけていくこととなった。

審議 4. 共同学位プログラムについて

田中助教より資料 6 に基づいて 4 月 29 日 (月) に開催された連絡協議会について報告があった。

- ・サマーコースの単位化について、特別聴講生の登録が現時点では間に合わないことから、正規の単位を出せないことを相手大学に伝え、来年度以降については相手校に科目新設を提案し、両校で単位化できるよう調整することとなった。
- ・共同教育科目についてはカリキュラム委員会で検討し、候補者を選出することとなった。
- ・第2回連絡協議会を5月20日（月）16：00から204号室で開催することとなった。参加対象者はカリキュラム委員と参加できる先生。
- ・大学院生ワークショップ（国際コロキウム）について来年2月に開催する方向で検討することとなった。

審議 5. その他

(1)研究成果部門より

小川教授より研究成果を広く発信していくためにプロジェクト関連の成果刊行物を計画してはどうかとの提案がなされた。今後アジア共同学位とのテーマの関連性を明確にしながら、計画することとなった。

(2)予算について

小川教授より平成25年度AJP予算について説明があった。

(3)次回開催について

今回は、6月4日（火）17時より開催する。

会 議 報 告

委員会名 2013年度アジア共同学位開発プロジェクト 第3回 推進会議

2013年6月4日(火) 開催

議 事

報告 1. 出張について

小川教授より、モンゴル国立大学との国際交流について意見交換を行なったことが報告された。

報告 2. 外部評価委員会について

朴助教より6月15日(土)に開催される外部評価委員会の次第について説明がなされた。式次第においてプログラム概要についての説明を短縮し、外部評価委員からの助言の時間を増やす方向で調整することとなった。

報告 3. 集中セミナーについて

神谷准教授より集中セミナーの進捗状況が報告された。フィールドトリップ先は県立高校とし、効果測定方法については既存の授業評価をベースに作成することとなった。

報告 4. サマーコースについて

事務局より、北京師範大学から2名の学生追加があったことが報告された。日本人学生の受講生が増えるよう積極的に働きかけていくこととなった。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(5月8日(火))を承認した。

審議 2. 合同カリキュラム委員会連絡協議会と懸案について(別頁参照、100頁)

田中助教より高麗大学と行なわれた第2回合同カリキュラム委員会連絡協議会について報告があった。

審議 3. 研究成果部門より

小川教授より研究成果物について説明があった。東北大学出版会等に予算見積もりをとり、プロジェクトの年間計画と予算計画と調整することとなった。また英語での出版についても今後検討していくこととなった。

審議 4. 今後のコース設計について

小川教授より AJP のコース設計について説明があった。研究科の将来設計を視野に入れつつ今後コース設計することとなった。

審議 6. その他

次回の推進会議は、つぎのとおり予定する。

2013 年 7 月 9 日 (火) 17:00～

会 議 報 告

委員会名 2013年度アジア共同学位開発プロジェクト 第4回 推進会議

2013年7月9日(火)開催

議 事

報告1. 外部評価について

田中助教より、6月15日(土)、外部評価委員の二宮・放送大学副学長、小尾・慶応義塾大学教授が出席し、外部評価委員会を開催した旨の報告があった。なお、外部評価委員のVickers・九州大学准教授は所用のため欠席であった。

報告2. 出張報告

田中助教より、資料に基づき、6月28日(金)、高等教育シンポジウム「大学での学びを問い直すー主体的な学びを培う大学教育とはー」に参加した旨報告があった。

報告3. 合同カリキュラム委員会について

高麗大学との合同カリキュラム委員会が延期されたことが報告された。今後議題の整理を含め、高麗大のみならず台湾、中国、韓国の他の連携大学との連携強化を進めることとなった。

審議1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(5月8日(火))を承認した。

審議2. 集中セミナーについて

神谷准教授より、集中セミナーの進捗状況について報告があり、修了証の書式について検討することとなった(文言、期間の明記など)。

審議3. サマーコースについて

安保准教授、谷口准教授よりサマーコースの準備進捗状況について報告があった。高麗大学からの学生から参加辞退の通達があり、改めて高麗大学に追加募集を依頼することとなった。

審議4. 予算について

小川教授より、資料に基づいて今年度の予算執行計画について説明があり、承認された。出版計画と学生派遣の詳細については今後見積もりを取り検討していくこととなった。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。2013年8月 6日(火) 17:00～

会 議 報 告

委員会名 2013年度アジア共同学位開発プロジェクト第5回推進会議

2013年8月6日(火)開催

議 事

報告1. 集中セミナーについて

小川教授より、7月21(日)～25日(木)に開催された集中セミナーが無事終了したことが報告された。

報告2. 客員教員着任について

小川教授より、8月1日付で、陳陳准教授(南京師範大学)が客員教員として着任したことが報告された。着任期間は8月31日まで。滞在中の成果について8月26日(月)17:30より報告していただくこととなった。

審議1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(7月9日(火))を承認した。

審議2. サマーコースについて

安保健准教授、谷口准教授よりサマーコースの準備進捗状況について報告があった。参加者名簿、開講式・閉講式次第、修了証、サプリメントについて審議し、承認された。

審議3. 共同カリキュラムについて

小川教授より、資料に基づき共同教育カリキュラム案について説明があった。コメントは以下の通り。

- ・理想は Semester 開講だが、当面は集中講義型での開催が妥当ではないか。
- ・新設科目はできるだけ少なく、既存の科目を活用する。
- ・1領域、隔年開講ではどうか。
- ・Spring Course への参加学生の単位認定方法を踏まえた上で、開催時期を検討する必要がある。
- ・科目新設・変更の際、在学生にとって不利にならないような説明が必要。
- ・海外インターンシップ先については非常勤講師発令をして、指導を受けた上で、単位認定する。海外インターンシップ先の確保が課題。
- ・Research Trip か Internship を選ぶ3科目+1のコース設計はどうか。
- ・各科目の担当教員は単独でも複数でも可とする。
- ・原則として学生への費用負担は各連携大学が負担するが、費用負担については奨学

- 金付与などを含め、一部東北大で負担したほうがよいのではないか。
- ・受け入れ交渉では10日程度の受け入れをお願いしてはどうか。
 - ・プロジェクト教員として外国人教員を雇うことを検討してはどうか。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2013年9月10日(火) 17:00～

会 議 報 告

委員会名 2013年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第6回推進会議

2013年9月10日(月)開催

議 事

報告1. サマーコースについて

安准教授、谷口准教授より、8月21日(水)～28日(水)の7日間、サマーコースとして「アジアの子ども」「アジアの学校」(各2単位)を開講し、無事、終了した旨の報告があった。

来年度以降の課題として以下のことが挙げられた。

- ・各講師からの授業資料の締め切り時期を早め、授業内容の体系性を確保する。
- ・フィールドワークの時間にゆとりをとること。
- ・東北大生の参加者をいかに増やすか。周知方法が課題。
- ・TAの活用方法。

報告2. JASSOの助成金について

田中助教より、JASSOより助成金が追加採択された旨報告があった。採択内容に合わせ企画を進めることとなった。

報告3. 出張報告について

小川教授より、資料に基づき、国立台湾師範大学、国立政治大学への訪問・意見交換について報告があった。

報告4. 高麗大学との臨時打ち合わせについて

田中助教より、資料に基づき、共同カリキュラムに関して、サマーコースで来学中の高麗大学朴仁雨教授と8月27日(火)に行なわれた臨時打ち合わせについて下記事項が検討されたことが報告された。

- ・各領域への授業提供
- ・2週間程度の短期受入れ
- ・渡航や授業にかかる費用は各校負担
- ・サーティフィケートは必須ではない。コース登録者以外も授業参加可能とする。

審議1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(8月6日(火))を承認した。

審議2. 共同学位カリキュラムについて

小川教授より、資料に基づき、共同カリキュラム案について説明があり、審議され、以

下の意見が出された。

- ・単位の設定、換算の仕方は今後も検討が必要。
- ・夏休み中のリサーチスタディの内容について具体的な検討が必要。
- ・リサーチスタディは単位化したほうがよい。
- ・台湾では入学前履修が可能。
- ・参加学生が極端に少なくなる可能性がある。
- ・学部段階から予備教育を設定する必要があるのではないか。
- ・2月上旬に海外に教員が行くことは難しい。2月の集中講義の設定時期は再検討が必要ではないか。
- ・カリキュラム・ポリシーを明確に打ち出す必要があるのではないか。

審議3. 教材開発について

谷口准教授より、資料に基づき、教材開発について説明があった。プロジェクトとの関連性を含め、引き続き検討していくこととなった。

審議2. 国際シンポジウムについて

谷口准教授より、資料に基づき、国際シンポジウムについて説明があった。シンポジウム会場の候補として東京開催も含め再度検討することとなった。

審議3. その他

(1) 英語研修について

小川教授より、資料に基づき、教員の英語研修について説明があった。授業担当者を中心に、推進会議メンバーから希望者を募り、英語研修を行なうこととなった。

(2) 協定・細則について

流協定や細則については今後ネットワークセンターと連携をとることが確認された。次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2013年10月8日(火) 17:30～

会 議 報 告

委員会名 2013年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第7回推進会議

2013年10月8日(火)開催

議 事

報告 1. 出張報告

小川教授より、資料に基づき、9月14日(土)～19日(木)南京師範大学への訪問・意見交換について報告があった。

朴教育研究支援者より、資料に基づき、10月1日(火)に参加した ASEAN+3 高等教育質保証フォーラムについて報告があった。また、高麗大学の朴仁雨教授と行なった打ち合わせについて報告があった。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(9月10日(火))を承認した。

審議 2. JASSO 助成金事業について

田中助教より、JASSO 助成金事業について説明があった。今後教育ネットワークセンターと連携して企画を具体化することとなった。

審議 3. 共同学位カリキュラムについて

田中助教より、資料に基づき、共同カリキュラム案について説明があり、以下の意見が出された。

- ・現在開講している「アジアの学校」「アジアの子ども」を今後も活用する。
- ・Research Study を単位化し東北大生も履修できるようにする。
- ・学生身分保障について、連携校と学生受け入れに関する細則を早急に締結する。

審議 4. 国際シンポジウム/ワークショップについて

谷口准教授より、資料に基づいて、国際シンポジウムの準備状況について説明があった。東京での開催を念頭に引き続き交渉をすすめることとなった。

審議 5. 予算について

会計係長より、資料に基づき、次年度予算について報告があった。黒田事務補佐員より、資料に基づき、今年度予算の執行状況について報告があった。

審議 6. その他

(1) 教材開発について

谷口准教授より、教材開発について今年度の発刊は見送ることが報告された。

(2) 英語研修について

事務室より、資料に基づき、教員の英語研修について説明があった。希望者を引き続き募ることとなった。

(3) 刊行物について

ニューズレター第5号について確認された。

(4) 外国人教員の採用について

本郷研究科長より、来年度から2年間の英語ネイティブの教員採用することが提案され、承認された。予算はAJPの外国人教員枠を使用する。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2013年11月12日(火) 17:30～

会 議 報 告

委員会名 2013年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第8回推進会議

2013年11月12日(火) 開催

議 事

報告 1. シラバスフォームの送付について

事務局より、共同カリキュラム草案及びシラバスフォーマットについて連携大学に送付されたことが報告された。収集した意見は次回推進会議で報告する。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(10月8日(火))を承認した。

審議 2. 国際シンポジウムについて

谷口准教授より、資料に基づき、国際シンポジウムの準備状況について報告があった。

開催日は2014年1月11日(土)を候補日とし参加者の都合を調整して決定し、会場は東京で引き続き候補を挙げることとなった。シンポジウムテーマは「グローバル人材育成とシティズンシップ教育ーアジア共通の教育の基盤とは何かー」とし、本郷研究科長、小川教授、水山光春京都教育大学教授、Wing On LEE シンガポール NIE 教授を講師とする。

審議 3. AELC 合同検討委員会について

田中助教より、資料に基づき、AELC 合同検討委員会について提案があり、下記のことが決定した。

- ・2014年1月12日(日)に東京で開催する。
- ・議事は各言語同時通訳で進行する。
- ・参加対象者は、各連携大学の担当窓口教員と授業担当者。
- ・協議内容についてはカリキュラム委員会で引き続き検討する。

審議 4. JASSO 助成事業について

朴助教より JASSO 助成事業(Winter Course)の準備状況について説明があり、以下のことが承認された。

- ・日程は2014年2月14日(金)ー24日(月)で調整する。
- ・応募対象大学到北京師範大学も含める。
- ・大学院生プロジェクト成果報告会の日程が合えばスケジュールに加える。

審議 5. その他

- (1) 刊行物について

ニューズレター第4号、第5号が完成した旨、報告があった。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2013年12月10日(火) 17:30～

会 議 報 告

委員会名 2013 年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第 9 回推進会議

2013 年 12 月 10 日 (火) 開催

議 事

報告 1. 出張報告

田中助教より、資料に基づき、11 月 16 日 (土) に参加した、海外体験学習研究会「海外体験学習の多様性と可能性 これまでの 10 年-これからの 10 年」和光大学 (東京) について報告があった。

報告 2. 英語研修について

事務局より、教員を対象とした英語研修が開始したことが報告された。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案 (11 月 12 日(火)) を承認した。

審議 2. 国際シンポジウムについて

田中助教より、資料に基づいて、国際シンポジウムの準備状況について報告があり、下記のことが決定した。

- ・開催日は 2014 年 1 月 11 日 (土)、会場は TKP ガーデンシティ竹橋 ホール 11G とする。
- ・当日の配布資料は英語で準備する。
- ・申し込み用 email アドレスを作成する。
- ・プレスリリースを行なう。

審議 3. AELC 合同検討委員会について

田中助教より、資料に基づき、AELC 合同検討委員会について提案があり、下記の意見が出された。

- ・AELC 科目名と実際の授業名の内容や履修条件などと整合性を取る必要がある。
- ・学生募集は「大学院の正規学生」とする。連携大学・部局と連携する。
- ・AELC は部局間協定の内容とは異なる枠組みで行なう。
- ・来年度東北大で開催されるサマーコース (AELC) には、これまで教育学研究科と協定を結んできた大学からも参加を可能としてはどうかとの意見が出された。KASP の内 KAS のみへの参加は可能ではないか。P は少人数での開講するため難しい。
- ・来年度東北大で開催されるサマーコースには協定校からも参加可能とする。

審議 4. ウィンターコースについて

朴助教より、ウィンターコースの準備状況について報告があり以下のことが決定した。

- ・現時点での応募者は8名で、追加募集を行なうこととなった。
- ・運営経費について教育ネットワークセンターにも協力を仰ぐこととなった。

審議 5. 予算について

黒田事務補佐員より、資料に基づき、今年度予算の執行状況について報告があった。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2014年1月7日（火） 17:30～

会 議 報 告

委員会名 2013年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第10回推進会議

2014年1月7日(火) 開催

議 事

審議1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案(12月10日(火))を承認した。

審議2. 国際シンポジウムについて

田中助教より、資料に基づいて、国際シンポジウムの準備状況について報告があり、シンポジウムへの出席者及び式次第が確認された。

審議3. AELC 合同検討委員会について

田中助教より、資料に基づき、AELC 合同検討委員会の準備状況について報告された。

審議4. ウィンターコースについて

朴助教より、ウィンターコースの準備状況について報告があり以下のことが決定した。

- ・仙台市国際交流センターの協力で、ホームステイを提供することになり、希望者を募ることとなった。

審議5. その他

(1) 教員英語研修について

事務局より、教員英語研修参加者の追加募集について説明があった。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2014年2月4日(火) 17:30～

会 議 報 告

委員会名 2013 年度 アジア共同学位開発プロジェクト 第 11 回推進会議

2014 年 2 月 4 日 (火) 開催

議 事

報告 1. 国際シンポジウムについて

小川教授より、1 月 11 日 (土) に東京で行なわれた国際シンポジウムが無事終了したことが報告された。参加者は 55 名であった。

報告 2. AELCourse 合同検討委員会について (別頁参照、101 頁)

小川教授より、1 月 12 日 (日) に東京で行なわれた AELC 合同検討委員会が無事終了したことが報告された。

審議 1. 議事要録の確認について

前回の議事要録案 (1 月 7 日(火)) を承認した。

審議 2. AELCourse 運営体制について

田中助教より、資料に基づき、AELCourse について報告され、以下の意見が出された。

(1) ブロシュアについて

- ・テーマ色はオレンジとし、表紙に連携校名がわかるようにデザインする。
- ・正式なコース名は Asia Education Leader (通称 AEL) Course とする。
- ・ブロシュア裏面に、連携校の担当事務局の連絡先を明記する。
- ・ブロシュアは 2 月中の完成をめざし、3 月から募集を開始する。

(2) 2014 年度サマーコースについて

- ・2014 年度サマーコースは、2014 年 7 月 22 日から 8 月 6 日に東北大学で開催され、7 月 22 日から 25 日が谷口准教授、三輪准教授による講義 (S 科目)、7 月 26 日、28 日、29 日が小川教授による講義 (K 科目)、7 月 30 日から 8 月 2 日が安保准教授による講義 (P 科目) となった。今後、訪問先との調整を受け微調整をする。7 月 22 日にオリエンテーション、8 月 6 日に修了式を行なう。
- ・受入れは AJP の事務室が行なう。
- ・上記日程を基に、ウィンターコース期間の宿泊先状況を確認し、最終的に微調整を行なうこととなった。

(3) その他

- ・AJP 終了後の AEL コース運営の引き継ぎについては今後事務部と協議し、調整していくこととなった。
- ・カリキュラム委員会の在り方については AEL 本部体制を念頭に今後検討していくことと

なった。

審議3. ウィンターコースについて

朴助教より、ウィンターコースの準備状況について報告があり以下のことが決定した。

- ・授業には海外の学生の他に HISE と学生サポーターが参加する。
- ・学生主体の授業の担当教員を明記する。
- ・ウィンターコースの開催について教授会で報告・周知する。

審議4. 刊行物について

連年通りシンポジウム報告書と実施報告書を作成することとなった。

審議5. その他

(1) 予算について

事務局より、資料に基づき、今年度予算の執行状況について報告があった。

次回推進会議の開催は、つぎのとおりとする。

2014年3月4日（火） 17：30～

2 実践報告

海外教育演習

集中セミナー

サマーコース

ウィンターコース

2-1 海外教育演習

東アジア共同学位開発プロジェクトでは、教育学部に平成 25 年度より教育学部 3, 4 年生を対象とした「海外教育演習」(前期・2 単位) を開設した。本プロジェクトでは、大学院の教育プログラムの開発を進めているが、学部段階から大学院への進学や海外への関心を高める必要性が指摘されてきた。本科目を開設した理由の一つもそこにある。

この授業は教育学に関わるフィールドワーク研究とその技法について学び、実際にフィールドで現地調査を行なうことにより、教育現象の本質に迫ることを狙いとしている。また、同科目の履修を通じて、アジア共同学位開発プロジェクトへの学生の参加意欲が高まることも期待される。なお、今年度のフィールドワーク先は韓国の教育機関とした。

今年度は、学部 3 年生 1 名、4 年生 2 名(自由聴講生)、修士課程 1 年生 1 名の計 4 名が受講した。授業の前半(全 15 回のうち 12 回)では文献を中心にフィールドワークの技法や課題などについて学ぶと同時に、訪問調査地の言語である韓国語を学んだ。

フィールドワークでは、6 月 23 日から 26 日まで 4 日間にわたり 4 名の引率教員とともに、韓国ソウル市にある校洞初等学校、景福高等学校を訪問した。ここでは、例えば ICT を活用した授業や英語の水準別授業を、日本の教育現場と比較をしながら観察した。

こうしたフィールドワークを組み込んだ授業は、海外の教育現場を直接観察するという行為自体が持つ教育的効果を含むため成果も大きいと考えられるが、フィールドワークがワンショットサーベイになってしまい、十分な期間・調査が確保できないことや、言語の壁、費用負担などが課題として挙げられた。参加した学生の中には受講後韓国留学した学生もあり、学部段階から海外をフィールドとした授業の効果も少なからず見えた。今後も「海外教育演習」を展開させていく予定である。



2-2 集中セミナー

今年度は、日本語で開講する短期集中コースを2回に渡って開講している。その一つが「集中セミナーin 仙台」である。年次計画で提示したパイロットプログラムの一環として実施されたもので、7月22日～24日にかけて開催された。

授業は、「現代日本における青少年の心理社会的問題」をテーマとし、東北大学の教員によって開講された。

セミナー終了後は、アンケートをとおした授業評価を行っている（アンケート調査は神谷准教授が行っている）。

なお、サマーコースの詳細については、資料 2-2-1・2-2-2・2-2-3 を参照されたい。



アジア共同学位開発プロジェクト 集中セミナーin 仙台 募集要項

アジア共同学位開発プロジェクト「教育セミナーin 仙台」は、夏季休暇中に東北大学（日本）において、「現代日本における青少年の心理社会的問題」をテーマとしたコースを短期集中で受講するものです。このコースは日本の大学での生活体験・フィールドワークを通して日本に対する理解を深めるとともに、授業が日本語で開講され、日本語運用能力を伸ばし国際感覚豊かな人材を育成することを目指しています。

出願受付

- 受付期限： 2013年4月30日（火）15：00 必着
- 願書提出先： 東北大学大学院教育学研究科プロジェクト事務室（ajp-summer@sed.tohoku.ac.jp）
- 提出書類： ① 願書（<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp>）
② 日本語能力公式点数証明書のコピー（能力試験、J-Test など）
③ パスポートのコピー
- 応募資格： 教育学（教科教育を含む）を専攻する修士課程・博士課程および学部4年次の学生で、必要とされる日本語能力を有する者。
- 募集人数： 10名

選考および結果通知

- 選考方法： 本コースの趣旨にもとづき、提出書類にて選考する。
- 結果通知： 2013年5月9日（木）

出願および参加に当たっての注意事項

キャンセルは基本的に認められません。

プログラムの参加が決まった方は健康診断証明書および海外旅行傷害保険（英語証明書）を提出してください。

参加学生は開講されるコースをすべて受講することが求められます。

コース言語・期間

- 授業言語： 日本語
- 開講期間： 7月22日（月）～24日（水）

費用について

東北大学負担経費： 渡航費

参加学生負担経費： 宿泊費、生活費、海外旅行保険料、食費など

問い合わせ先

東北大学： アジア共同学位開発プロジェクト事務局

Tel&Fax +81-22-795-3756

Email ajp-summer@sed.tohoku.ac.jp

授業の概要

青年期という発達的特徴を踏まえたうえで、現代的な社会的変動と関連づけて日本の青年について理解するとともに、青年が抱える心理的諸問題へのアプローチの方略について知る。

到達目標

文化を超えた「青年期の特質」を踏まえたうえで、現代日本において生じている青年の諸問題について理解し、自国における青年問題との対比を通して、心理的諸問題の文化的影響について考察する力を涵養する。

授業の内容（日本語）

講義「日本の中高生の学び」

講義「現代日本における青年の心的特性」

講義「青年期における心理的諸問題」

講義「青少年への心理的支援のアプローチ」

フィールドワーク

総合討論

授業の日程（予定）

	午前		午後		備考
	I	II	III	IV	
22日（月）	開講式 オリエンテーション	講義（1）	講義（2）		
23日（火）	講義（3）		フィールドワーク		
24日（水）	講義（4）		総合討論	修了式 懇談会	

集中セミナーin 仙台 実施要項

1. 授業の概要

青年期という発達的特徴を踏まえたうえで、現代的な社会的変動と関連づけて日本の青年について理解するとともに、青年が抱える心理的諸問題へのアプローチの方略について知る。

2. 到達目標

文化を超えた「青年期の特質」を踏まえたうえで、現代日本において生じている青年の諸問題について理解するとともに、自国における青年問題との対比を通して、心理的諸問題の文化的影響について考察する力を涵養する。

3. セミナーの構成

本セミナーは3日間に、A)5つの講義、B)フィールド・トリップとしての高校訪問、C)学生交流会、D)発表会を行います。セミナーの最初に課題が提示されますので、自分なりにその課題についての問題意識を持ち、講義や学校訪問を行ってください。3日目には、C)学生交流会がありますので、講義や学校訪問などを通して疑問が生じた場合は、そこで日本人学生にインタビューをしてみてください。最後に、それらをまとめて、一人ずつ、課題について発表会でプレゼンテーションを行ってもらいます。

4. セミナーの課題

「本セミナーで学んだ日本の青年や学校の特徴について、自分自身が興味深いと思った点をいくつか挙げ、その理由もあわせて発表しなさい。その際、講義(2)～(5)の各テーマに即し焦点化したものでも、講義全体を通して体得した学びに基づくものでも、どのようなものでも構いません。発表時間(5分)さえ守れば、どのような形式でも構いませんので、自由な発想でまとめてください。

5. スケジュール

	午前		午後			
	I	II	III	IV	V	
22日(月)	開講式 オリエンテーション	講義(A-1)	講義(A-2)		講義(A-3)	
23日(火)	B)フィールド・トリップ (高校訪問)		講義(A-4)			
24日(水)	講義(A-5)	C)学生 交流会	発表会準備	D)発表会	総括と連絡 事項	修了式 懇談会

- 講義 (A-1) 「青年とはどのような時期か」(神谷哲司 准教授)
講義 (A-2) 「現代日本の学校から職場への移行」(三輪哲 准教授)
講義 (A-3) 「現代日本の青年の学習の特徴」(深谷優子 准教授)
講義 (A-4) 「現代日本における青年の心理学的特徴」(神谷哲司 准教授)
講義 (A-5) 「現代日本における青年期の諸問題と心理的支援」(若島孔文 准教授)
※詳細な内容に関しては、別紙の「講義概要」を参照のこと。

B)フィールド・トリップ：県立仙台東高校訪問：授業見学，教員懇話会

6. 発表会について

発表会では、「4. セミナーの課題」で示された課題について、本セミナーを通して学んだことをまとめて発表してもらいます。発表時間は、ひとり発表5分、質疑応答5分の10分間です。なお、発表に際しては、MS パワーポイント(2010)のスライド6枚程度にまとめること。細かな発表の形式は自由です。また、フィールド・トリップ等、滞在中に撮影した写真などを用いても良いですが、発表用のスライド作成に必要な機材(パソコン、デジタルカメラ等)は自分のものを持ってきて使ってください。

7. その他

- 初日(22日)の1限目には開講式、3日目の夕刻には修了式と懇談会が開催されますので、必ず出席してください。
- 開講式、オリエンテーション、講義(1)～(5)ならびに学生交流会、発表会、修了式はすべて306教室で行われます。修了式のあと、懇談会は大学生協の食堂で行われます。詳細は、その都度お知らせいたします。

受講者アンケートによる「集中セミナーin 仙台」評価

文責 神谷 哲司

受講者アンケートは受講者のタイプに合わせて2種類行った。海外の大学から参加した留学生たちには、5件法による段階評定を10項目含めた評価アンケートに回答してもらった。もう1種類は、本セミナーにおいて学習アテンダントとして受講した本学に在籍する学生(留学生含む)を対象とした自由記述主体の振り返りアンケートである。以下、これらの結果の概要を示す。

A) セミナー参加学生による「授業評価アンケート」

【講義、セミナー全般に関して】

まず、5段階評定で行った項目について見てみよう。

● 評価の高かった項目

Q1-1「講義の内容はよく整理準備されていたと思う。」、Q1-5「このセミナーが英語ではなく、日本語で行われたことは意義のあることだと思う。」、Q1-9「全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思う。」の3項目については、参加者10名がすべて「あてはまる」と回答していた。

● 比較的、評価の高くない項目

一方で、Q1-2「教師の話す日本語は理解しやすかったと思う。」に「あてはまる」としたのは5名と半数しかなく、「どちらともいえない」に回答したものが1名いた。また、意図的かどうかはわからないが、Q1-4「シラバスに記載されている「授業の目的」は達成されたと思う。」には無回答が1名おり(「あてはまる」は6名)、セミナー自体の評価が高い一方で、日本語による講義は十分に講義の目的を達成しづらいところがあったようである。同様に、Q1-3「このセミナーの講義数や活動内容は適切であったと思う。」は、「あてはまる」6名、「どちらかといえばあてはまる」4名であった。

上記のように、講義やセミナー全体としての評価は高く、日本語で行ったセミナーの意義も高いことが示されたが、一方で、その実質的な成果とすると、日本語の難しさに直面する場面もあり、達成度はすべての学生で満足のいくものとは言えない状況であるといえよう。また、自由記述を見てみると、改善点として期間の短さ、スケジュールのタイトさなどに関する指摘があり、かなりあわただしい中で、講義そのものが未消化のまま終わってしまったというところなのかもしれない。

【高校訪問について】

Q1-6「2日目の学校訪問で、日本の高校が見学できてよかったと思う。」は、「あてはまる」8名、「どちらかといえばあてはまる」2名であり、おおむね高評価であったといえよう。

自由記述に目を向けると、さまざまな見学先があげられている中でも、やはり「高校」に関する記述が複数見られており、訪問先としても適切であったことがうかがわれる。

【学生間交流について】

Q1-7「他大学から参加した学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築すること

ができたと思う。」は、「あてはまる」8名、「どちらかといえばあてはまる」2名、Q1-8「東北大学の学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う。」は、「あてはまる」7名、「どちらかといえばあてはまる」3名であり、概ね交流が図られていたと考えられる。

自由記述の中には、「学生と先生たちが一緒に討論した方がもっといい」との指摘もあるように、講義時間内により学生間の交流を持つようにすることで、今回以上の交流の成果が得られるものと考えられる。

【東北大学への心象】

Q1-10「東北大学に親しみを持てるようになった。」においては、「あてはまる」9名、「どちらかといえばあてはまる」1名であり、おおむね高評価であったといえよう。

B)学習アテンダントによる「振り返りアンケート」

学習アテンダントの振り返りを見ても、参加学生と同様に過密スケジュールを指摘する声が多くみられるがそれ以上に、参加学生との交流時における言葉の壁を指摘する声が多く見られている。今回のセミナーにあたっては、日本語での講義を行うことを前提として実施されたが、事前に日本語におけるコミュニケーションだけで円滑に進むかどうか不安であるとの指摘がなされていたため、学習アテンダントに本学に在籍する2名の留学生(韓国, 中国1名ずつ)を配置していた。子の振り返りアンケートにも、この2名の活躍によりよりスムーズに交流が進んだことが複数、指摘されており、日本語のみでの交流の困難さが示されているといえよう。

【全体的なまとめ】

全体的に、短期間における過密スケジュールによる消化不良の側面は否定できないものの、総じて参加した留学生の満足度は高く、日本語で行ったことの意義も評価されていたと考えられる。一方で、日本語「だけ」で、この企画が成就したかといえば、本学の留学生である2名の学習アテンダントの活躍ぶりを踏まえると、必ずしも楽観できない部分は残るであろう。すなわち、「日本語で」講義を受け、ディスカッションを行い、学びを深める、といった本セミナーの趣旨ではなく、「日本語を学ぶ」機会として本セミナーが活用されているのではないかというとらえ方である。その意味で本セミナーの成果は、もちろん、一定程度評価されてしかるべきだとは考えられるが、少々、頼りない感じもまた残ってしまっているように感じられる。

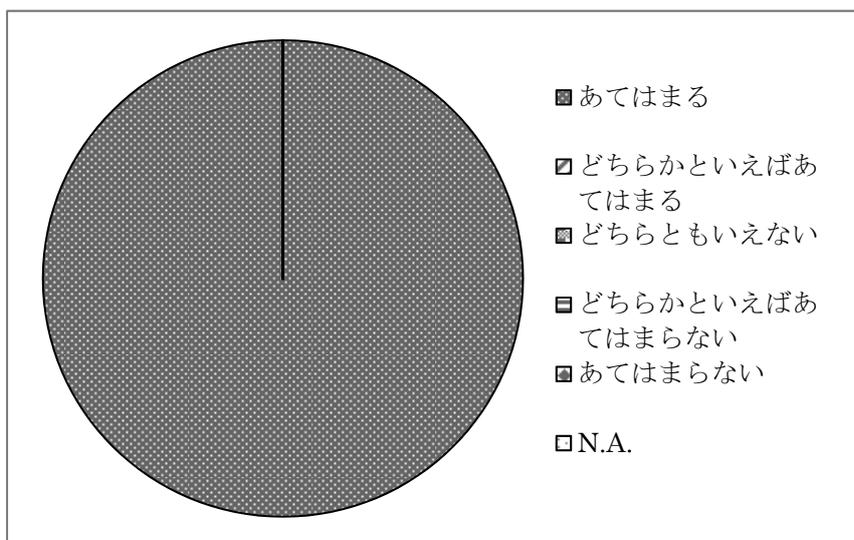
一方、学習アテンダントの感想を眺め、かつ、本セミナーにかかわった一教員の所感として述べるのであれば、本セミナーを通して、本学学生の海外の学生との交流に対する意欲の上昇が見られていることは成果として指摘できよう。「英語」でなく、日本語での参加を前提として学習アテンダントに臨み、現実としては言葉の壁はあったものの、参加したことで多くの学びを得ている姿がアンケートからも推察でき、その意味で事前の「語学」に関する障壁の低さが意欲を促進させるのではないかと考察もなされるのではないだろうか。そうした予想を持ちえたことも、本セミナーの成果の一つであると考えられる。

集計データ編

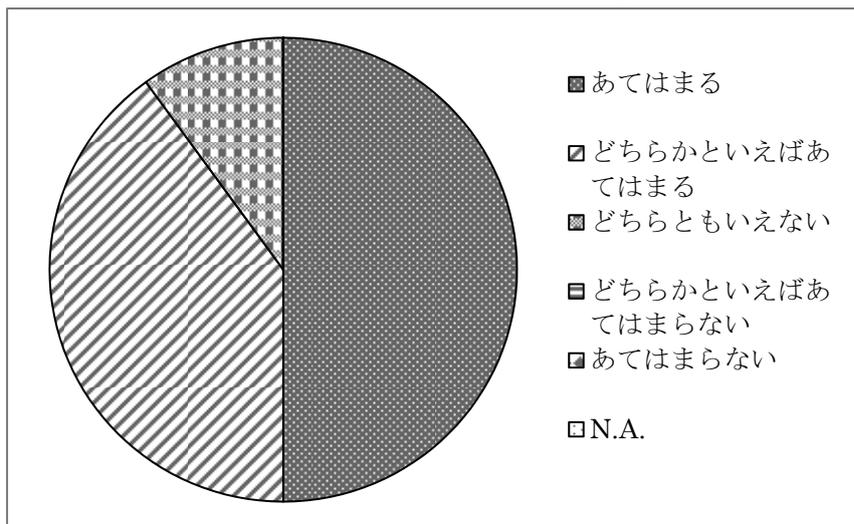
海外からの参加学生対象「授業評価アンケート」

Q1. 以下のそれぞれの質問に対して、あなたのお気持ちを伺います。それぞれの質問について、あてはまる(5)～あてはまらない(1)の中から、もっともあてはまるもの1つに○をつけてください。

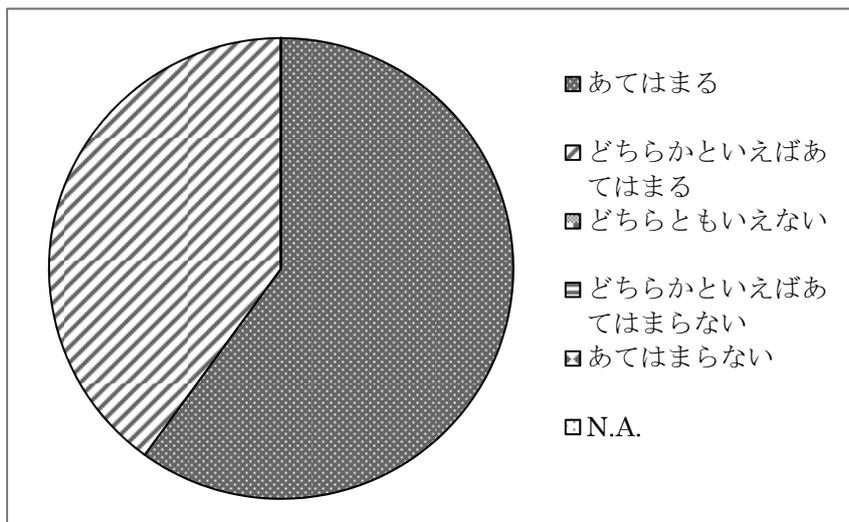
1 講義の内容はよく整理準備されていたと思う。



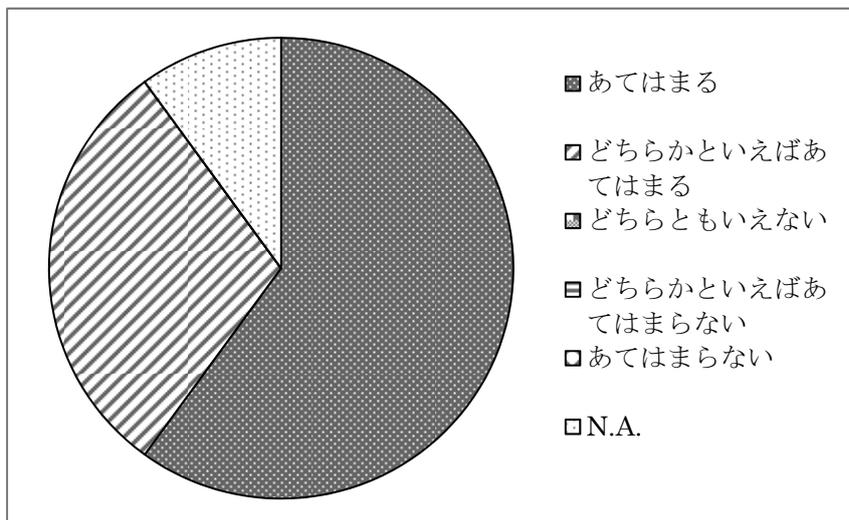
2. 教師の話す日本語は理解しやすかったと思う。



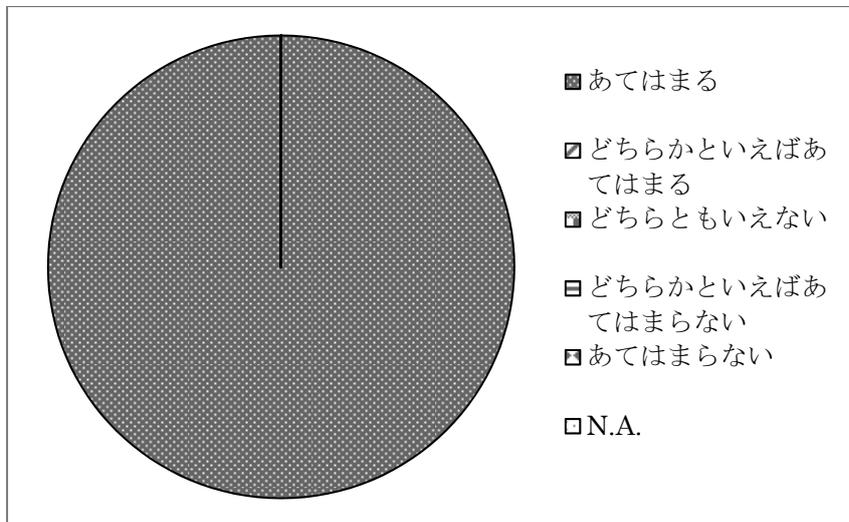
3.このセミナーの講義数や活動内容は適切であったと思う。



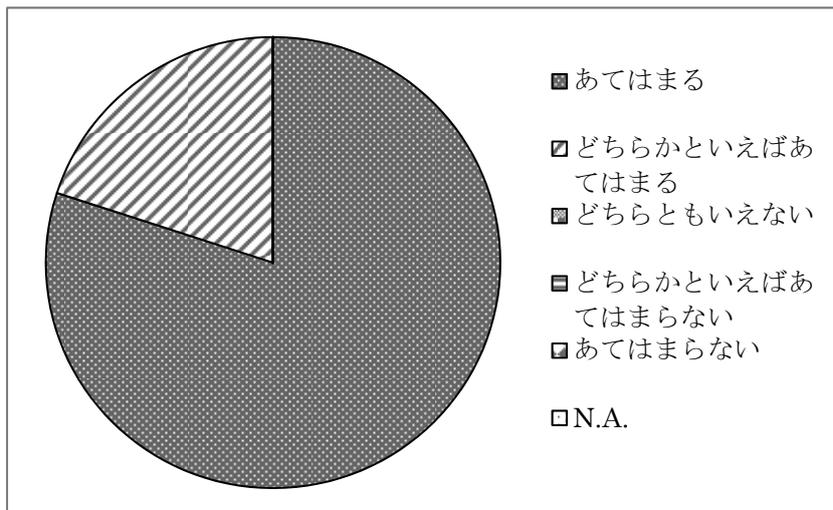
4.シラバスに記載されている「授業の目的」は達成されたと思う。



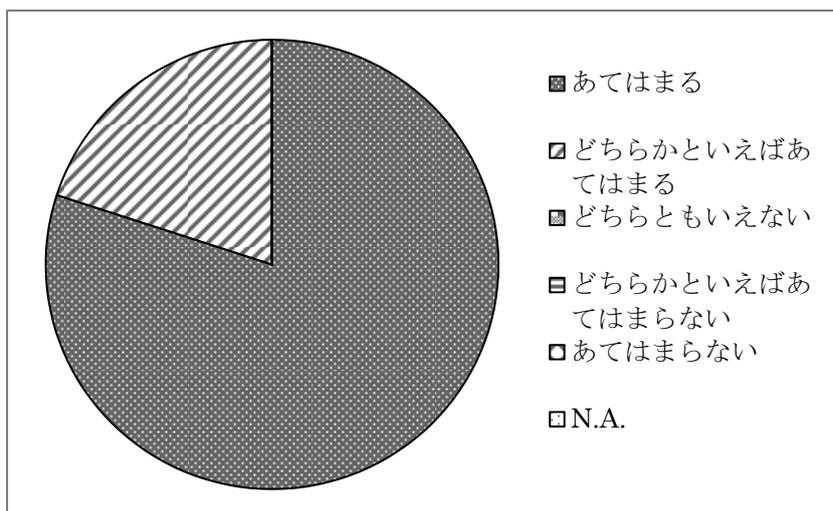
5.このセミナーが英語ではなく、日本語で行われたことは意義のあることだと思う。



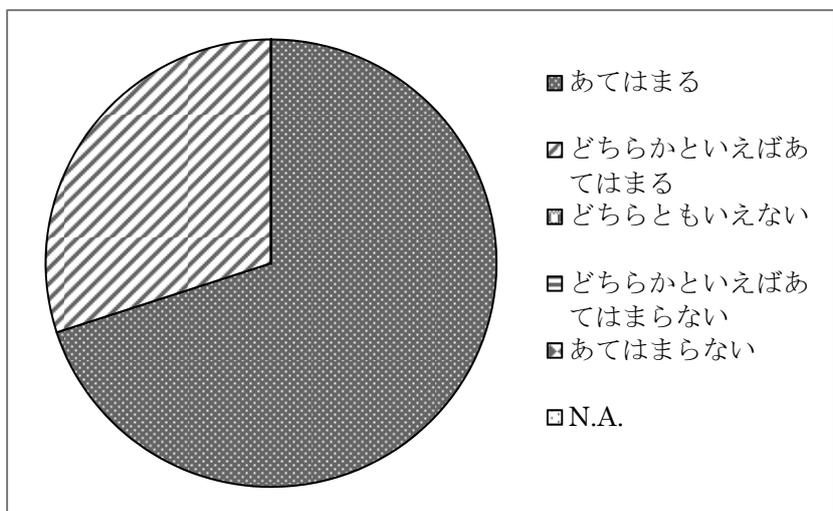
6.2 日目の学校訪問で、日本の高校が見学できてよかったと思う。



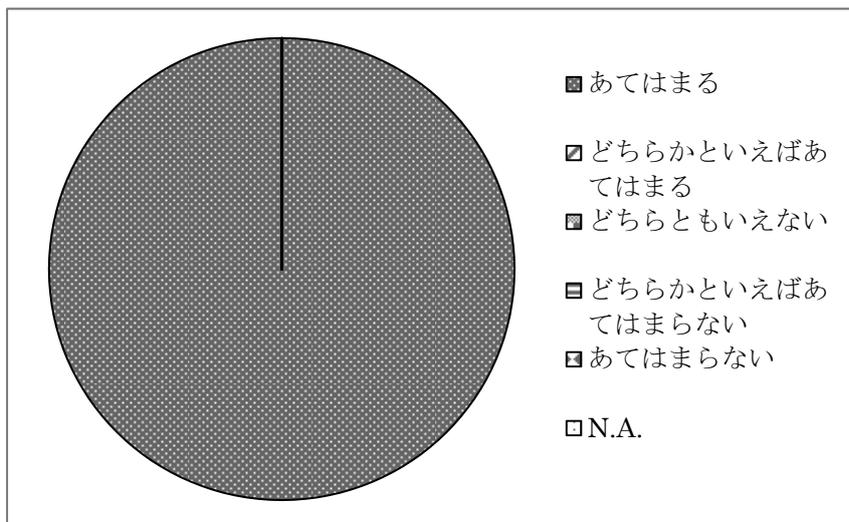
7.他大学から参加した学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う。



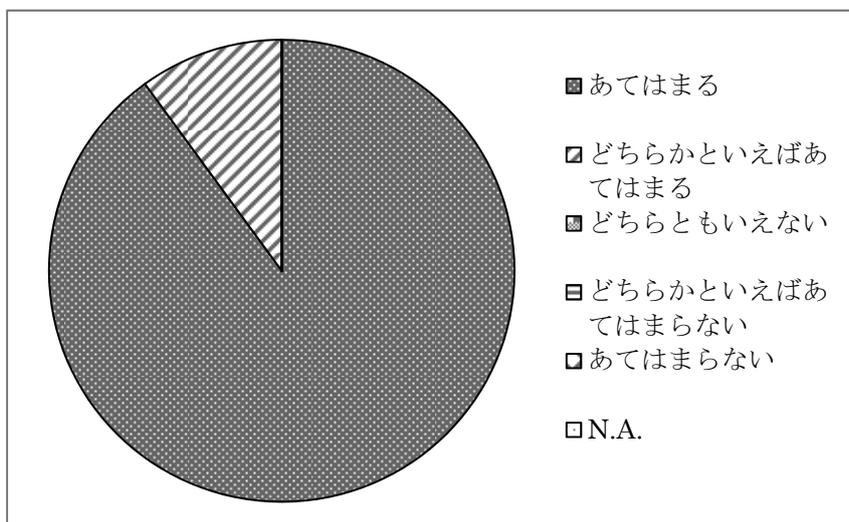
8.東北大学の学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う。



9.全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思う。



10.東北大学に親しみを持てるようになった。



Q2 このような短期間のセミナーで聞いてみたい講義のテーマはどのようなものですか。

- ◇ 古くから日本伝統の持つタイプと、一番新しく出た事
- ◇ いじめとか学校安全とか事件後の心理援助とかなど
- ◇ 東アジアの教育制度と政策の比較
- ◇ 現代日本の青年期の諸問題と解決方法です。
- ◇ 自分の研究に関するもの
- ◇ まずは日本の教育学と心理学の現実という迷いです。つぎはいくつか日本人の研究者皆盛んしている研究範囲をちょっとふかく説明するのがいいと思っています。
- ◇ 東北大学教育研究科の最近の研究について講義があります。
- ◇ 日本の高等教育についてききたいです

(N.A. 2名)

Q3 このような短期間のセミナーでフィールド・トリップとして行ってみたい場所や活動はどのようなものですか。

- ◇ 日本の特色ある部分。例えば幼稚園より保育園です。普通の高校より、いい高校、或いはよくない高校です。
- ◇ 東北大学のほかのキャンパスの図書館など、大学生と一緒に多くの活動に参加します。
- ◇ 高校がいいと思う。
- ◇ 各種の小学校、中学校、高等学校に見学したいです。
- ◇ 日本の特色がある場所。
- ◇ 仙台の場合はもし宮教大とかもっと数が増える高校への見学ができれば、もっとすばらしいと思っています。
- ◇ 公民館に行きたい。
- ◇ 仙台博物館へ参観する
- ◇ フィールド・トリップを通していろんなことはおしえてもらって、ただ一日全休に行ってみたいです。

(N.A. 1名)

Q4 この集中セミナーに対する感想・意見・要望などを自由に記入してください(裏面にご記入ください。また、日本語でうまく表現できない場合は、母国語で記入してください。)

- ◇ 私はちょっとスケジュールについては改善してほしいと思います。最初の日は移動などで大変疲れになり、一日目に講義の連発は効率良くないと思います。
- ◇ 講義でそんなにいっしょうけんめいで授業をやった先生たちに言いたいのは「ほんとうにありがとうございました。」もう一度講義の授業に出ていきたい。
- ◇ セミナーの **schedule** と授業内容早めに渡せばいいと思う。
- ◇ こんな集中セミナーに参加できるのはとてもうれしいです。日本文化について理解が深くなります。日本教育の実力と問題が考えています。同時に、自国における青年教育を真剣に思考できます。3日間で日本語で行われた講演を参加いたしましたのはとても楽しいです。ほんとうにありがとうございました。みなさん、お疲れさまでした。
- ◇ 観光の時間がない。残念ですね！しかしいろいろな獲得がある。
- ◇ まず、東北大学の皆様のご協力を感謝しております。この機会を利用して、しみじみに日本の教育を感想でき、とてもおもしろく意義があります。もし、チャンスがあったら、ぜひもう一度参加したいです。
- ◇ 日本の先生達が本当に親切です。それともやさしい。もっとゼミのような討論とか交流を時間長くさいていいとお思います。先生を中心として授業するのはいいけれども、ある課題とかトピックと中心として学生と先生たちが一緒に討論した方がもっといいと思います。
- ◇ 今回本当にありがとうございました。短期間ですが楽しい時間です。
- ◇ 全体的にはよかったです、短すぎだと思えます

(N.A. 1名)

★学習アテンダント「振り返り」アンケート

問：3日間の学習アテンダントを通じて、どのようなことを感じましたか。今後このようなプログラムを行うにあたって、改善すべき点や、お気づきの点、ご提案などありましたら、以下の欄にご自由にご記入ください。

Aさん

講義がとても分かりやすく、既習事項の内容も改めて勉強になりました。若い教員の方々だからこそ分かりやすく伝える講義ができたのではないかと思います。

3日間スケジュールがびっしりで、さらに日本語による授業ということで留学生の皆さんはとても疲れたと思います。しかし密の濃い非常に勉強になった3日間だったのではないのでしょうか。日本語によるプレゼンもなかなか大変だったと思いますが、素直にすごいと思うものばかりでした。

学習アテンダントとして、私たち（私）がもしも逆の立場になったら、英語（中国語、韓国語）でこのようなプログラムに参加できるだろうか？難しいだろうなあ・・・（語学力の問題で）と内省した次第であります。神谷先生お疲れ様でした。

Bさん

今回のセミナーを通じて、自分では当たり前と思っていた日本の様々な制度について客観的な視点で見つめ直すことができました。

1日目は留学生の皆さんとの飲み会がありました。日本人と留学生とのコミュニケーションは多くとることができましたが、学習アテンダントの側でももう少し中・韓でのコミュニケーションができるよう配慮すべきだったと思いました。留学生の方が同じ国でかたまってしまふ場面があったことが残念です。

今回は貴重な機会を設けて頂き、ありがとうございました。

Cさん

自由時間が短すぎて、留学生たちは疲れるし、買い物や見物などをするのも難しいし、配慮してほしいですね。

講義は留学生たちにとってやや難しかったと思います。もっとわかりやすくしてほしい一方、講義より日本人学生さんとの交流会を長くしたり、ホームステイを設定してもらったりしたほうが楽しくなるし、有意義な時間になりそうです。

来日の前に留学生たちの聞いてみたいテーマについて調査し、それに基づいて設定し、また授業のテーマや資料を事前に留学生たちに送って予習してもらったほうが先生や学生互いにいい気がします。

Dさん

日本語で表現することは難しいと感じました。留学生の方々が、日本語をしっかり勉強してくれてきたので、何とかできました。やはり、通訳をしてくれる人は必要だと思います。説明に使う言葉の選択など、アテンダントとしても十分に勉強する機会だと思いました。

高校の現場に行く機会は、やはり実体験として貴重なものだと思うので、今後も続けていったほうが良いように思いました。

Eさん

現地の学生と通訳できる日本への留学生か教授がいれば助かる。今回はいて助かったように思いました。

日程がやや過密だったので、少し余裕があればよかった。観光する時間もとれたらよかった。

Fさん

他の東アジアの国々の話を聞くことができておもしろかった。

仙台東高校は特殊な高校すぎる印象があります。

Gさん

張さん、ユさんがいてくれて、本当に助かった。特に休み時間などに話をしても、なかなか意思疎通がうまくできなかつた。

お昼時間をずらしてほしかった。使い方を説明したりするのがたいへんだった。

若島先生のように、適宜通訳を入れたほうがよかったかもしれない。映像や通訳の入った先生の話の方が理解されていたと思う。

1 日目に食事会を開いたのは、アテンダントと留学生が仲良くなるよいきっかけになったと思う。

交流会が意外と盛りあがっていて、もっと時間をとってもよいくらいだった。

Hさん

内容はとてもよかったと思いますが、スケジュールがきついし、受講生が内容を理解し、自分のものにする時間が少なかつた気がします。また、東北大学の学生さんもアテンダントではなく、受講生として入り、勉強すると、自分の研究への知見を広げるいいチャンスになれるのではないかと思います。

2-3 サマーコース

今年度も昨年度に引き続き、「サマーコース」を開催した。これは年次計画で提示したパイロットプログラムの一環として実施されたものであり、8月21日～28日にかけて開催された。

「アジアの子ども」と「アジアの学校」をテーマに東北大学大学院教育学研究科と連携校の教員が共同で開講している。

授業は英語で開講され、講義及びフィールドワーク、ワークショップの形式で行われた。参加学生は、連携大学（北京師範大学、南京師範大学、国立政治大学、国立台湾師範大学）から各大学1～2名ずつ選抜した。今年度の受講生は8名で、昨年度の11名より少し減った。授業担当教員は連携校の李相旻准教授、陳陳准教授、朴仁雨教授（高麗大学校）、周祝瑛教授（国立政治大学）と、東北大学の上埜高志教授、加藤道代教授、安保英雄准教授、谷口和也准教授、小川佳万教授である。

サマーコース終了後、アンケートをとおした授業の評価を行った。アンケート結果については、これからのプログラム開発に生かす予定である（アンケート調査担当は安保英雄准教授である）。

なお、サマーコースの詳細については、資料 2-3-1・2-3-2・2-3-3・2-3-4 を参照されたい。



アジア共同学位開発プロジェクト 2013 年度 サマーコース募集要項

アジア共同学位開発プロジェクト「2013 年度 サマーコース」は、夏季休暇中に東北大学（日本）において、「アジアにおける教育」をテーマとしたコースを短期集中で受講するものです。このコースは日本の大学での生活体験・フィールドワークを通して日本に対する理解を深めるとともに、授業が英語で開講され、英語運用能力を伸ばし国際感覚豊かな人材を育成することを目指しています。

出願受付

- 受付期限： 2013 年 4 月 23 日（火）15：00 必着
願書提出先： 東北大学大学院教育学研究科プロジェクト事務室
(ajp-summer@sed.tohoku.ac.jp)
提出書類： ④ 願書 (<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/en/>)
②英語能力公式点数証明書のコピー（TOEFL-ITP、IELTS など）
応募資格： 教育学（教科教育を含む）を専攻する修士課程・博士課程および学部 4 年次の学生で、必要とされる英語能力を有する者。
募集人数： 14 名（各大学 2 名）

選考および結果通知

- 選考方法： 本コースの趣旨にもとづき、提出書類にて選考する。
結果通知： 2013 年 5 月 9 日（木）

出願および参加に当たっての注意事項

キャンセルは基本的に認められません。
プログラムの参加が決まった方は健康診断証明書および海外旅行傷害保険（英語証明書）、レポート（共通題目：アジアの子どもと学校 英語 2,000words 以内）を提出してください。
参加学生は開講されるコースをすべて受講することが求められます。

コース言語

授業言語： 英語

費用について

- 東北大学負担経費： 渡航費
参加学生負担経費： 宿泊費、生活費、海外旅行保険料、食費など

Summer Course 2013 Timetable					
21-Aug	10:00~	Opening Ceremony			Conference Room
	10:00~10:05	Welcoming Remark by the Dean of Graduate School of Education			
	10:05~10:10	Opening Remark by the Director of Asia Joint-Degree Project			
	10:10~11:10	Orientation (TANIGUCHI, Kazuya)			
	11:10~12:00	Guided Tour of Graduate School of Education			
	12:00~13:00	Lunch			
Children and Youths in Asia					
21-Aug	13:00~14:30	UENO, Takashi	Tohoku Univ.	Mental Health	#306
	14:40~16:10	KATO, Michiyo	Tohoku Univ.	Psychological Problems and Support System : The Case of Students in Japan	#306
	16:10~16:50	Procedure: Travel Expenses			#306
	16:50~17:50	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
22-Aug	08:50~10:20	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Actual State of Japanese Jobless Youth	#306
	10:30~13:00			Observation of Support Center for NEET "WATAGE"	WATAGE
	13:00~15:15			Observation of Sendai Child Consultation Center	Sendai Child Consultation Center
	15:15~17:30			Campus Tour	Katahira Campus
23-Aug	08:50~10:20	LEE, Sangmin	Korea Univ.	Psychological Issues of Korean Students	#306
	10:30~12:00			School Counseling Approach in South Korea	
	13:00~14:30	CHEN, Chen	Nanjing Normal Univ.	Intergroup Attitudes of Chinese Migrant Children : The Association with Parenting and Peer Relationship	#306
	14:40~16:10			Mental Health of Chinese Adolescents: A Social Change Perspective	
	16:20~17:50	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
24-Aug	08:50~10:20	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Students Group Work to Prepare for the Presentation	#306
	10:30~12:00			Presentation and Questionnaire	
25-Aug	Free Day				
Schools in Asia					
26-Aug	08:50~10:20	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Schools in Japan 1	#306
	10:30~12:00			Schools in Japan 2	
	13:00~16:30			High School Visit	Jonan High School
	17:00~18:30			Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
27-Aug	08:50~10:20	PARK, Inwoo	Korea Univ.	Schools in Korea 1	#306
	10:30~12:00			Schools in Korea 2	
	13:00~14:30	CHOU, Chuing Prudence	National Chengchi Univ.	Schools in China and Taiwan 1	#306
	14:40~16:10			Schools in China and Taiwan 2	
	16:20~17:50	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
28-Aug	08:50~10:20	OGAWA, Yoshikazu	Tohoku Univ.	Asian Schools : Comparative Perspective 1	#306
	10:30~12:00			Asian Schools : Comparative Perspective 2	
	13:00~16:00	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Presentation	#306
	16:00~16:20	Questionnaire			#306
28-Aug	16:30~	Closing Ceremony			Conference Room
	16:30~16:40	Closing Remark by the Dean of Graduate School of Education			
	16:40~17:00	Confer the Certificate			
	17:30~19:30	Party			Kitchn Terrace Couleur

受講者アンケートによるSummer course 2013 評価

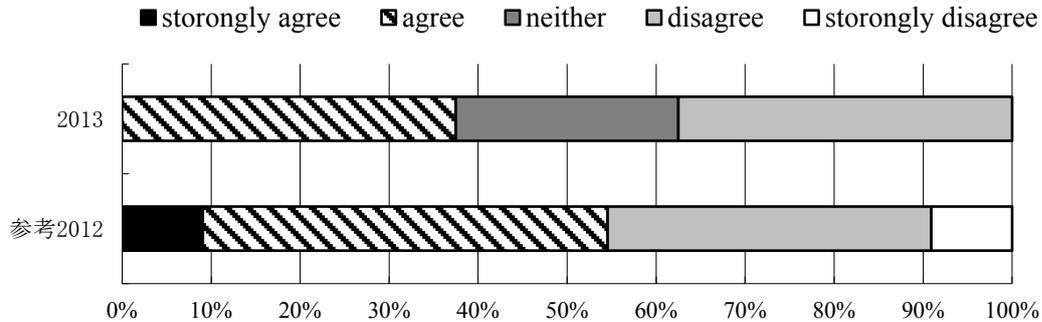
- 講義
 - おおむね好評である（授1-20）。8割以上の者が講義に対し、包括的で（全A5）、自身の研究にとって有用であり（全A6）、よく準備されていたと考える（全A7）。
 - しかしながら、コマ数（30コマ）については、賛否拮抗しており（全A1）、反対の者は、より少ないコマ数を希望している（全A2）。
 - また1日当たりの授業時間数（5コマ：450分）についても、やや否定的であり（全A3）、より短時間を希望する者が多い（全A4、全A10、全D8、全E）。
 - 授業に対する評価は、昨年度よりおおむね上昇している。
 - 他の希望としては、以下のような事項がある（全A8-A10、授21）。
 - ◇ 受講生の興味に沿った内容（教育政策、入試、体育、3.11後の対応）
 - ◇ ディスカッション、より親密になる機会
 - ◇ より体系だった講義
 - ◇ 韓国人学生の参加
 - ◇ 英語の発音向上
- 施設訪問・学校訪問
 - 全員が訪問を有意義と感じ（全B1）、来年度も行うべきとし（全B3）、大変好評である。
 - 他の要望としては、以下のようなものがある（全B3-4、全D7-8、授21）
 - ◇ 教育施設
 - 幼稚園
 - 小学校
 - 公立学校
 - 文科省
 - 他大学
 - ◇ 文化体験
 - 著名な観光施設
 - 伝統的文化的な施設
- 接遇
 - 回答者全員が、TAに関し肯定的な評価をし、ネットワークの形成ができたと評価している。（全C1、全D5-6）。
 - 一方、ホテルに関しては、賛否両論であり、不満の多くは禁煙部屋を利用できなかったことに起因する。また、空港間への送迎を希望する者もいた。ホテルへの低評価は今年の特徴である。
- 全体的なスケジュール
 - 8日間という日程に関して、肯定的な評価は6割に留まり（全D1）、より長期のゆったりとしたスケジュールを望む者がいる（全D2）。
 - 行事の数としては、8割が適当と考えるが（全D3）、より多くの自由時間を望む者も多い（全D4）。

2013 Summer course 全体評価(全)

● 回答者8名

A. Lecture (children and youths & school education in comparative perspective)

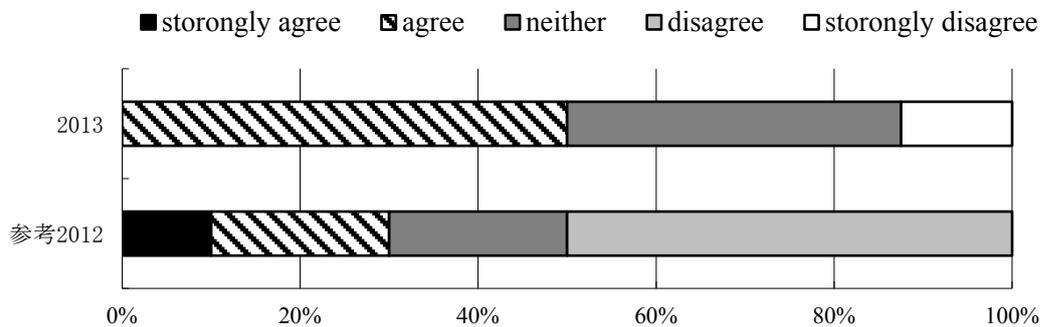
1.The number of lectures (30 lectures) was appropriate.



2.What would be the appropriate number of lectures for this program?

20 lectures : 3名、20-24 lectures : 2名、25 lectures : 2名、無記入1名

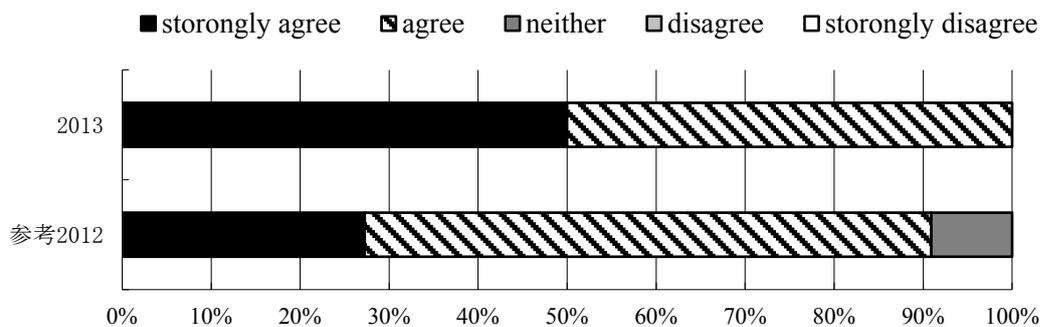
3.The length of a lecture (450 minutes/day) was appropriate.



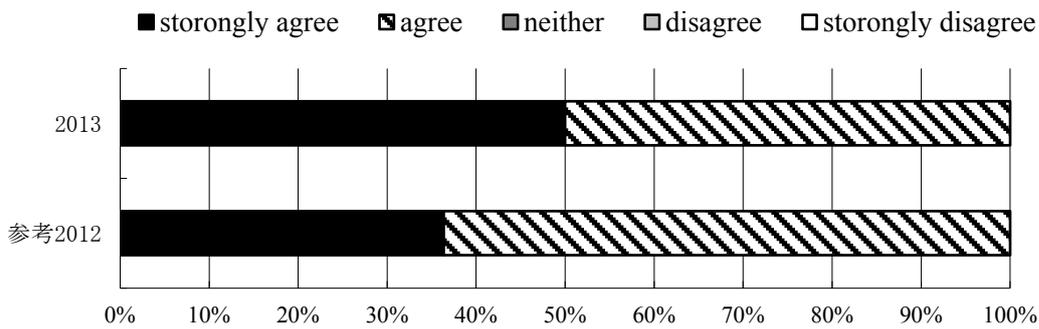
4.What would be the appropriate length of a lecture? _____ minutes per day.

300 minutes : 2名、336 minutes : 1名、400 minutes : 2名、無記入3名

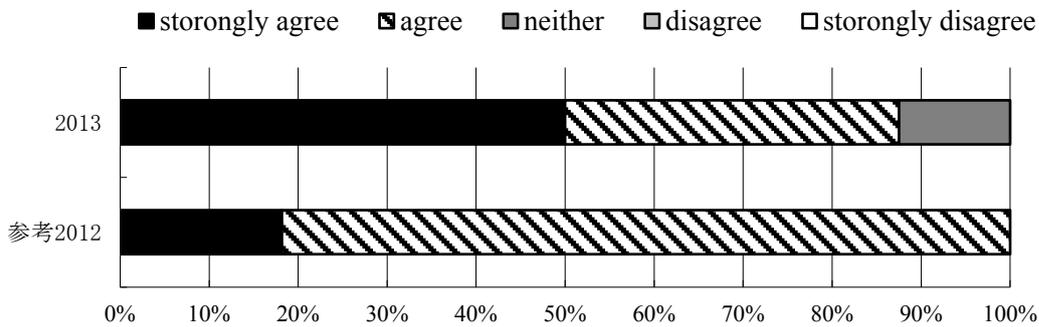
5. The content of lectures was comprehensible.



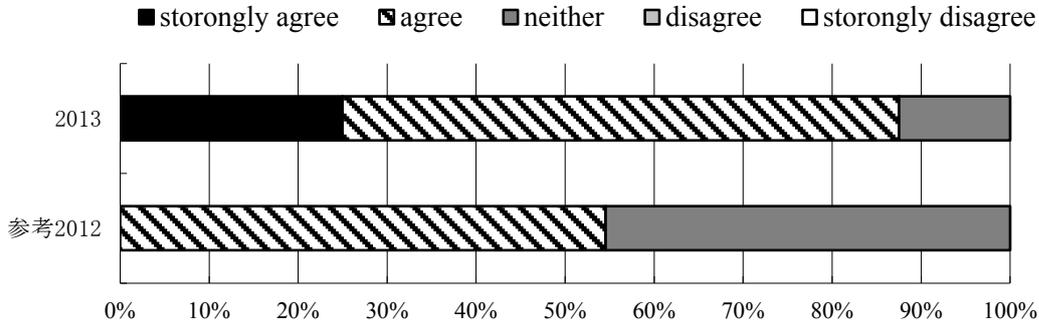
6. Information covered in the lectures is useful to my study.



7. In general, lectures were well-prepared.



8. Sufficient time was allocated for question and answer.



9. What other types of lectures you wish you could have taken?

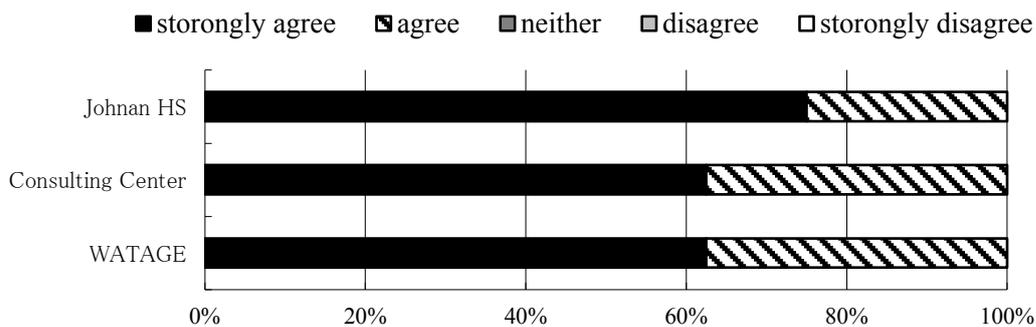
- According the major of attence students, the summer course should choice professors be good at there
- Students own problems physical education
- Education Policy
- Educational Administration
- Asia Education Policy more
- More related to the topic of youths and schools in Asia
- After march 11, 2011, how the JP react and how do they think about the nuclear will construction.
- Sharing, discuss and exchange.

10. Please state briefly if you have any comments on these lecture series.

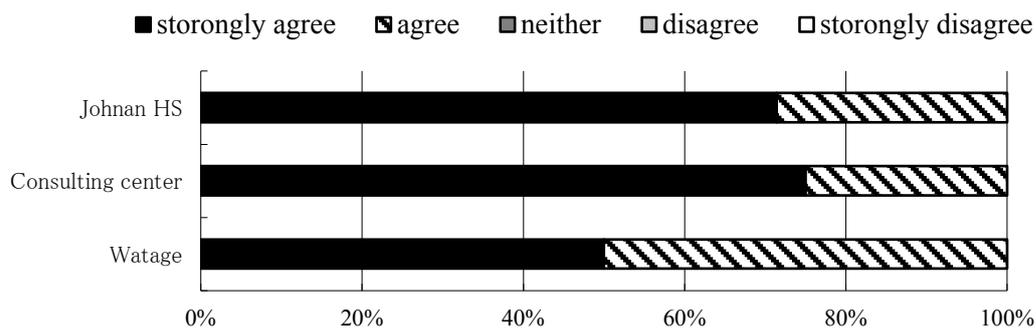
- The timetable is so tightly. I feel very tired during the course, but the experiences is very good, hope next semester can change the timetable in better way.
- a hale long
- A little bit too long per day
- It is very plentiful of these lecture, but I think maybe increase more kind of cultural exchange is better.
- I'd like to establish a system for on the lectures, so, more relationship is need.
- More chance of students and teacher get closer will be hight pleasure !
- All the lectures were inspired me.
- There are very good. maybe in the future, the projects can last longer. maybe one month.

B. Visit to facilities and high school

1. Visiting was meaningful.



2. Visiting should be a part of the next year's this program.



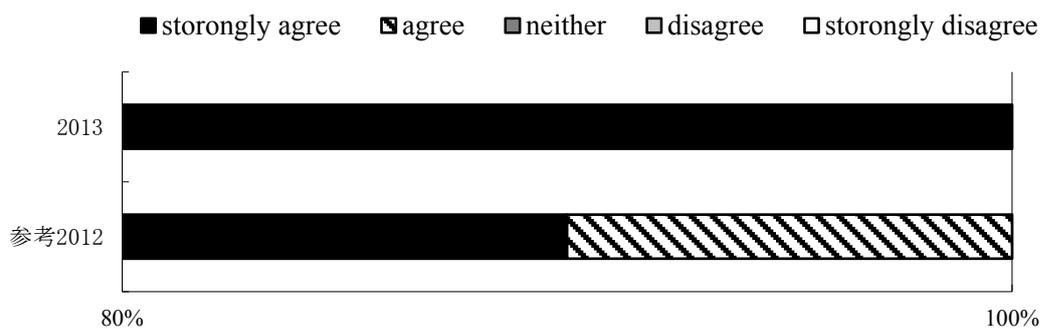
3. What other site and activity did you wish to visit and try?

- Famous attraction to visit
- Visit more kinds of school, esp public school.
- Japan's government department of education.
- Common senior high school
- Other university in class

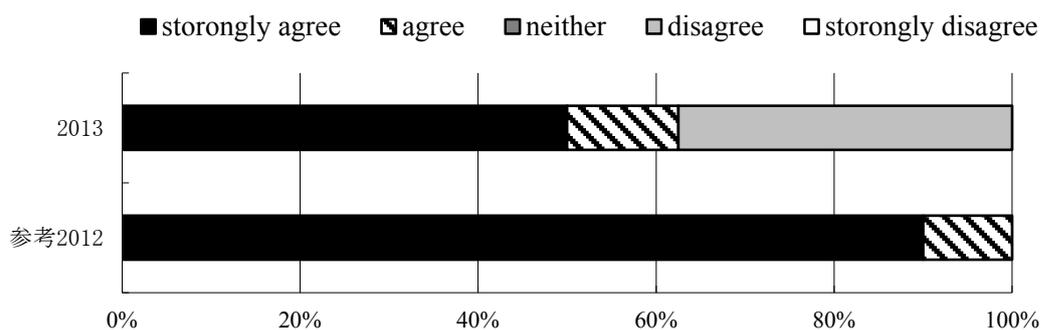
- Public high school
 - Kindergarten, primary school, etc.
4. Please state briefly if you have any comments on visiting high school.
- Maybe take longer time is better because we can know deeper, the time too short.
 - More physical sports, less homework, too heavy when 3rd year
 - I very like this field trip to visit high school, I think it's very meaningful
 - I think it is meaningful to visit Japan's high school, and have communicate to high school student.
 - I prefer the communication with students in senior high school, is more relax without the attendance of professors and teachers.
 - no, good
 - The students are so shy and lonely.

C. Accommodation

1. Volunteer students were kind and pleasant persons.



2. Stay at Hotel Bel Air Sendai was comfortable.



3. Please state briefly if you have any comments on the accommodation.

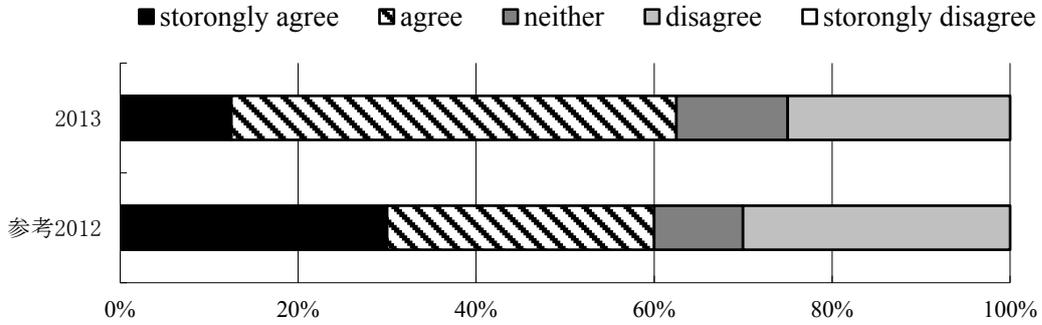
- Very nice, natural views so wonderful !
- We live in the area of "smoking area". It makes me feel uncomfortable.
- The hotel environment is uncomfortable, because the hotel assigned us to the smoking area.
- I hope that the transport from hotel to airport and airport to hotel is arranged especially

ally when we leave here.

- Please arrange the non-smoker in non-smoking room.

D. Overall Schedule

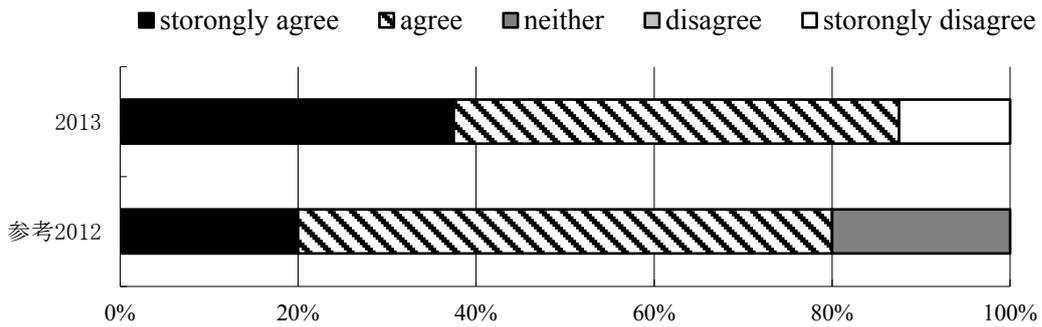
1. The length of the program (8 days) was appropriate.



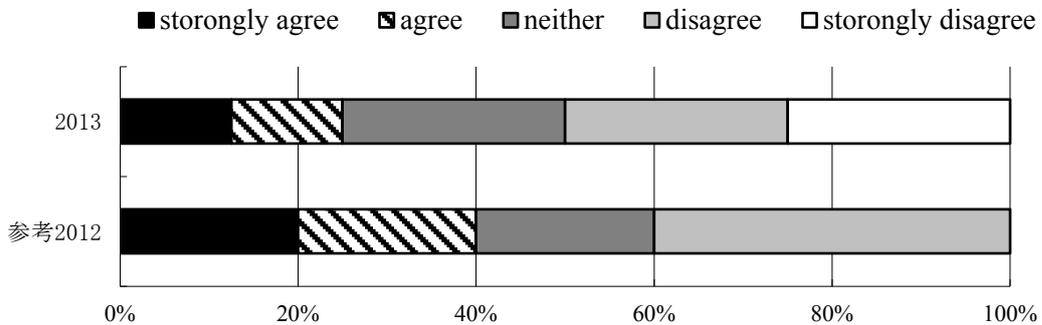
2. What would be the appropriate length of the program? _____ days

10 days:2名, 14-15 days:1名, 15 days 1名

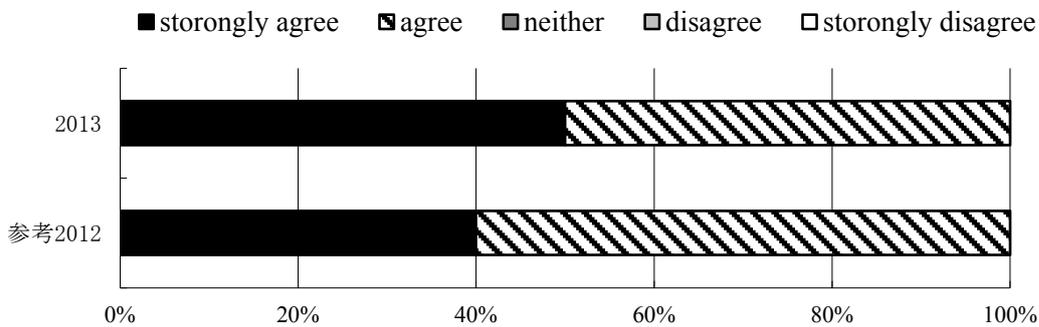
3. The number of activities was appropriate.



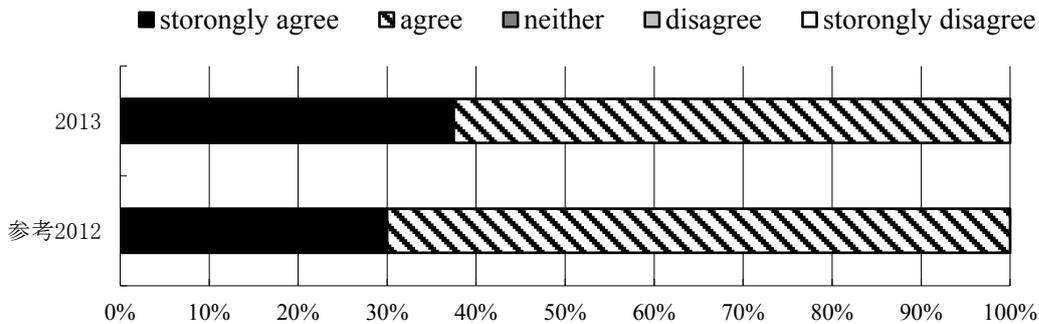
4. Enough free time was scheduled during this program.



5. I was able to develop human networks with students from other universities.



6. I was able to develop human networks with Tohoku university students.



7. What other activities did you wish to have in this program?

- Traveling together
- Visit more schools
- Tourist to nearby scene
- Much more interaction of cross - country experiences.
- Workshop

8. Please state comments on this program schedule if you have any.

- Not to tight
- Not really, nice TA
- The program schedule is too long a day, maybe next year it can be cut down and end of the class at 4 pm. (We don't have enough time to prepare presentation and city tours)
- More free time to prepare the presentation. And make a schedule certainty.
- Please give us more more day to have rest, it's too tight to learn so much things.

E. If you have any other comments on this program, please state below.

- Hope we can have change back to this course
- Have a very good line staying in Sendai
- Thanks for all kind treats to us !
- More foreign students (Korean, Japan, other Asian Countries) is preferred
- Thanks all the faculty in Tohoku University to set up the arrangement. The professors did the great job on their lectures. One recommendation the project might not be filled in with lectures, coz we feel it really too much schedule and lessons during this project. Till the second week, we were too tired. We came here for exchange the experiences, rather than study as a college or high school kid. If could be casual way to integrate our background turn into the effective concepts.
- You`are doing well.

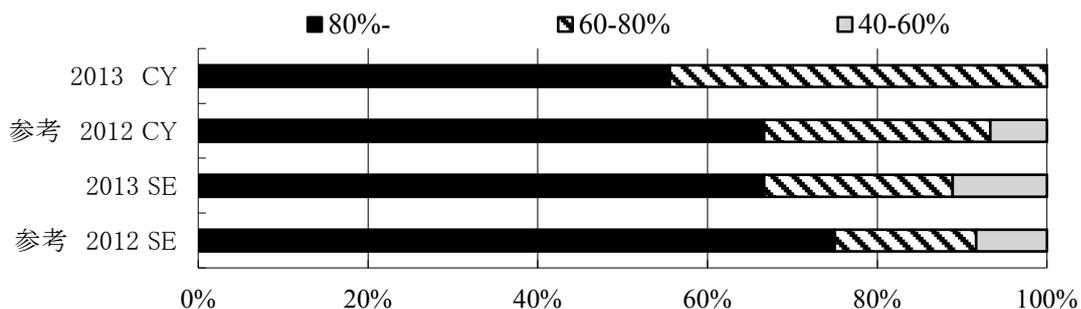
2013 Summer course 学生による授業評価 (授)

開講科目

- Children and Youth (以下、CY。回答者：9名：外国人学生8名、日本人1名)
- School Education in comparative perspective (以下、SE。回答者はCYと同様)

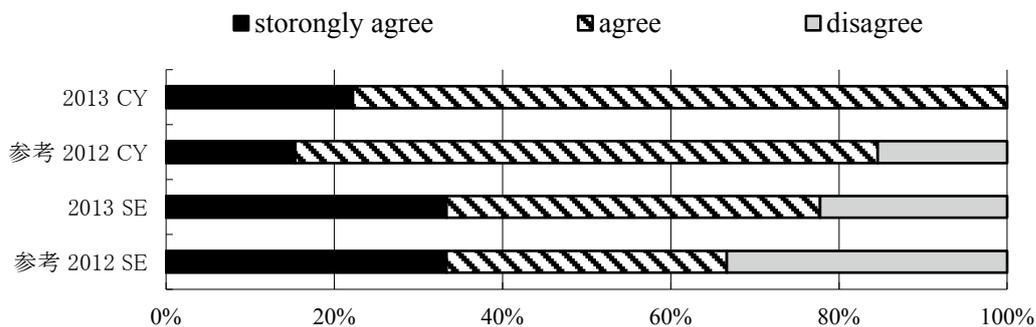
1. Approximate level of your own attendance during the whole course

(この授業にどのくらい出席しましたか)

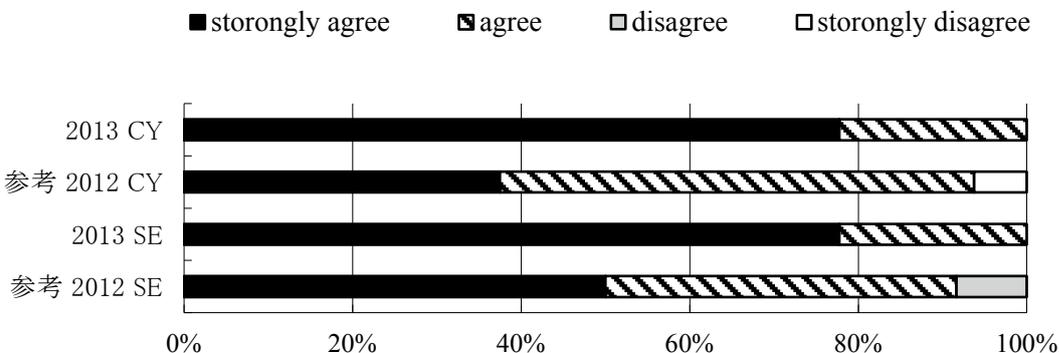


2. I did homework to understand the contents of this course better

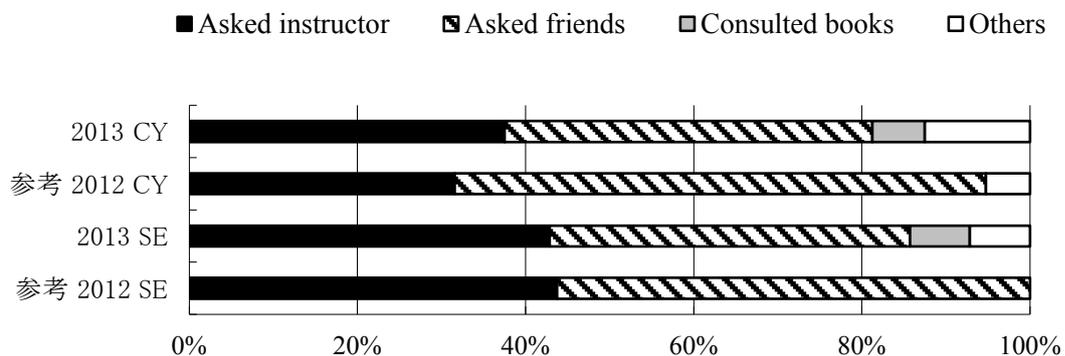
(授業内容を理解するために、予習や復習をしましたか。)



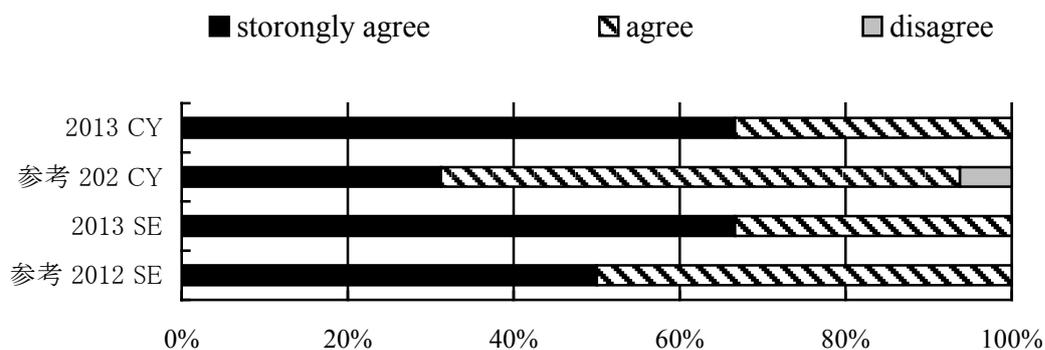
3. Syllabus was useful. (受講に当たり、便覧・シラバス等は役に立ちましたか。)



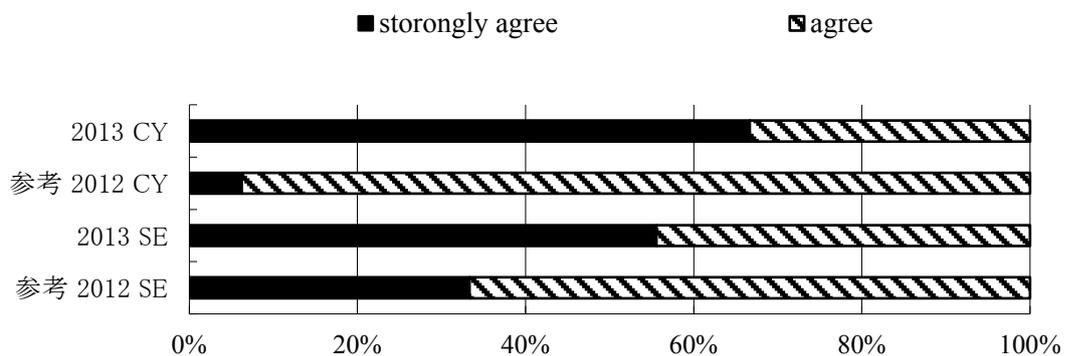
4. How did you do when you had difficulties in understanding the contents of this course
 授業内容で分からないことがあったとき、どうしましたか。(複数回答可)



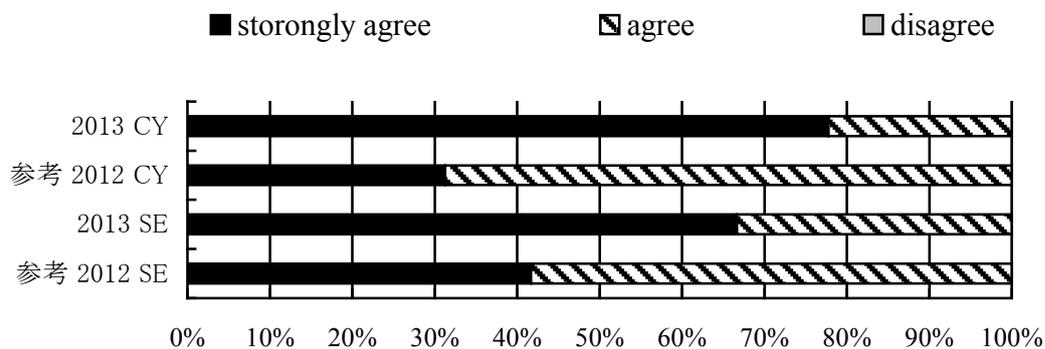
5. The course was organized and prepared well. (授業内容は系統的によく整理・準備されて
 いましたか。)



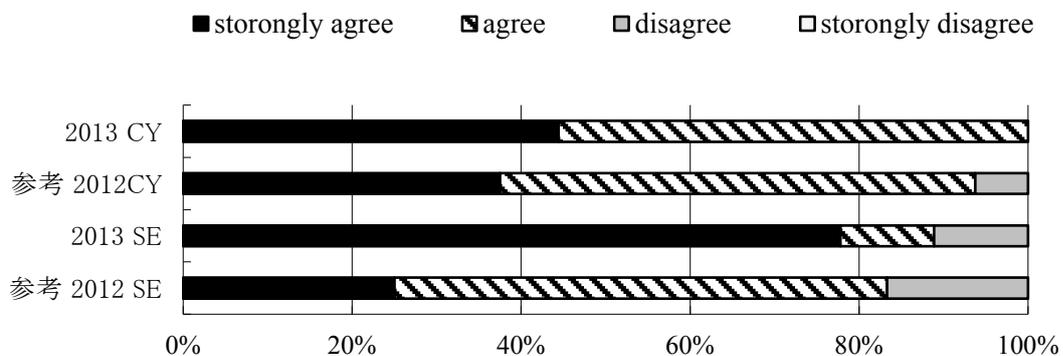
6. I understood the lectures. (授業内容は理解しやすかったですか。)



7. I could catch what the instructor said. (教員の声はよく聞き取れましたか。)

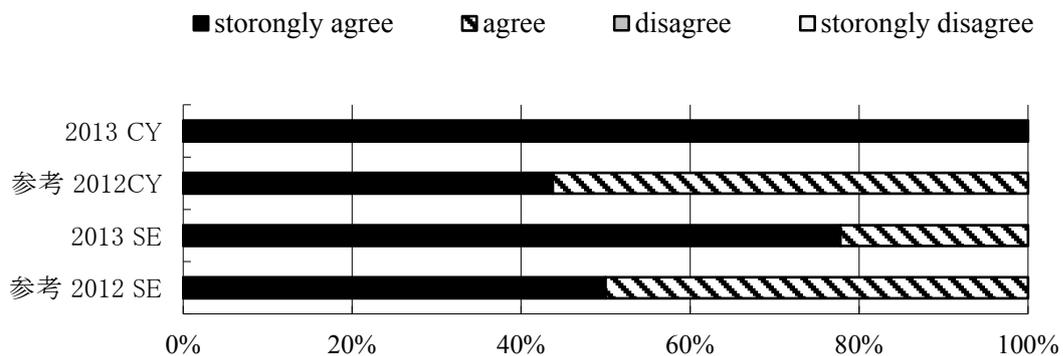


8. The pace of this course was appropriate. (授業を進めるスピードは適切でしたか)



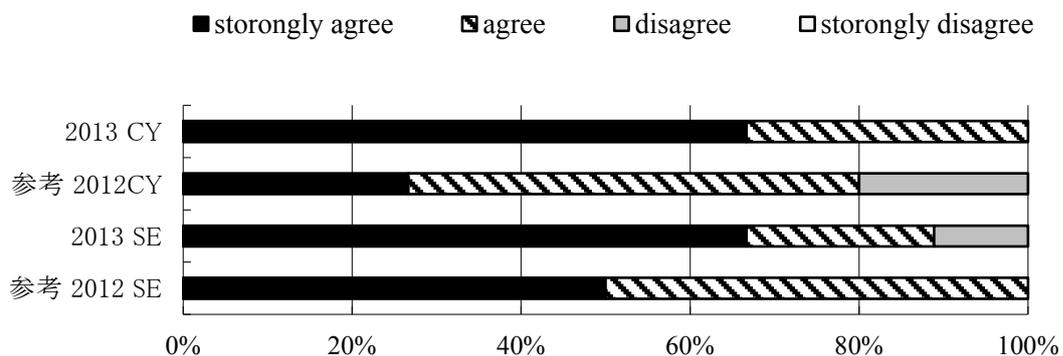
9. Learning materials (textbooks, handouts, usage of whiteboard or PC) were appropriate.

(教科書、配付資料、黒板、教育機器等の使用は適切でしたか)



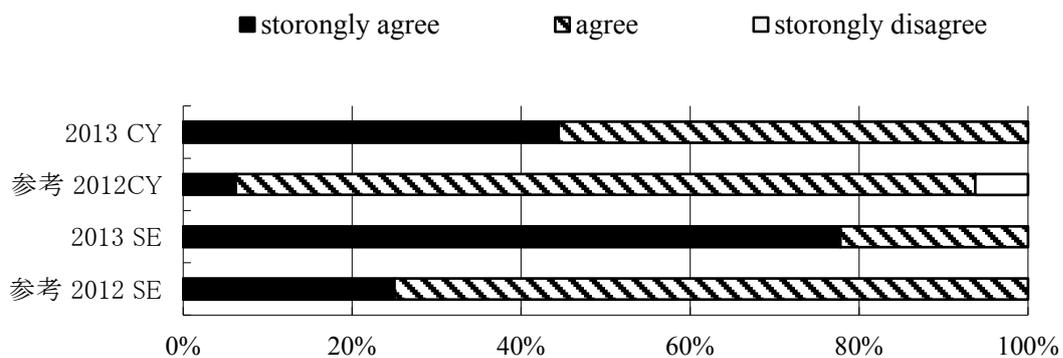
10. The workload(assignment or paper) was useful to achieve a learning goal of this class.

(宿題やレポートは、授業内容を理解する上で適切でしたか)

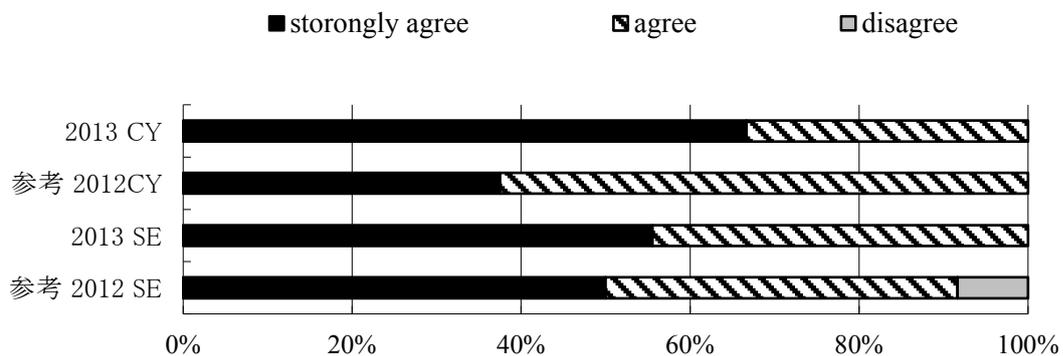


11. The course objectives described in the syllabus were achieved.

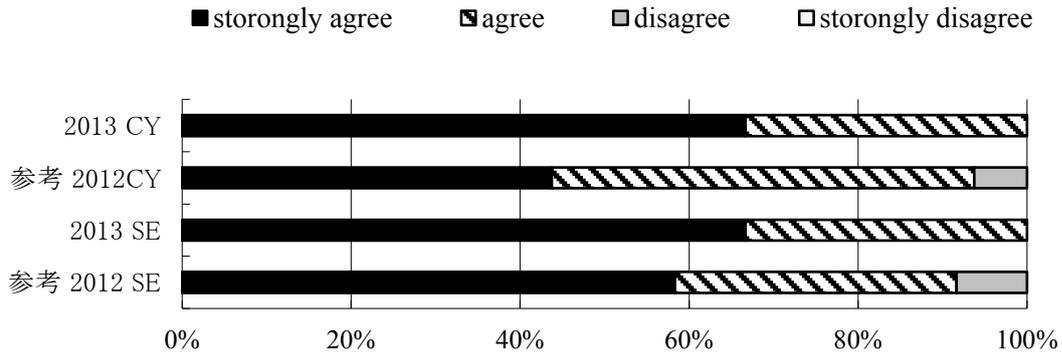
(シラバスに記載されている「授業の目的」は達成されたと思いますか)



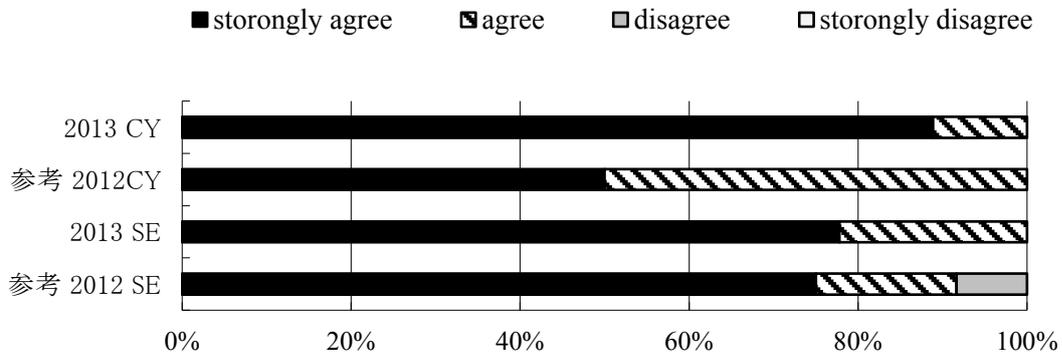
12. The course stimulated my interest in the subject area (この授業に興味をもてましたか)



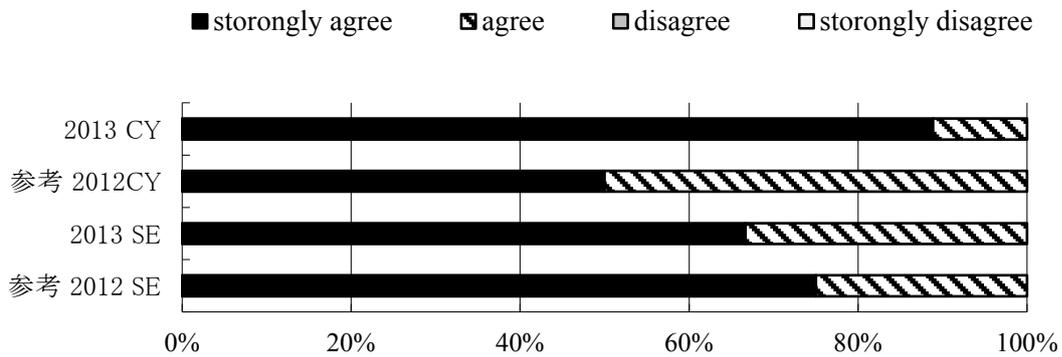
13. The instructors were eager in their teaching. (教員の授業に対する熱意を感じましたか)



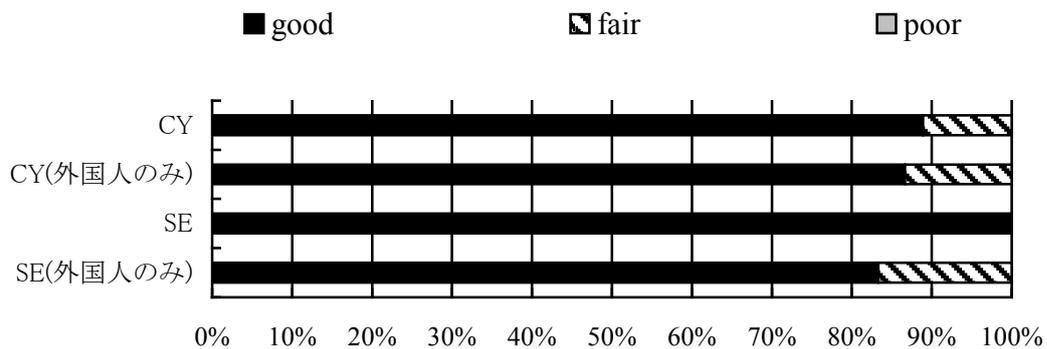
14. What learned in this class is useful for future. (この授業で学んだことは、今後に役立つと思われましたか)



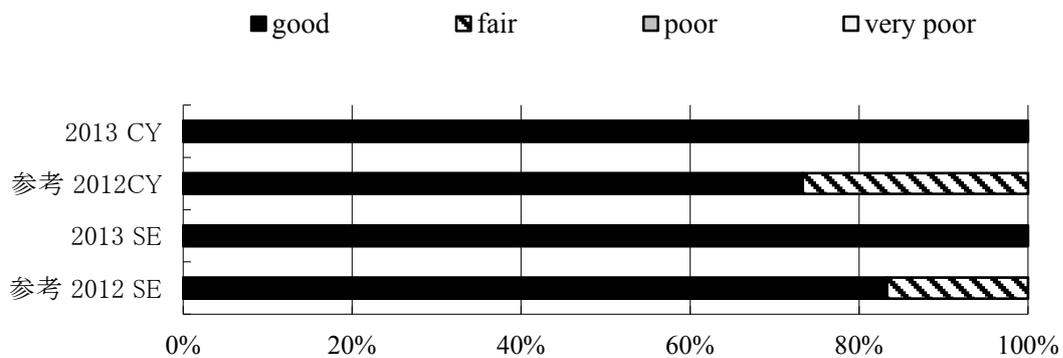
15. In general, I am satisfied with this course (総合して、あなたはこの授業にどの程度、満足しましたか)



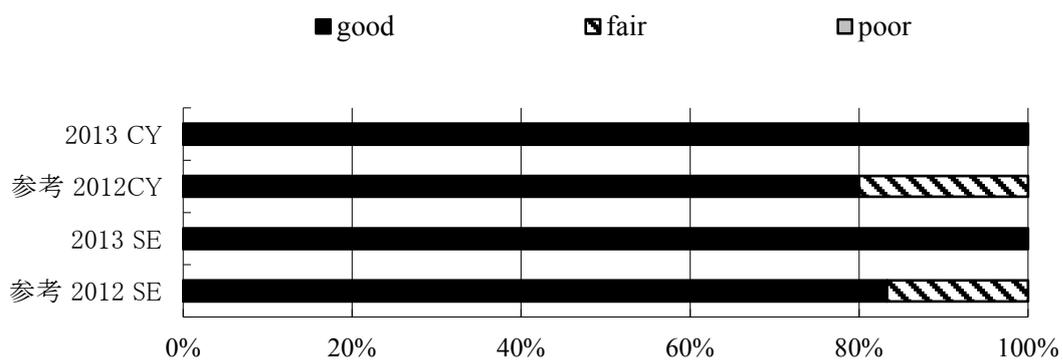
16. Size of a classroom. (教室の広さは適切でしたか)



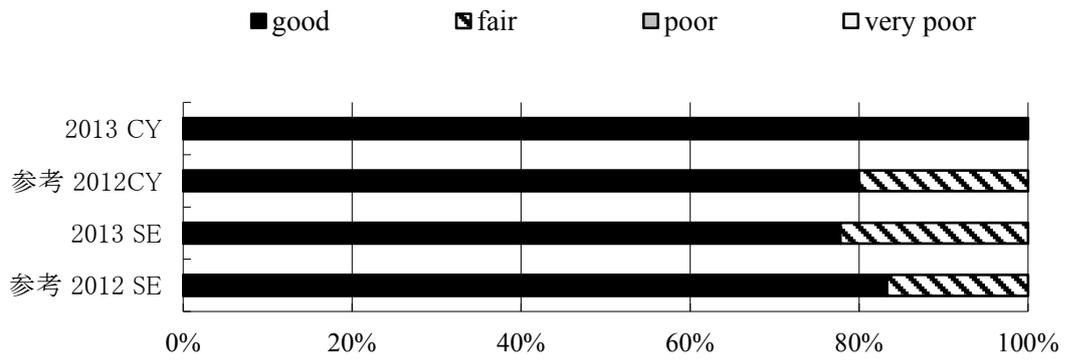
17. Desk and chair (机と椅子の設備は適切でしたか)



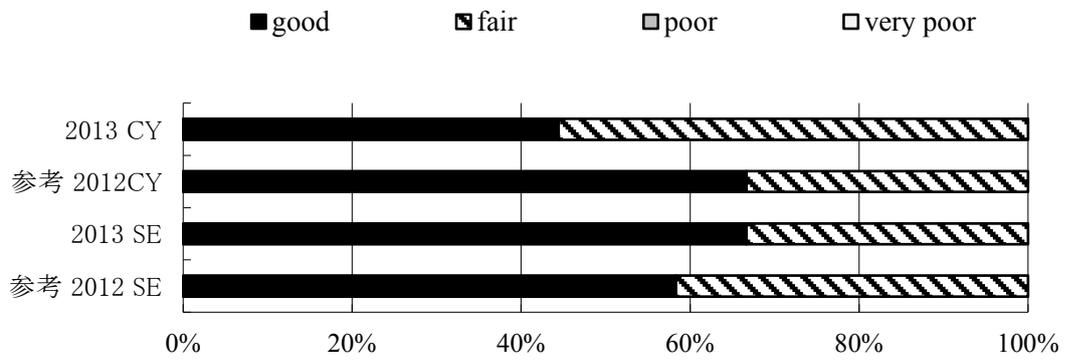
18. Lighting (照明は適切でしたか)



19 Sound (音響は適切でしたか)



20. Temperature in a room, Air conditioner (冷暖房・空調は適切でしたか)



21.自由記述:For the future: please comment at your leisure (notions, demands and impressions)

➤ Children and Youth

- I hope there will be more students from various countries and areas. Students may have more after - school activities. I enjoy the A J P courses very much.
- I want to say "thanks a lot" to every professor and staff, TA. They help me carefully and very good. I am happy to attend this Summer Courses. It's great.
- If the professors have time, they should join in the students' presentation, share and discuss with all the students. Thank you very much for all the help.
- Convenient environment, lectures are professional, staff are helpful and patient. However Japanese pronunciation a little difficult no little box. Expectation further my doctor education in Tohoku University.
- I enjoy this course. I think if you lead us to know and see some Japanese traditional culture and places, it will be better. Especially for the first time we visit Japan. You've done very good. Thank you very much. And the teacher's English could be better, it can help us to understand the lecture well. ALIGADO !
- Thanks for all the efforts from Tohoku University this week. I am so impressed all the professor's hand work. And outing to WATAGE was most touching part the welfare system in Japan already involve to the population who lack of the mental happiness rather than poverty. Again, thanks ! Looking forward the second section next week.
- The pace of this summer course is a little bit tight, maybe the lunch time can be longer. And the schedule of course can be loosen. Thank you for this summer course. We got a lot of international communications.
- The break time of lunch can be lasted much longer.
- The outdoor curriculums was extremely good !

➤ School Education in comparative perspective

- The course held very good. I love it so much
- The courses of this stage can be loosen possibly. And the time of preparing presentation is too short, it is rush to do it.
- deeply involved into Japanese education system, esp, career education and club exercises. Not all students have got the chance to give comments for someone talked so much, and it is unfair. Sorry for some Chinese students rude behaviour.
- Thanks for Dr Ogawa bring such a delicate lecture to us. It's very nice job that compare with the education system among China, Taiwan, Korea and Japan. The instructivity way is

westernize open mind discussion. I've gained a lot ! Nowadays, in Asia society, it's still the degree- oriented. How can we change the entire system? How to break through the stereotype or discrimination for kids who dislike study but he is good at other skills? hile reflection !!!

- Hope to attend this class with Korean Students.
- Good experience to join in this project, and the professors researchs are releable for my future. Look forward for more exchange in the future.

2-4 ウィンターコース

「ウィンターコース」は独立行政法人日本学生支援機構（以下 JASSO）の支援のもとで 2014 年 2 月 14 日～21 日にかけて開催された。

授業は、サマーコースと同様に「アジアの子ども」と「アジアの学校」をテーマとし、東北大学の教員及び市民団体によって日本語で開講された。

ウィンターコース終了後は、アンケートをとおした授業評価を行っている（アンケート調査は朴賢淑助教が行っている）。

なお、ウィンターコースの詳細については、資料 2-4-1・2-4-2・2-4-3・2-4-4 を参照されたい。



アジア共同学位開発プロジェクト 2014 年 WINTER COURSE 募集要項

アジア共同学位開発プロジェクト「2014 年 WINTER COURSE」は、冬季休暇中に東北大学（日本）において、「アジアにおける教育」をテーマとしたコースを短期集中で受講するものです。このコースは日本の大学での生活体験・フィールドワークを通して日本に対する理解を深めるとともに、授業が日本語で開講され、日本語運用能力を伸ばし国際感覚豊かな人材を育成することを目指しています。

コース言語・期間

- ・授業言語： 日本語
- ・開講期間： 2014 年 2 月 14 日（金）～21 日（金）

出願受付

- ・受付期限： 2013 年 12 月 5 日（木）16:00 必着 email にて提出
- ・願書提出先： 東北大学大学院教育学研究科プロジェクト事務室 (ajp-summer@sed.tohoku.ac.jp)
- ・提出書類： ⑤ 願書 (<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp>)
⑥ 日本語能力公式点数証明書のコピー（能力試験、J-Test など）
⑦ パスポートのコピー（申請中の場合、後日提出可）
- ・応募資格： 教育学（心理学、教科教育を含む）を専攻する学生で、必要とされる日本語能力を有する者。
- ・募集人数： 各大学 2 名

選考および結果通知

- ・選考方法： 本コースの趣旨にもとづき、提出書類にて選考する。
- ・結果通知： 2013 年 12 月 11 日（水）

出願および参加に当たっての注意事項

- ・キャンセルは基本的に認められません。
- ・プログラムの参加が決まった方は健康診断証明書および海外旅行傷害保険（英語証明書）を提出してください。
- ・参加学生は開講されるコースをすべて受講することが求められます。

費用について

- ・参加者には **8 万円**の奨学金を支給します。
- ・授業料は徴収致しません。
- ・航空券、宿泊費等の費用は本人負担になります。
*参加者からお申し出があった場合のみ、ホテルをご予約致します。（詳細は、別紙 1 を参照）

ウィンターコース スケジュール				
14(金)	10:00~12:00	開講式		大会議室
	10:00~10:05	教育学研究科副研究科長・ネットワークセンター長挨拶		
	10:05~10:10	プロジェクトディレクター挨拶		
	10:10~10:30	出席者紹介		
	10:30~10:50	オリエンテーション 朴賢淑 助教		
	10:50~12:00	教育学部紹介・キャンパス案内 支倉国際委員 (HISE)		
	12:00~13:00	お昼休み		
14(金)	13:00~14:30	小川 佳万 教授	日本の学校制度の特徴を考える	#306
	14:40~14:50	本郷 一夫 研究科長	研究科長挨拶	#306
	14:50~16:20	神谷 哲司 准教授	育児期移行における夫婦間相互調整	#306
15(土)	08:50~10:20	若島 孔文 准教授	緊急時支援	#306
	10:30~12:00	深谷 優子 准教授	協働による読解と作文	#306
	13:00~17:00	氏家 洋子 様	生活の中で生きている日本の文化体験	太白文化センター
16(日)	Free Day			
17(月)	08:50~10:20	後藤 武俊 准教授	日本の教育の改革課題	#204
	10:30~12:00	田中 光晴 助教	アジアにおける比較教育学的アプローチ	
	13:00~14:30	須藤 伸子 様	留学生と地域の国際理解	#204
	15:45~16:30			国際文化センター
	16:50~17:00		奨学金支給	川内北キャンパス
18(火)	08:30~16:00 (ホテル出発)	石井山 竜平 准教授	東日本大震災と社会教育	亘理町
19(水)	08:50~10:20	上埜 高志 教授	学校におけるメンタルヘルス	#306
	10:30~12:00	小形 美樹 准教授	日本人学生の就職活動とキャリア	
	13:00~14:30	小川 直人 様	道具としての映像メディアの学び方	#306
	14:30~16:00			仙台メディアテーク
20(木)	08:50~10:20	安保 英勇 准教授	日本における不登校問題とその支援の現状	#306
	10:30~12:00	谷口 和也 准教授	日本の学校教育	#306
	12:30~16:30			仙台城南高等学校
21(金)	08:50~10:20	上原 裕介 様	子ども・若者の社会的排除と青少年教育	#306
	10:30~12:00	伊藤 拓 様	東日本大震災後の地域づくりと自立支援	#306
	13:30~15:40	朴 賢淑 助教	最終発表会	#306
	15:40~16:00		アンケート記入	#306
21(金)	16:30~16:50	閉講式		大会議室
	16:30~16:35	研究科長挨拶		
	16:35~16:50	修了証授与式		
	17:00~19:00	懇親会		川内北キャンパス キッチンテラス クルール

2014 ウィンターコース 授業評価アンケート

みなさん、8日間お疲れ様でした。このアンケートは、みなさまに今回のセミナーについて振り返ってもらい、今後の本プロジェクトのために役立てることを目的とするものです。名前や所属などを書かず、素直な気持ちで以下の質問それぞれについて、ご回答ください。

Q1 以下のそれぞれの質問に対して、あなたのお気持ちを伺います。それぞれの質問について、あてはまる(5)～あてはまらない(1)の中から、もっともあてはまるもの1つに○をつけてください。

	あてはまる	あてはまる どちらかといえは	どちらかといえは いえない	あてはまらない どちらかといえは	あてはまらない
① 講義の内容はよく整理・準備されていたと思う。……………	5	4	3	2	1
② 教師の話す日本語は理解しやすかったと思う。……………	5	4	3	2	1
③ このセミナーの講義数や活動内容は適切であったと思う。	5	4	3	2	1
④ 講師の専門領域が理解できたと思う。……………	5	4	3	2	1
⑤ このセミナーが英語ではなく、日本語で行われたことは意義のあることだと思う。……………	5	4	3	2	1
⑥ フィールドワークをとおして現場（学校、被災地、学習施設）体験ができて良かったと思う……………	5	4	3	2	1
⑦ 他大学から参加した学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う……………	5	4	3	2	1
⑧ 東北大学の学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う……………	5	4	3	2	1
⑨ 全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思う……………	5	4	3	2	1
⑩ 東北大学に親しみを持てるようになった……………	5	4	3	2	1

Q2 今回ウィンターコースで受けた授業のなかで、良かったと思う授業はなんですか。

下記の表に○を付けてください。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
「日本の学校制度の特徴を考える」 (担当:小川 佳万)	「育児期移行における夫婦間相互調整」 (担当:神谷哲司)	「緊急時支援」 (担当:若島孔文)	「協働による読解と作文」 (担当:深谷 優子)	「生活の中で生きている日本の文化体験」 (担当:氏家洋子)	「日本の教育の改革課題～学校・家庭・地域社会の連携の観点から～」 (担当:後藤武俊)	「アジアにおける比較教育的アプローチー共通性と差異性を活かしてー」 (担当:田中光晴)	「東日本大震災と社会教育」 (担当:石井山竜平)	「学校におけるメンタルヘルス」 (担当:上笠高志)
⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	
「日本人学生の就職活動とキャリア」 (担当:小形 美樹)	「道具としての映像メディアの学び方」 (担当:小川直人)	「日本における不登校問題とその支援の現状」 (担当:安保英勇)	「日本の学校教育」 (担当:谷口和也)	「子ども・若者の社会的排除と青少年教育」 (担当:上原裕介)	「東日本大震災後の地域づくりと自立支援～石巻市の若者による実践を通して～」 (担当:伊藤拓)	支倉国際委員 × 留学生交流	発表会	

Q3 今回、ウィンターコースに参加した目的を教えてください。

Q4 ホームステイをしましたか。 1 はい 2 いいえ

SQ4-1 「はい」と答えた方にお聞きします。

ホームステイはどうでしたか。

1 とてもよかった 2 よかった 3あまりよくなかった 4 よくなかった

Q5 今後、このようなプログラムがあれば、また、参加したいと思いますか。

1はい 2いいえ

Q6 東北大学のプログラム以外に、海外プログラムに参加したことがありますか。

1. はい 2. いいえ

SQ6-1 「はい」と答えた方のみお聞きします。その国と大学の名前を教えてください。

何日間のプログラムでしたか。

・	国名	大学名	参加期間
1			
2			
3			

Q7 このような短期間のセミナーで聞いてみたい講義のテーマはどのようなものですか。

Q8 このような短期間のプログラムでフィールドワークとして行ってみたい場所や活動があれば教えてください。

Q9 このウィンターコースに対する感想・意見・要望などを自由に記入してください。

ウィンターコース 2014 受講者による授業評価について

朴賢淑・朴仙子

ウィンターコース 2014 の開催にあたっては、JASSO から奨学金を頂き、実施したものである。同コースは 8 日間にかけて行ったものであり、コース内容においては、講義およびフィールドワーク、ホームステイなど日本文化体験が中心となっている。

なお、次年度の本プログラムが本格的にスタートするとともに、フィールドワーク（インタシブ）が新たにスタートする。したがって、授業評価を行い、次年度の本コーススタートに向けての基礎データを構築するため受講生にアンケート調査を実施した。

受講者アンケートは、海外連携校から参加した 12 名を対象に実施したものである。アンケート項目の詳細については、＜資料 2-3-3＞を参照されたい。

■アンケート結果の概要

Q1-1 「講義の内容はよく整理・準備されていたと思う」については、全員が「あてはまる」（100%）と回答した。

Q1-2 「教師の話す日本語は理解しやすかったと思う」について、1 名を除いた 11 名（92%）が「あてはまる」と回答した。

Q1-3 「このセミナーの講義数や活動内容は適切であったと思う」については、11 名（92%）が「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」と回答した。

Q1-4 「講師の専門領域が理解できたと思う」については、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」が 8 名（67%）、「どちらともいえない」が 4 名（33%）であった。

Q1-5 「このセミナーが英語ではなく、日本語で行われたことは意義のあることだと思う」については「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」が 11 名（92%）であった。

Q1-6 「フィールドワークをとおして現場（学校、被災地、学習施設）体験ができて良かったと思う」については、12 名（100%）が「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」と回答した。

Q1-7 「他大学から参加した学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う」については、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」が 8 名（67%）、「どちらともいえない」が 3 名（25%）、「あてはまらない」が 1 名（8%）であった。

Q1-8 「東北大学の学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う」については、全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思うが 9 名（75%）であった。

Q1-9 「全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思う」については、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」が 12 名（100%）であった。

Q1-10「東北大学に親しみを持てるようになった」については、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」が12名（100%）であった。

Q2 ウィンターコースで受けた授業のなかで、良かったと思う授業は何かについては、①「東日本震災と社会教育」12名（100%）、②「道具としての映像メディアの学び方」11名（92%）、③「生活の中で生きている日本の文化体験」10名（83%）で、最も高い評価を得ていた。

Q3 ウィンターコースに参加した目的については、日本の教育システムや研究内容について関心があること、日本の文化体験および日本語能力の向上が取り上げられた。

Q4 ホームステイについては、4名（33%）が経験しており、全員（100%）が「よかった+とてもよかった」と回答した。

Q5 今後このようなプログラムがあれば、また、参加したいと思うかについて質問したところ全員（100%）が「参加したい」と回答した。

Q6 東北大学のプログラム以外に、海外プログラムに参加したことがあるか、については、4名（33%）が海外大学での留学生経験を持っており、アメリカ、日本、中国、イギリスが上げられた。

Q7 このような短期間のセミナーで聞いてみたい講義のテーマについては、日本の教育制度、教育心理学、教育社会学、日本の研究動向などが上げられた。

Q8 短期間のプログラムでフィールドワークとして行ってみたい場所や活動については、ウィンターコースのような体験型学習、学校教育、学校以外の教育、日本の教育行政機関などが上げられた。

Q9 ウィンターコースに対する感想・意見・要望については、少しゆったりとしたスケジュールにしてほしいといった要望があったが、多くの学生が充実したプログラムであったと評価した。

■アンケート結果のまとめ

今回のウィンターコースは、共同学位開発プロジェクトのパイロットプログラムの一環として開催されたものである。同コースの開催にあたっては、JASSOから奨学金を頂き、教育ネットワークセンターおよび東北大学教育学研究科の教員、外部講師によって授業を行った。同コースでの新たな試みとして、フィールドワークを中心とした授業、参加学生の研究分野のプレゼンをおとした研究交流および日本文化体験が挙げられる。

同コースは、日本語で実施したプログラムであるが、日本語、英語、韓国語、中国語など

多言語が可能な講師および受講者が多くみられた。このように多言語による授業の進行は授業の理解において大きな役割を果たしたと思われる。今までのサマーコース（2回開催）及び集中セミナーでは、一つの言語による授業を行っていたが、多言語による授業進行の意義については学習者および教授者の側面から検討する必要があると思われる。

次に、授業内容については受講者の満足度が高かった。フィールドワークでは、生涯学習施設、高等学校、国際交流協会などを学習の場として活用している。さらに、東日本大震災後の現状を知ってもらうために行った被災地での授業は、学生の満足度が最も高く、今後も授業に盛り込んでほしい、といった要望があり、来年度の短期プログラム企画においてこうした学生のニーズを検討しなければならない。

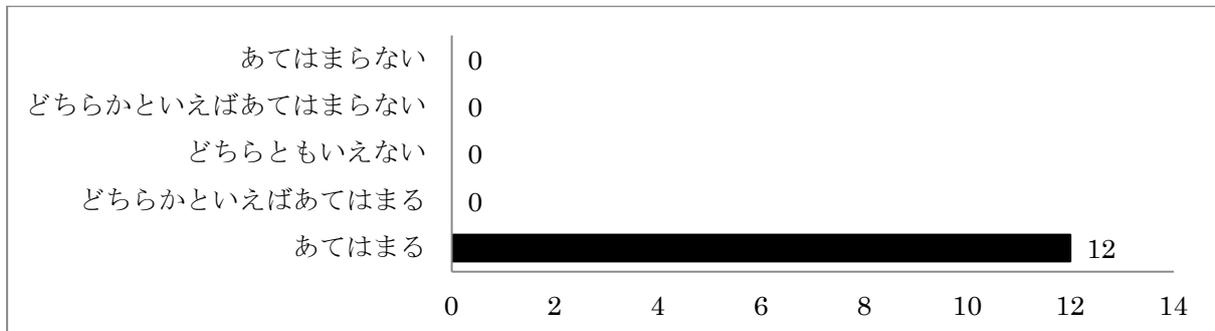
次に、参加学生同士の研究テーマを発表してもらうことにより、参加学生同士のネットワークづくりを試みた。さらに、参加学生の研究関心が重なる分野においては、留学生が帰国後も情報交換をとおした共同研究の可能性を試みた。

次に、これまでの短期プログラムに参加した留学生から要望があった「日本文化体験」を授業の一環として取り入れたが、参加学生からは日本の研究文化や日本の国をもっと身近に感じるようになった、といった意見が多くあった。このように留学生が日本に留学する意義を知識習得のみならず、日本文化を知る、体験することを留学の目的としていることがわかる。したがって、今後のカリキュラム開発においてはこうした点も考慮しなければならない。

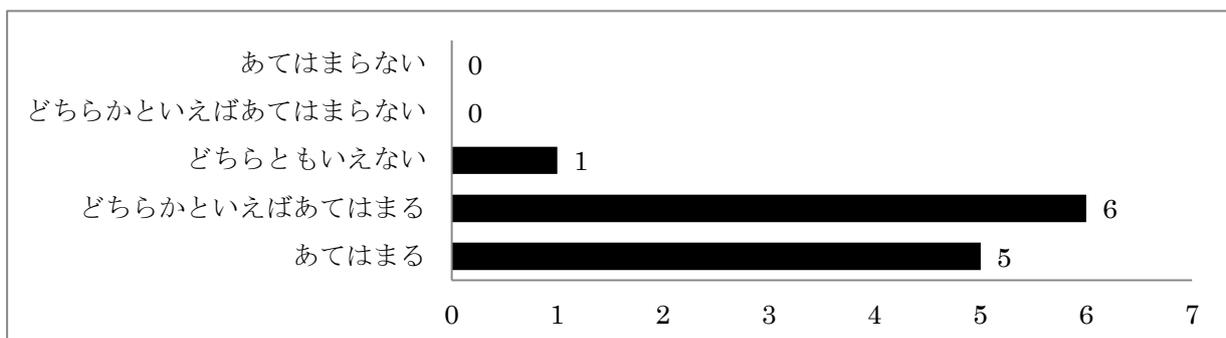
■データ編

Q1 以下のそれぞれの質問に対して、あなたのお気持ちを伺います。それぞれの質問について、あてはまる(5)～あてはまらない(1)の中から、もっともあてはまるもの1つに○をつけてください。

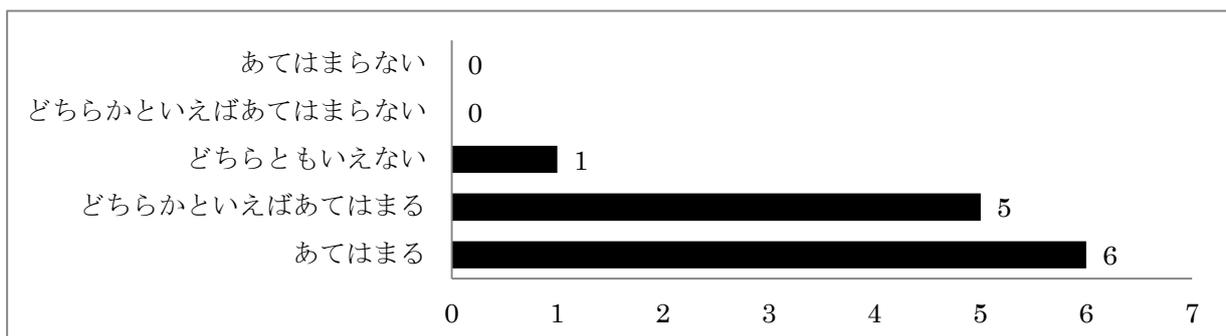
① 講義の内容はよく整理・準備されていたと思う。



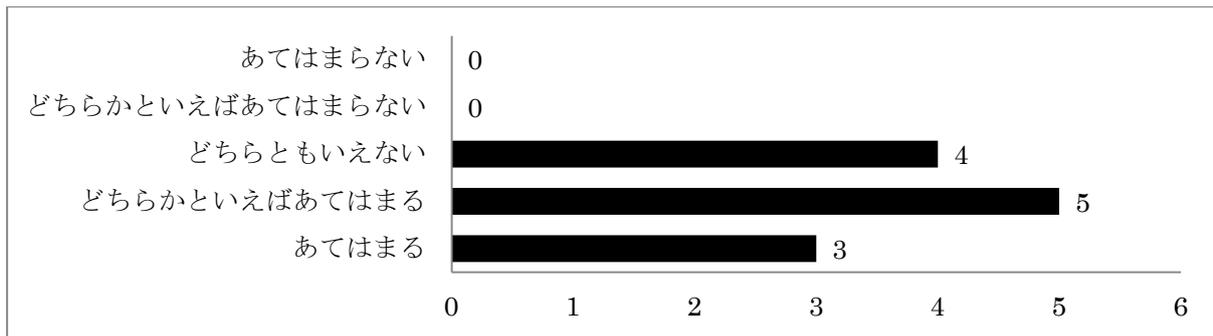
② 教師の話す日本語は理解しやすかったと思う



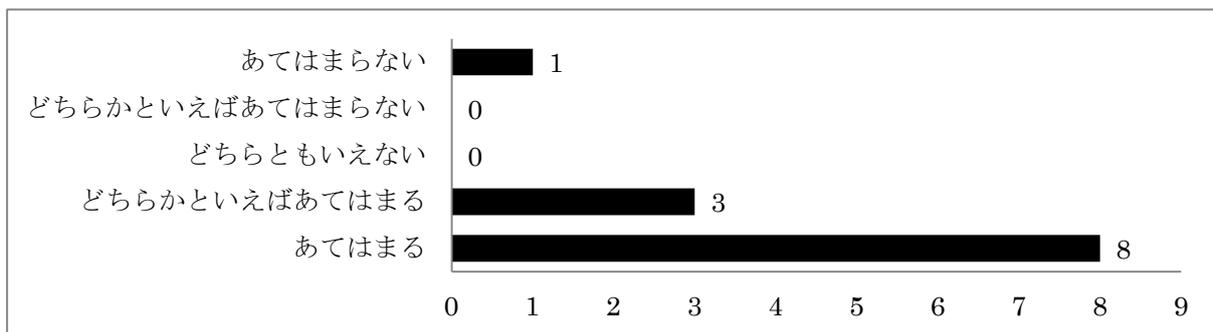
③ このセミナーの講義数や活動内容は適切であったと思う



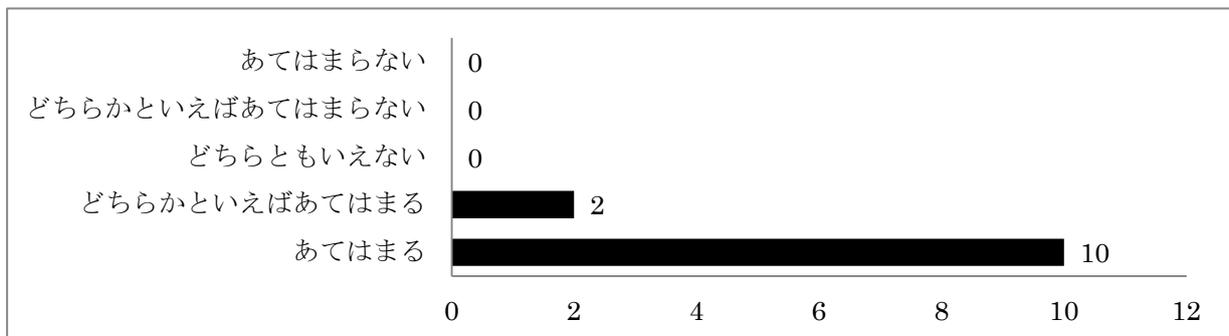
④講師の専門領域が理解できたと思う。



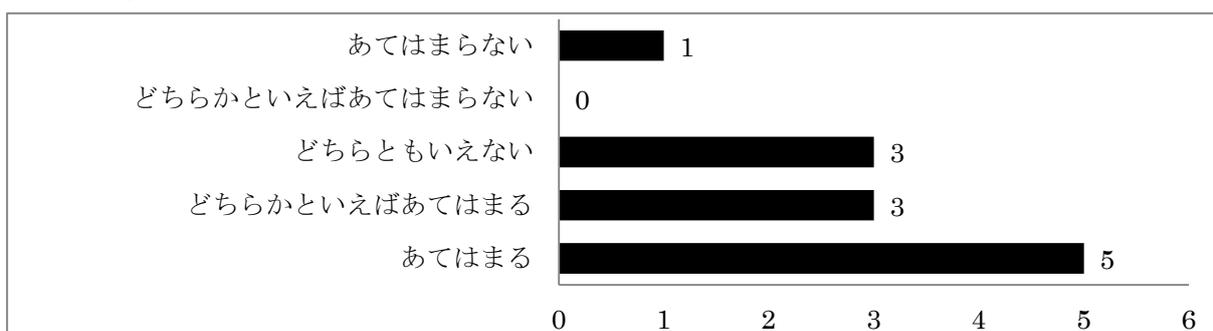
⑤このセミナーが英語ではなく、日本語で行われたことは意義のあることだと思う。



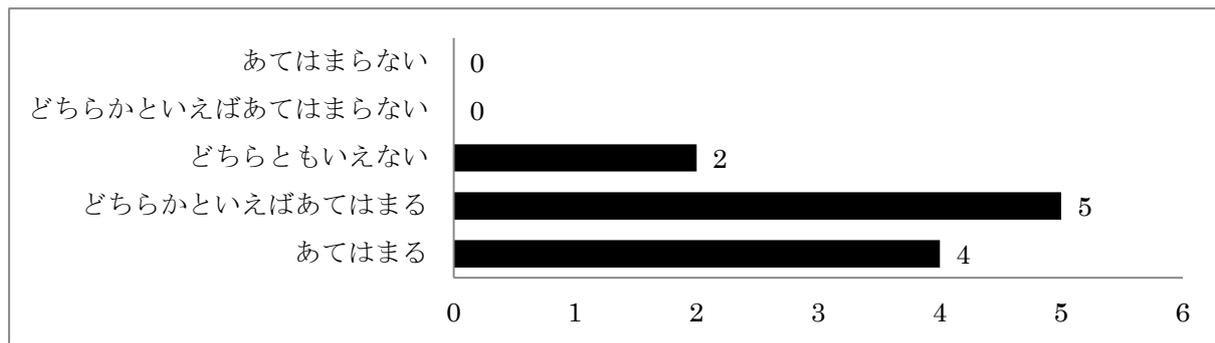
⑥ フィールドワークをとおして現場（学校、被災地、学習施設）体験ができて良かったと思う。



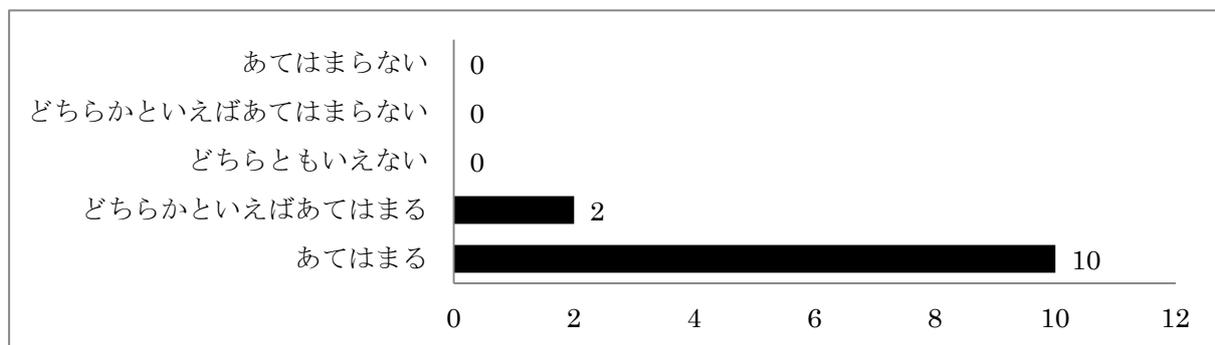
⑦他大学から参加した学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う。



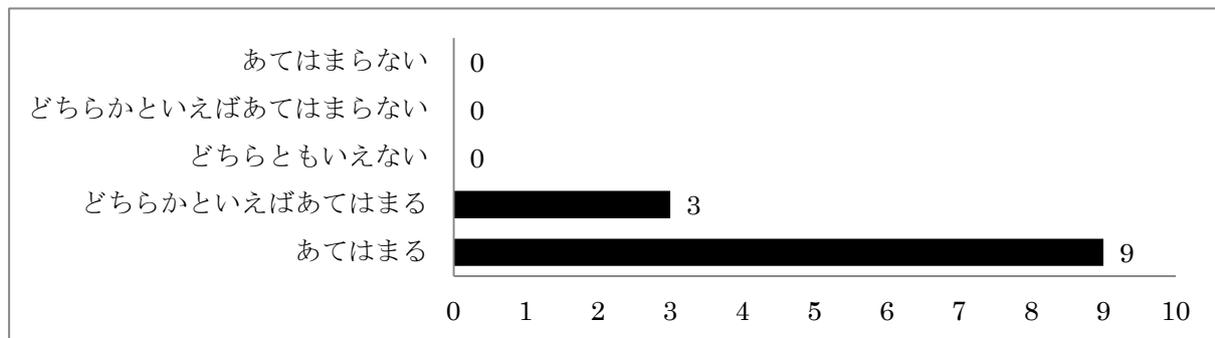
⑧ 東北大学の学生との間に、今後につながる良好な人間関係を構築することができたと思う。



⑨ 全体的に考えて、このセミナーに参加してよかったと思う。

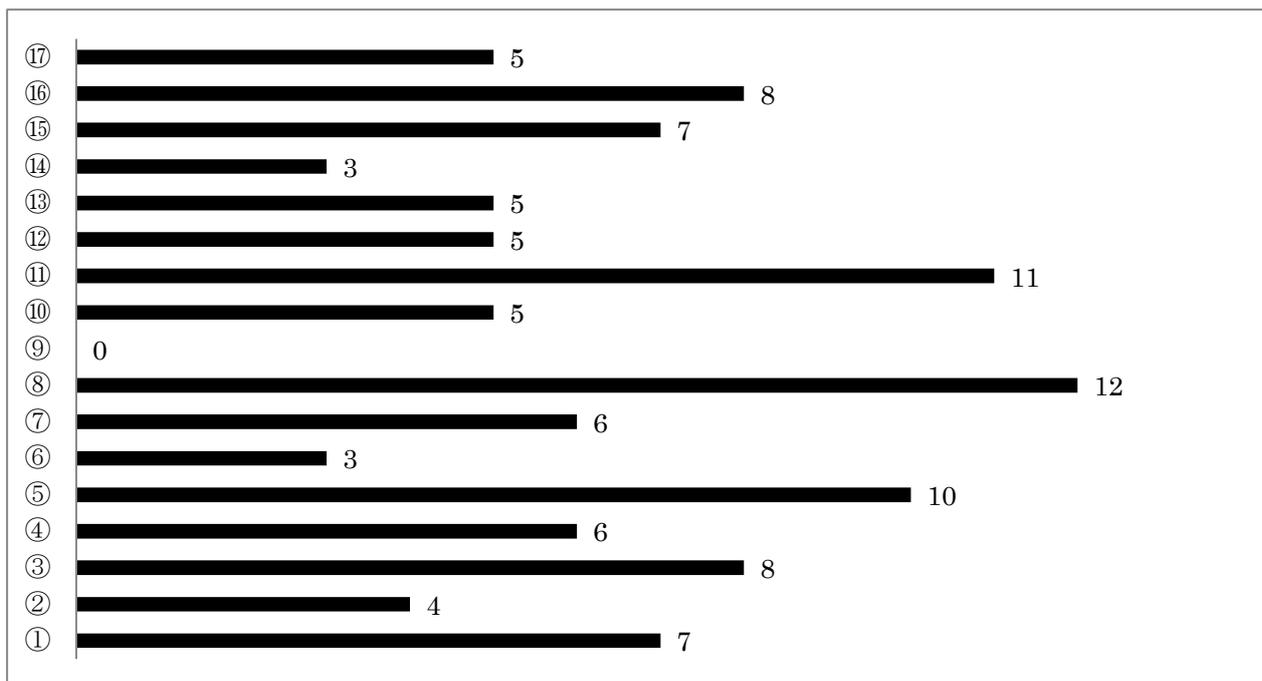


⑩ 東北大学に親しみを持てるようになった。



Q2 今回ウィンターコースで受けた授業のなかで、良かったと思う授業はなんですか。下記の表に○を付けてください。

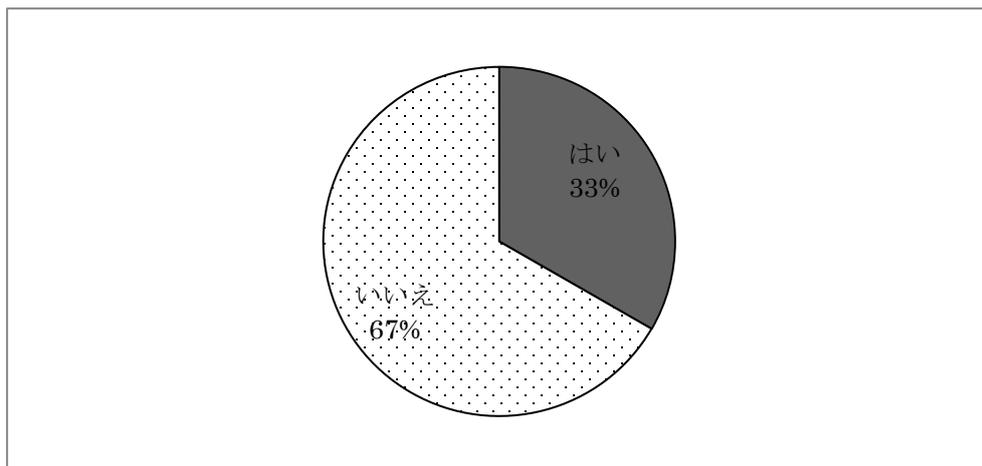
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
「日本の学校制度の特徴を考える」	「育児期移行における夫婦間相互調整」	「緊急時支援」	「協働による読解と作文」	「生活の中で生きている日本の文化体験」	「日本の教育の改革課題～学校・家庭・地域社会の連携の観点から～」	「アジアにおける比較教育学的アプローチ～共通性と差異性を活かして～」	「東日本大震災と社会教育」	「学校におけるメンタルヘルス」
⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	
「日本人学生の就職活動とキャリア」	「道具としての映像メディアの学び方」	「日本における不登校問題とその支援の現状」	「日本の学校教育」	「子ども・若者の社会的排除と青少年教育」	「東日本大震災後の地域づくりと自立支援～石巻市の若者による実践を通して～」	支倉国際委員 × 留学生交流	発表会	



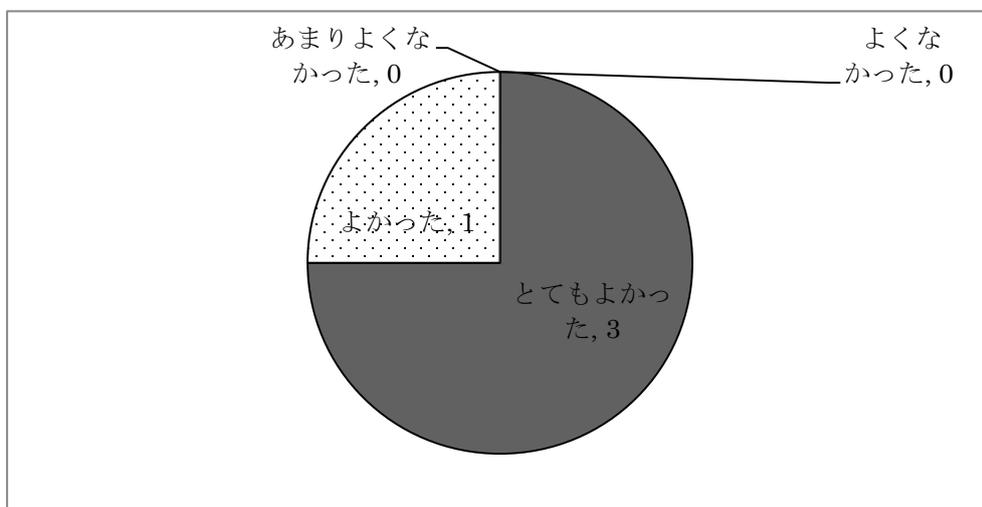
Q3 今回、ウィンターコースに参加した目的を教えてください。

- ・ 日本文化の深い体験、日本語の練習、日本の学校の課程構造を理解するため。
- ・ 日本の文化と日本大学の教室を体験するため
- ・ 日本語の勉強と本物の日本の教育生活を体験するため
- ・ 東北大学が主催したものだから。国際交流もできるし、授業にも参加できるし、いい勉強になりそうだから
- ・ 日本の社会と教育についてもっと多くのことが知りたいから
- ・ 大学で関連情報をみて、日本語に接する機会も増やせるし、また日本で授業を受ける感覚を体験してみたかったから
- ・ 日本の文化が好きなおことと、教育に関する知識と日本語を学びたいから
- ・ 日本で授業を受ける機会が貴重な経験になるから
- ・ 現場で日本教育の現状を知ることと、同時に日本語能力を向上させるため
- ・ ほかの専攻、地域でどのような研究が行われているか知りたくてきました。
- ・ 日本語で行われる授業への参加を通じた言語能力の向上、日本との研究交流

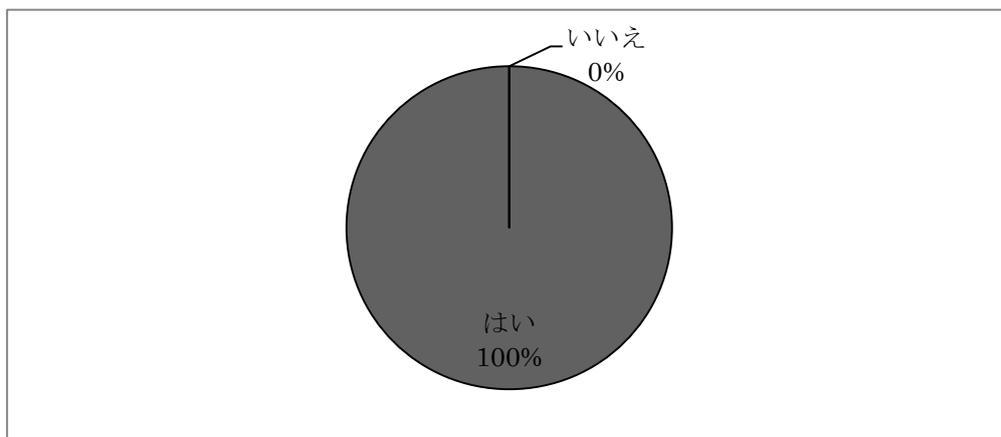
Q4 ホームステイをしましたか。



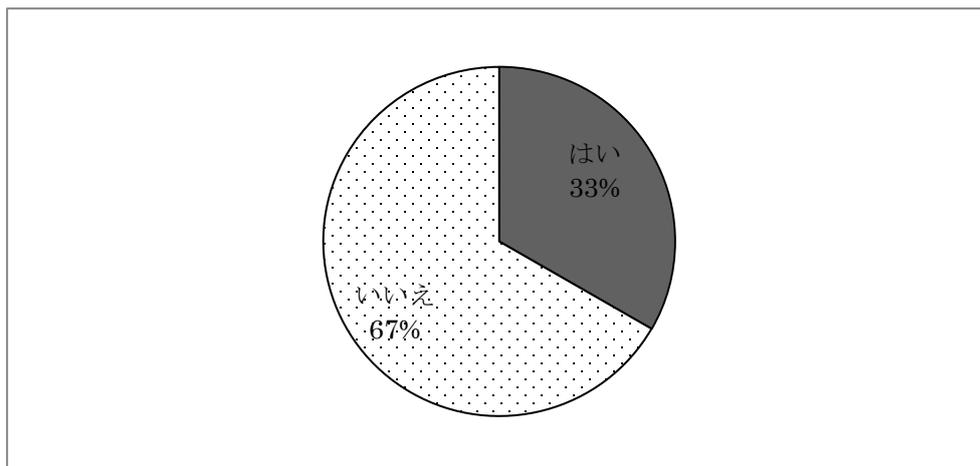
SQ4-1 「はい」と答えた方にお聞きします。ホームステイはどうでしたか。



Q5 今後、このようなプログラムがあれば、また、参加したいと思いますか。



Q6 東北大学のプログラム以外に、海外プログラムに参加したことがありますか。



SQ6-1 「はい」と答えた方のみお聞きします。その国と大学の名前を教えてください。何日間のプログラムでしたか。

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
国名	日本	①America ②England ③America	①日本 ②中国	①中国 ②中国
大学名	明星大学 (私立)	①U Penn ②London University of Art ③Missori University	①政府主催 ②西安交通大学	①北京師範大学 ②華東師 範大学
参加期 間	2週間	①2011.08.04~08.23 ②2013.08.04~08.23 ③2013.10.18~11.04	①9日間 ②8日 間	①一週間 ②一週間

Q7 このような短期間のセミナーで聞いてみたい講義のテーマはどのようなものですか。

- ・教育社会学の専門について、例えば「社会学」とか、「教育研究方法」などについて
- ・茶道、いじめについての授業
- ・教育現場の体験
- ・日本の小・中学校の心理（についての）の授業（科目）
- ・教育、心理学のほうのものは全部よかった、現地調査もとてもおもしろかった。もっと受
けたい！
- ・自分の専攻の研究と関連する講義があったらいいなと思います。
- ・心理と関連する講義（自分の経験と関係があるから） 文化、教育体験との関連もよい
（例えば、今回の訪問）
- ・メディア・心理
- ・文化関連、体験
- ・教育政策制定、教育現状、問題分析
- ・自分の専攻と関連がある研究について聞きたいです。
- ・例えば、教育心理学であれば教育心理学についての一般的な理論的問題（内容）ではなく、

「日本の研究動向や具体的な実践事例」がテーマになったらいいなおもいます。

Q8 このような短期間のプログラムでフィールドワークとして行ってみたい場所や活動があれば教えてください。

- ・有名な観光地を観光したいです。例えば、「松島」、「秋保温泉」などがあります。
- ・学校（部活動）
- ・教室の外、学校（何カ所）比較、授業を聞く
- ・歴史や文化の根源がある観光地とか
- ・今回の課外体験の計画はとてもよかったです。被災地を直接体験できて、心が大きく揺り動かされました。
- ・私は今回の体験が非常によかったと思います（文化中心・・・）
- ・歴史的観光名所
- ・日本の文化と関連するもの
- ・日本政府教育機関の見学、都市（町）を巡り歩く
- ・多文化教育に関する施設（在日学校など）
- ・学校以外の教育施設 — 図書館、公民館など

Q9 このウィンターコースに対する感想・意見・要望などを自由に記入してください。

- ・とてもよかったです。日本語の会話と聴力を（これから）必ずよく練習します。先生たちはとてもやさしかったです。
- ・先生方の心こもった準備に感謝します。とても周到でありました。受けた授業は全部好きです。
- ・時間の配置がちょっときつかったです。
- ・今回のすべての参加者のブローガーなどを開設して、連絡しやすくしてほしいです。じゃなければ、帰国したら連絡できなくなるので、残念～
- ・スケジュールがちょっときついと思います。ウィンターコースの時間がもう少し長ければ、もうちょっとゆっくりできたかも。
- ・今回のウィンターコースプログラムに感謝します。身近で日本社会と文化を体験することができて、私の人生の中で一番忘れがたい経験になると思います。
- ・今回の経験は本当に実り多きものでしたので、とてもうれしいです。すべての参加者と協力者に感謝します。今回、校外の訪問の時間でいろんなすごい体験ができました。学校からもいろいろと配慮をしていただきました。学生への面倒みもとてもよかったです。ほんとうにありがとうございました。
- ・授業を少し分散してほしいです。ちょっと集中しすぎだと思います。だけれども、今回の授業をしてくださった先生方はみんなまじめで心をこめていましたので、とても楽しかったです。この何日間、本当にお世話様でした。ウィンターコース最高！
- ・授業の開始時間が早すぎです。もし、その中の何日間でもそんなに早く授業を始めなければ、もっと集中できたと思うし、ここまで疲れなかったと思います。

・今回の授業計画はとても充実して全面的なもので、東北大学教育学研究科の配慮が感じられました。本当に感謝していますし、また感動しました。ただし、日程配置をもう少し緩くしていただいて、吸収する時間がもっと多かったらよかったかなと思います。もし、機会があればまた来たいと思います。3月の台湾見学をお待ちしております。

・奨学金をもう少しいただけたらいいなと思います。

・ありがとうございました。もし、余裕があれば（学校に）ホテルじゃなくて、学校の寮のようところに宿泊できればいいなと思います。学校の学生とより多く交流ができるかもしれません。

3 調査報告

国内調査報告

海外調査報告

3 調査報告について

共同学位プログラムの開発にあたって、基礎研究、開発研究、国際連携、拠点形成などを重点課題として取り上げ、その実現に向けて国内外の調査を進めた。

2011年度は、各大学の国際化の現状を把握するとともに、今後の研究交流等への手ごかりを探るための調査研究を進めた。2012年度は、2011年の調査研究を踏まえながら国内外大学を視野にいたした基礎的研究と共同学位プログラム開発の実践的研究の2つの部門に重点を置きながら進めた。今年度は、次年度からの共同カリキュラムの立ち上げに向けて連携校とのワークショップと先行事例の調査を中心に進めた。

今年度は3回の国内調査と5回の海外調査を通じて、共同学位開発のための基盤づくりが着実に進んだといえる。なお、詳細については<資料 3-1/3-2>を参照されたい。

3-1 国内調査報告

アジア共同学位開発プロジェクト 調査報告書

提出日：2013年7月2日

報告者名： 田中 光晴

○訪問先
高等教育シンポジウム「大学での学びを問い直す―主体的な学びを培う大学教育とは―」
○訪問期間
2013年6月28日（金）
○訪問者
田中 光晴 助教
○訪問の目的・経緯等
高等教育改革と先進事例に関する情報を収集する。
○先方対応者（シンポジスト）
金子元久（筑波大学、高等教育学会長）、納谷廣美（明治大学学事顧問、前学長） 中村慎一（金沢大学理事、教育担当副学長）、常磐豊（文部科学省大臣官房審議官） 浦野光人（株式会社ニチレイ相談役）
○成果
▼各シンポジストのポイント
○高等教育の課題と日本型学習（金子）
・高等教育の共通課題は、教育内容の適切化、質保障・効率化・評価、学習の実質化・高度化
・日本型学習の特徴は、自律的な学習時間が少ない、卒論・実験に重点、ゼミ・研究室活動に力点。
・授業と自律的学習とが分離する傾向にある。
・自律的学習を作り出す戦略の創出が目指されている。何を獲得させるのか、から出発する。
○大学生に求められる力（納谷）
・学業のみならず部活動や社会経験から身につく教養力
・他社と共生する上で必要なコミュニケーション力
・失敗を恐れない、何事にも挑戦する力
・いかなる環境（組織）であっても、柔軟に対応し、目標を持ち続けられる力
・自ら問題を発見し、自ら考え、自ら解決策を見出すことができる力

○金沢大学の改革（中村）

- ・カリキュラムマップの作成（カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、各カリキュラム目標を体系的に整理）
- ・入学時期、始業時期、学期制、学年暦を検討する検討会議の活用

○グローバル人材の指標（常盤）

- ・平成 22 年度 10 月「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」の人材像
- ・主体的に物事を考え、自分の考えを分かりやすく伝え、相手の立場にたって互いを理解し、新しい価値を生み出す人材。
- ・日本学術会議の各専門分野別「教育課程編成上の参照基準」も参照。

○企業が求めるもの（浦野）

- ・高い倫理観、高い志、熱意・意欲、課題発見・解決力、問題解決の方法論、協働力、既存のものへの批判力、国際性。
- ・企業と連携して学びの場を作る。ON CAMPUS と ON COMMUNITY を活用。

▼AJP への示唆

- ・能動的学習（アクティブラーニング）や自律的学習を組み込んだカリキュラム開発。
- ・学習環境の再検討。図書館だけでなく、一般教室にラーニングコモンズを設ける。
- ・目指す人材像から求められる要素を抽出し、カリキュラムに落としこむ作業が必要。
- ・海外だけでなく、国内の諸機関と連携できないか。出口対策の一環。

アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書

提出日：2013年10月2日

報告者名：朴 仙子

○訪問先
ASEAN+3 高等教育質保証 フォーラム
○訪問期間
2013年10月 1日 (火)
○訪問者
朴 仙子 教育研究支援者
○訪問の目的・経緯等
アジア各国の質保証制度と国際交流事例に関する情報を収集する。
○先方対応者（シンポジスト）
Dr. Sauwakon Ratanawijitrasin (SEAMEO-RIHED センター長)、 林 夢泉 (中国教育部学位・大学院教育発展センター (CDGDC) 評価部長)、 朴 仁雨 (高麗大学校教育学部教授)、 関 隆広 (名古屋大学、教授)、松野 明久 (大阪大学、教授)、 武川 基 (早稲田大学、大学院生)、坂 一博 (一橋大学、大学院生) 等
○成果
◆各シンポジストのポイント ○学生移動のビジョンと最新の傾向 (Dr. Sauwakon Ratanawijitrasin) ・最新の傾向：アジア地域内での活動が活発化、二ヶ国間より多国間での学生交流が活発 ・グローバル人材：Know what (知識)、Know how (多文化理解)、Know who (ネットワーク) ・課題：資金調達、学位の認証、単位の互換、学年暦、ビザ等 ○国境を越えた教育の質保証と教育分野におけるアジア諸国の交流と協力 (林 夢泉) ・CDGDC (中国教育部学位・大学院教育発展センター)：教育部直属の行政法人である。 ・CF CRS (国境を越えた高等教育) の評価指標：1、使命 2、管理体制 3、資産管理 4、質管理 5、教授陣 6、教育設備 7、研修の質 8、社会奉仕 9、特徴 ・CF CRS 認可の流れ：協力期間 (両者) の要件→教育部の認可→CDGDC の評価→認可または改善のための提案 ○韓国における外国人留学生受入れ・管理力量認証制 (朴 仁雨) ・IEQAS (International Education Quality Assurance System) は2012年に開始され、30校が認証されている

IEQAS 目的：留学生数増加の中、環境不適合と中途退学の問題が発生したため、留学生受入れに対する質管理システムを作り、留学生を受入れ、管理している大学と専門大学を認定するため

IEQAS 申請要件：中途退学率が 20%未満、大学は 19 名、専門大学は 9 名の超える留学生の在籍等

奨励策：3 年間有効、認証マークの使用許可、留学生に対する政府奨学金受給の可能性増

○持続的社会に貢献する科学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成（関 隆広）

- ・運営委員は参加大学各 1 名、外部評価委員は学术界 1 名と産業界 1 名の 2 名
- ・言語：英語 授業料：相互免除 経費負担：渡航費は派遣元大学が負担、奨学金、宿舍費、研究費は受入れ大学が負担
- ・交流方法：教員派遣による集中講義、サマースクール（大学院生が企画）、工場見学等
- ・課題と対処：単位交換が難しい→受入・派遣ともに日本側大学で単位付与・認定
渡航費サポートの不透明→参加大学で受入・派遣の経費について合意する
宿舍の不足→民間宿舍の利用

○アジアの平和と人間の安全保障（松野 明久）

- ・質マネジメント：シラバスは日英両言語で公開、採点基準の明記（S と A は 20%以内）、授業アンケートを教授会で好評、内部評価
- ・課題：学期の時期のズレ、単位交換時の単位数の違い、日本国籍或いは永住者だけにしか奨学金が与えられない
- ・学生支援：大学生協と特別契約し、ファニチャードルームを契約し、大学で支払う、賃貸契約の保証人を大学が引き受ける、国民健康保険の他、学生教育研究災害障害保健の加入

○参加学生の感想

- ・参加理由：修論との関連性、他大学の講義、他大学の院生とのディスカッション
- ・内容：講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク
- ・成果：人的ネットワーク、専門的な知識、新たな視点、
- ・改善点：生徒の参加者数、参加する学生の積極性

◆ AJP への示唆

- ・共同で勉強することの重要性（みんなで移動しながら共に学ぶこと）
- ・共同担当教員を設定
- ・学生ニーズの把握

アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書

提出日：2013年11月26日

報告者名： 田中 光晴

○訪問先
海外体験学習研究会「海外体験学習の多様性と可能性 これまでの10年—これからの10年」 和光大学（東京）
○訪問期間
2013年11月16日（土）
○訪問者
田中 光晴 助教
○訪問の目的・経緯等
①海外体験学習の動向調査 ②海外体験学習の事例調査
○先方対応者
○成果
記念シンポ 本研究会は2004年度に発足し、大学教育における海外体験学習の教育目的、内容、評価、危機管理、教職協働などをテーマとして扱いながら活動を続けてきた。研究会代表は、子島進先生（東洋大学国際地域学部 准教授）。 研究会は、サービス・ラーニングに関心があるメンバーが中心となって発足した。サービス・ラーニングは、教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法、と定義される。「途上国」を対象に、現地のNGOを通じて何らかの活動を学生が行なうという点が共通点であった。 ○今後の課題 ・海外体験学習の理論化。 ・国内から国外へ同じテーマで出かける「往還的学び」 東洋大 紙プロジェクト http://onsite-edu-soc-cul.toyo.ac.jp/index.html ・国内プログラムとの融合が今後の発展 カリキュラムとの整合性 危機管理マニュアル（大阪大） http://www.osaka-u.ac.jp/ja/international/outbound/ja/international/outbound/files/crisis.pdf

分科会 「学習プログラムの形成」分科会

梅村尚子（広島大学 教育・国際室国際交流グループ 研究員）

和栗百恵（福岡女子大 国際文理学部 准教授）

箕曲在弘（東洋大学 社会学部 助教）

梅村尚子（広島大学） <https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/start.html>

学習プログラムの形成で意識することは、事前学習→現場での実習→事後の振り返りという流れ

広島大の START プログラム →単位化 初年次教育 長期留学への足掛かり的な位置づけ 引率教員業務を職員研修（FD）の一環として位置づけている。

研修では、午前中の授業内容（経済）と午後のアクティビティ（工業団地見学）がリンクする。

①オリエンテーション①150分

②海外渡航リスク管理セミナー110分

③オリエンテーション②150分

④事前講義 150分

⑤オリエンテーション③150分

⑥渡航期間 15日間 2週間の真ん中に中間自己評価

⑦事後研修 150分

→1単位 費用は JASSO と全学基金を活用し学生の実質負担は5万円

和栗百恵（福岡女子大） <http://www.fwu.ac.jp/campuslife/voice2.php>

福岡女子大 初年次全寮制（4人中1人留学生）

年間を通じたフィールド実習授業

事前学習（学期） - 現場学習（長期休暇） - 発展学習（学期）

必修化はしていない。各2単位

フィールド実践・研究推進論Ⅰ、フィールド・スタディ、フィールド実践・研究推進論Ⅱ

ももとは、大阪大の院生用授業だった。県や市の国際交流・グローバル人材関連の助成がある。

まとめ

本研究会自体は発展途上国をフィールドとした取り組みが多く、サービス・ラーニングを通じた学びの話題が中心であった。したがって、危機管理が大きな関心事であった。ただ、実務者が集っているにもかかわらず、実務的な話題については触れられることがあまりなかった。また東アジアをフィールド先として設定した事例紹介は無く、途上国以外でのフィールド・スタディをどうとらえていくかという点が課題として残った。

3-2 海外調査報告

アジア共同学位開発プロジェクト 調査報告書

提出日：2013年4月30日

報告者名： 田中 光晴

○訪問先
大韓民国 高麗大学
○訪問期間
2013年4月28日（日）～ 4月30日（火）
○訪問者
小川 佳万 教授、安保 英勇 准教授、田中 光晴 助教
○訪問の目的・経緯等
<p>東北大学高麗大学共同カリキュラム委員会連絡協議会の開催</p> <p>①サマーコースに関する意見交換</p> <p>②共同教育科目の可能性について</p>
○先方対応者
高麗大学校師範大学 朴仁雨教授、韓龍震教授
○成果
<p>4月29日（月）16時～、高麗大学校師範大学会議室にて、連絡協議会を開催した。</p> <p>朴仁雨教授、韓龍震教授と協議した内容は以下のとおり。</p> <p>議題1. 共同教育科目の創設-サマーコースについて</p> <p>① 単位化</p> <p>2013年度サマーコースに参加する海外学生に対する単位付与（認定）の方法について議論した。東北大学から出された修了証のみでの単位認定は高麗大学では行なうことができない。単位認定には、正規の学生と同様の成績表が必要。（特別聴講生の処理を検討）高麗大学にも同様の科目を新設し、サマーコース参加学生はその新設科目を履修することで、単位化するという方法もある（この方法を使う場合5月末までに判断し高麗大学側に伝達）。単位の問題、授業料の問題を盛り込んだ細則の締結に向け作業を始めることとなった。（5月末に伝達）</p> <p>② 学生募集</p> <p>サマーコース、日本語コースに対する高麗大学からの学生応募状況を伝えることとなった。学生が少ないようであれば声掛けを行なうとのこと。</p> <p>③ 講師派遣</p> <p>心理系は李相民准教授を派遣する。教育系は朴仁雨教授の方向で調整しているが、教育学科長ということもあり日程調整に時間を要している。もう少し待ってほしい。AJP 事務室と調整。</p>

議題 2. 共同教育科目の開設

サマーコース以外で両校において単位となる共同教育科目の開設について議論した。履修方法としては、①集中講義型、②学期型に分かれるが、学期型を想定した教育科目の可能性について、遠隔教育を活用した 15 回授業の提案がなされた。

教科の内容については、担当教員に合わせ、両校担当教員同士でつめることとなった。来年度から始める場合 8 月末までに担当教員を決定し、9 月末までにシラバスを確定する作業が必要となる。言語は英語に限らない。

議題 3. その他

① 学位審査の共同化

修士論文の審査に両校教員が関わる「共同学位審査」について検討した。高麗大学では学位審査委員会が学位授与の最終決定権を持っており、外部審査委員を入れることに問題はない。特に心理系論文はほとんど英語で執筆されているため今年度からの共同化も可能。

② 大学院生ワークショップの開催

大学院生の学術交流のための成果発表会（国際学術コロキウム）の開催について検討した。高麗大ではそのような取り組みは行なっていないが、行なうことは可能。1 月、2 月であれば会場提供、発表者確保も可能。

③ 紀要への相互投稿

高麗大学の師範大学独自の学術紀要はなく、4 つの KCI（韓国学術誌）紀要編集事務局（審査料 9 万ウォン、掲載料 20 万ウォン、採用率 30%～60%）がある。教員は査読（KCI、ACC 基準）論文誌に投稿する傾向があるため、相互投稿は厳しい。交流可能性としては紀要編集委員などの外部編集委員として参加することなどが提案された。

④ 宿舎の問題

長期休業期間（7, 8, 1, 2 月）であれば外国人留学生寄宿舎が利用可能（1 泊 60,000 ウォン、2 人 1 部屋）、学期中である場合周辺のホテルなどを利用。1 ヶ月であればウィークリーマンションなどを手配。

⑤ ネット会議の開催

2013 年 5 月 20 日（月）16:00～ ネット会議（第 2 回連絡協議会）を開催することとなった。

アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書

提出日：2013年5月29日

報告者名：小川 佳万

○訪問先
モンゴル国立教育大学（東京にて意見交換）
○訪問期間
2013年5月28日（火）～ 5月28日（火）
○訪問者
小川 佳万 教授
○訪問の目的・経緯等
モンゴル国立教育大学と本研究科との今後の国際交流について意見交換を行う。特に、アジア共同学位開発プロジェクトとリンクさせた交流事業が展開できるかどうかに関して検討を行う。
○先方対応者
ドラムジャム国際部長
○成果
<p>モンゴル国立教育大学国際部長のドラムジャム先生から、同大学の国際交流に関する現況と将来計画について説明を受けた。同大学では、将来モンゴルにおいて教育界をリードする人材を育成するため、大学教員及び学生を海外の大学へ派遣し、そこで学位を取得させたいと考えている。そのなかで、特に日本はその派遣対象として中心的な位置を占めている。</p> <p>こうした背景のもと、本研究科アジア共同学位開発プロジェクトに対して大変関心を抱いていることが確認できた。特に本研究科が開催するサマーコースや集中セミナーへの学生派遣にも極めて意欲的であった。また、本研究科と学術交流協定を結びたいと考えていることも確認した。今回の意見交換は、本研究科の今後の国際交流とアジア共同学位開発プロジェクトの交流事業にとって多くの示唆を得ることができた。</p>

**アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書**

提出日：2013年6月28日

報告者名： 田中 光晴

○訪問先
大韓民国 慶熙大学校、校洞初等学校、景福高等学校
○訪問期間
2013年6月23日（日）～ 6月26日（水）
○訪問者
上埜 高志 教授、小川 佳万 教授、朴 賢淑 助教、田中 光晴 助教 高橋 知里 (B3)、鈴木あゆみ (B4)、柴崎千菜美 (B4)、井場 麻美 (M1)、南 紅玉 (D3)
○訪問の目的・経緯等
学生短期研修プログラム開発のモニタリングを行なう。 具体的には、韓国を訪問し、慶熙大学の学生と交流の場をもつとともに、教員間の交流を行なう。 ソウル市内にある初等学校及び高等学校を訪問し、フィールドワークを行なう。
○先方対応者
【慶熙大学校】鄭賢卿准教授（本学卒業生）、【校洞初等学校】吳章吉校長、【景福高等学校】李正珉校長
○成果
<p><u>6月24日（月） 10時半</u>、ソウル市内見学 15時、慶熙大学校正門にて、鄭賢卿准教授と合流、慶熙大学の広報大使（学生）によりキャンパスツアーの後、慶熙大学生4名と交流及び学生生活に関するインタビューを実施した。</p> <p><u>6月25日（火） 10時</u>、ソウル市内、校洞初等学校訪問。校長室にて概況説明を受け、校内見学。各学年の授業を参観した。給食体験後、校長室に戻り、学校のカリキュラム、子どもの様子について質疑応答を行なった。</p> <p>14時、ソウル市内、景福高等学校訪問。会議室にて概況説明を受け、高校生の状況について質疑応答を行なった。高校1年生の英語授業（水準別）を参観した後、校内見学を受けた。</p> <p>▼研修プログラムとしての成果と反省 事前に簡単な韓国語会話を学んだことは、意識を高めるうえで効果があった。また、機関を訪問し、各自韓国語で自己紹介したことは相手からの印象を良くした。 学生交流の際、英語や現地語でのやり取りには限界があり、通訳が必要。3名に1人程度。今後、単発交流ではなく、継続的な交流（先の確保）のための仕組みづくりが必要。</p>

アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書

提出日：2012年8月20日

報告者名： 小川佳万

○訪問先
台湾 国立台湾師範大学 台湾 国立政治大学
○訪問期間
2013年8月15日（木）～ 8月19日（月）
○訪問者
小川 佳万 教授、若島 孔文 准教授
○訪問の目的・経緯等
・来年度開講予定のアジア教育リーダー養成コースの概要説明と意見交換
○先方対応者
国立台湾師範大学 許添民教授、陳学志教授、張世華助理教授 国立政治大学 湯志民教授、吳政達教授、郭昭佑教授、陳榮政助理教授
○成果
<p><u>国立台湾師範大学</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東北大学側の提案に賛成。通常セメスターに学生が移動するのは無理であろう。集中講義型が現実的。 ・東北側が夏期なら師範側で冬期に対応する。1月下旬から2月上旬でどうか。旧正月の週は不可能。 ・経費は自己負担を原則とし、可能であれば各大学が自分の学生に援助するという方式でどうか。また、学生の半数は社会人であるが、彼らは経費の問題はないと思う。 ・台湾では1年間で授業負担が何単位となっているので、ウィンターコースを担当する教員は、通常のセメスターの授業負担を軽減させれば対応は可能である。 ・効率性の観点から、例えば8月に東北大学に集中講義を受ける学生は、ついでに Practice もできるようにすればよいのではないか。8月で4単位+4単位が取得できればいいのではないか。そうすれば、夏（日本）+冬（台湾）の1年間で証明書がもらえることになる。ただし、証明書授与の時期は修士課程終了時に統一しても良いかもしれない。 ・2単位を基本とする日本と3単位を基本とする台湾とのすり合わせは今後必要。 ・初年度3～5人集まればよいのではないか。お互い学生募集に努力しよう。 ・2月の新学期頃には学生に周知したい。正規の科目としてこちらで承認するならば、学生の履修計画に関係してくるので。

KASP 科目

- ・ KASP 科目単位取得者にサーティフィケートを連携校名で授与することに問題ない。
- ・ 全ての科目を提供できる。
- ・ 正規の授業科目として承認できる。
- ・ KASP 科目の教授言語を基本的に英語とすることは全く問題ない。教育系で 10 人以上、心理系で 15 人以上は英語で講義できる。
- ・ Knowledge 領域：もっと選択科目を増やしてもいいのではないか。
- ・ Attitude 領域： Multicultural Education in Asia でもいいのでは？
- ・ Skill 領域：リーダー養成なのにリーダーに関する授業科目がないのが気になる。Skill 領域に 2, 3 科目入れて、選択にしたらどうか。例えば、Educational Policy in Asia、Educational Management in Asia、Sociology of Education in Asia など。
- ・ Practice 領域：2 週間程度の受け入れは可能。宿舎の斡旋もできる。学校等の訪問も可。

インターンシップの場合、基本的に中国語が理解できないと難しいのではないか。インターンシップと言えば、教育行政機関に一定期間勤務することはある。例えば、高校で、英語の先生の下で授業を手伝ったりすることがありうるかもしれない。

国立政治大学

- ・ 計画が具体的になり進展した。集中講義型に賛成。全面的に協力する。
- ・ 東北側が夏期なら台湾側で冬期に対応する。旧正月以外の 1 月下旬から 2 月上旬でどうか。
- ・ 経費は自己負担を原則とし、可能であれば各大学が自分の学生に援助するという方式でどうか。
- ・ 社会人学生が受講する可能性あり。
- ・ 教員の通常セメスターの授業負担を軽減すれば、集中講義に対応できる。
- ・ 2 単位に対応が可能かもしれないが、今後の検討課題である。
- ・ 3 人程度なら学生募集は可能ではないか。もっとエントリーするかもしれない。
- ・ 8 月に開始するならば、2 月頃に周知したい。正規の科目として認定したいため。

KASP 科目

- ・ KASP 科目単位取得者にサーティフィケートを連携校名で授与することに問題ない。
- ・ 提案されているすべての科目を提供できる。
- ・ 集中講義型で提供できる。
- ・ 英語で講義できる教授もそろっている。
- ・ 正規の授業科目として承認できる。
- ・ 本プログラムを受講した政治大学の学生が将来東北大学に進学した際には正規の単位として認定してほしい
- ・ Knowledge 領域：両方とも開講できる。
- ・ Attitude 領域：多文化教育関連の科目でどうか。
- ・ Skill 領域：両方とも開講できる。
- ・ Practice 領域：2 週間程度の受け入れは可能。宿舎の斡旋もできる。学校等の訪問も可。

アジア共同学位開発プロジェクト
調査報告書

提出日：2013年9月24日

報告者名： 小川佳万

○訪問先
中華人民共和国 南京師範大学
○訪問期間
2013年9月14日(土)～9月19日(木)
○訪問者
小川佳万教授、谷口和也准教授、小野寺教育研究支援者
○訪問の目的・経緯等
来年度開講予定のアジア教育リーダー養成コースの概要説明および意見交換
○先方対応者
南京師範大学 【教育科学学院】顧建軍教授(教育科学学院院長)、胡建華教授、陶宝講師 【心理学院】 傅宏教授(心理学院院长)、陳陳准教授
○成果
【基本情報】 <ul style="list-style-type: none">・南京師範大学は、教育科学学院・心理学院ともにAJPへの参加を希望する。・AJP用の授業を担当する教員に対して、特別手当を設ける必要はない。・参加学生は3人から5人程度であれば確保できるだろうが、財政的支援は必要(サマーコース2013の際も、中国国内の旅費と仙台での宿泊費は南京師範大学が負担した)。<ul style="list-style-type: none">⇒・1人の学生につき1回分の渡航費は出せるだろう。・南京師範大学は、各学院で財政援助を行う。・外国人学生受け入れに当たり、宿舎も用意できる。<ul style="list-style-type: none">⇒東北大学としては、どのような宿舎(1泊いくら?)を用意するか決定する必要がある。
【カリキュラム】
◆KAS科目 <ul style="list-style-type: none">・KASに該当する科目を出すことは可能。ただし、具体的な科目については担当教員と相談して決めていく必要がある。

- ・9月中に担当教員と科目を決定し、11月末までに授業シラバスを送っていただく。
⇒台湾と韓国の大学にも同様のお願いをし、3か国・地域の授業担当者が直接授業内容について議

論を行う場を1月までに設ける必要がある（2月にパンフレットを完成させるため、スピード感重視）。

- ・提出していただくシラバスの見本として、「Global Citizenship（谷口先生）」のシラバスをこれから送る。

◆Practice

- ・参加学生の関心に応じてその都度フィールドワークを設定するより、むしろ各校で特色あるフィールドワークを固定して設け、学生がその中から選択していくパターンも良いのではないか。

【単位】

- ・南京師範大学でも2単位の科目は開設されているので、調整は可能。

【コーススケジュール】

- ・中国では旧正月があるため、ウィンターコースよりサマーコースのほうが担当しやすい。
⇒韓国にウィンターコースを担当してもらう？

【事務】

- ・南京師範大学がサマーコース或いはウィンターコースを担当するとき、事務的手続きも行っていた

だく必要がある。例えば、外国人学生のビザに関する事務的手続きや、Practiceでの連携機関とのやり取り等。

⇒南京師範大学でもAJP組織を構成して対応する。

4 連携事業

合同カリキュラム委員会

AEL Course

4 連絡事業

今年度は共同教育カリキュラムの創出をめざし、連携校と協議を重ねてきた。昨年度発足させた東北大学－高麗大学合同カリキュラム委員会を足掛かりに協議を重ね、ここに連携校を加え、本研究科を含む総勢 5 大学による AEL Course 合同カリキュラム検討委員会を発足させた。

東北大学－高麗大学第1回連絡協議会

【日時】平成25年4月29日（月） 16:00～

【場所】高麗大学校師範大学会議室

【参加者】

東北大学：小川佳万教授、安保英勇准教授、田中光晴助教

高麗大学：韓龍震教授、朴仁雨教授

以上、順不同敬称略

議題1. サマーコースについて

(1) 単位化

2013年度サマーコースに参加する海外学生に対する単位付与（認定）の方法について議論し、以下のことが確認された。

- ・東北大学から出された修了証のみでの単位認定は高麗大学では行なうことができない。単位認定には、正規の学生と同様の成績表が必要。（特別聴講生の処理を検討）
- ・高麗大学にも同様の科目を新設し、サマーコース参加学生はその新設科目を履修することで、単位化するという方法もある（この方法を使う場合5月末までに判断し高麗大学側に伝達）。
- ・単位の問題、授業料の問題を盛り込んだ細則の締結に向け作業を始めることとなった。

(2) 学生募集

サマーコース、集中コースを開催することが確認され、高麗大学に両コースへの学生参加者募集の協力を要請した。

(3) 講師派遣

サマーコースへの講師派遣を依頼した。心理系は李相旻准教授、教育系は朴仁雨教授を派遣することとなった。

議題2. 共同教育科目の開設

サマーコース以外で両校において単位となる共同教育科目の開設について議論した。履修方法としては、①集中講義型、②学期型に分かれるが、学期型を想定した教育科目の可能性について、遠隔教育を活用した15回授業の提案がなされた。

教科の内容については、担当教員に合わせ、両校担当教員同士でつめることとなった。来年度から始める場合8月末までに担当教員を決定し、9月末までにシラバスを確定する作業が必要となる。言語は英語に限らない。

議題3. その他

(1) 学位審査の共同化

修士論文の審査に両校教員が関わる「共同学位審査」について検討した。高麗大学では学位審査委員会が学位授与の最終決定権を持っており、外部審査委員を入れることに問題はない。特に心理系論文はほとんど英語で執筆されているため今年度からの共同化も可能。

(2) 大学院生ワークショップの開催

大学院生の学術交流のための成果発表会（国際学術コロキウム）の開催について検討した。高麗大ではそのような取り組みは行なっていないが、行なうことは可能。1月、2月であれば会場提供、発表者確保も可能。

(3) 紀要への相互投稿

高麗大学の師範大学独自の学術紀要はなく、4つのKCI（韓国学術誌）紀要編集事務局（審査料9万ウォン、掲載料20万ウォン、採用率30%～60%）がある。教員は査読（KCI、ACC基準）論文誌に投稿する傾向があるため、相互投稿は厳しい。交流可能性としては紀要編集委員などの外部編集委員として参加することなどが提案された。

(4) 宿舎の問題

長期休業期間（7, 8, 1, 2月）であれば外国人留学生寄宿舍が利用可能（1泊60,000ウォン、2人1部屋）、学期中である場合周辺のホテルなどを利用。1ヵ月であればウィークリーマンションなどを手配する。

次回はネット会議を開催する。

開催予定日 2013年5月20日（月）16:00～



東北大学－高麗大学第1回連絡協議会の様子

東北大学－高麗大学第2回連絡協議会

【日時】平成25年5月20日（月） 16:30～

【場所】文化系総合研究棟 204号室（ネット会議）

【参加者】

東北大学：小川佳万教授、安保英勇准教授、谷口和也准教授、神谷哲司准教授、朴賢淑助教、田中光晴助教、朴仙子教育研究支援者、小野寺香教育研究支援者、黒田由希子事務補佐員

高麗大学：朴仁雨教授

以上、順不同敬称略

議題1. サマーコースの単位化について

今年度の東北大学で開催されるサマーコースに参加する高麗大生については、東北大学において科目等履修生などの対応を取らないこととなった。来年度のサマーコースの単位化の方法については、今後も引き続き検討することとなった。

議題2. 共同教育科目の開設（サマーコース以外）

小川教授より、共同教育科目の東北大側担当者を若島准教授とすることが報告された。これに合わせ、高麗大学側は6月までに候補者を推薦することとなった。心理系教員が3名いるので、その内一人が担当する予定。授業内容、方法については、担当教員2名が協議し、決定することとなった。打ち合わせについては、ネット会議など費用がかからない工夫をすることとなった。

議題3. 大学院生ワークショップの開催

年度末などに大学院生の成果報告会を共同で開催することで合意した。開催時期及び場所については、2014年の2月か3月に高麗大学で行なうこととなった。この件に関する高麗大学側窓口は朴仁雨教授。



東北大学－高麗大学第2回連絡協議会の様子

アジア共同学位開発プロジェクト AEL Course 合同検討委員会

【日時】2014年1月12日（日） 10:30～15:30

【場所】TKP ガーデンシティ竹橋 11階 ホール11B

【参加者】

東北大学大学院教育学研究科：

本郷一夫研究科長、上埜高志副研究科長、小川佳万ディレクター、安保英勇サブディレクター、谷口和也サブディレクター、工藤与志文教務委員長、三輪哲准教授、朴賢淑助教、田中光晴助教、朴仙子教育研究支援者、小野寺香教育研究支援者、鳥澤誠事務長、黒田由希子事務補佐

南京師範大学教育学院：

顧建軍院長、胡建華教授、劉晶波教授

南京師範大学心理学院：

傅宏院長、陳陳准教授

国立政治大学教育学院：

湯志民院長、陳榮政助理教授

高麗大学校師範大学

申昌鎬教育学科長

以上、順不同敬称略

審議 1. Asia Education Leader Course の枠組みについて

小川佳万プロジェクト・ディレクターより AEL Course の枠組みについて資料に基づき提案がなされた（資料 4-1-1）。

提案を受け、下記の質疑・応答がなされた。

(1) 授業科目について

- ・KASP 重複履修にならないために、講義名を調整する必要がある。サブタイトルで調整してはどうか。
→講義名は重ならないように設定し、どうしても似た科目の場合、科目の後ろに国のイニシャルをつけ調整する。
- ・シラバスは AEL Course の全体像に照らし弾力的運営をしてはどうか。例えば、AEL Course に合った良い科目があればその都度取り入れていくようにし、それらをまとめる窓口があるとよい。
→科目については KASP 領域に基づき、多様に準備してよい。窓口はその大学の連携責任者としてほしい。
- ・AEL Course サーティフィケート授与条件の 12 単位の内半分は外国で履修させてはどうか。
→12 単位の内 6 単位は海外の大学で履修することを明記する。

(2) 授業内容・方法について

- P (Research Study) の授業内容に要件はあるか。
→授業担当者に一任する。東北大学では、現場体験やインターンシップなどを中心に授業し、その成果を報告させたり、レポートを提出させる予定である。アクティブラーニングやグループ学習などを中心に構成してほしい。
- 科目名に「アジア」がついているが授業内でアジアを網羅的に取り上げる必要があるのか。
→授業担当者に一任する。アジアを網羅的に扱ってもよいし、一つの国をテーマとしてもよい。授業担当者の専門に即してその国でしか学べないことを扱ってもらいたい。

(3) 学生募集について

- 学生にはコース、費用を事前に開示する必要がある。また授業概要を開示する必要がある。
→3月には募集要項・パンフレットを完成させたい。そこに掲載する。
- 各大学からの学生募集は何名を想定しているか。
→各大学3~5名を想定している。
- AEL Course 学生はいつ履修登録を行なうのか。年度初めなのか。長期休暇中はキャンパスに学生がいらない（南京）。例えば履修希望者が1名だった場合、開講すべきなのか。事前に履修意向調査ができると調整ができるのではないかと。学生募集の段階で科目、スケジュールを提示し、その時点での意向調査を取る必要があるのではないかと。
→AEL Course への学生登録は各大学で4月と10月に行ない、その際履修意向調査を行なう。
- 滞在中の学生管理はどうするか。授業外時間のコーディネートをどの程度する必要があるのか。
→学生サポーターをつけたり、留学中の相談窓口を設けるなどで対応する。

(4) 全体の運営について

- AEL Course 運営を統括する本部をつくる必要がある。
→東北大学が2年は担当する。各大学に連携責任者を置いてほしい。研究科長名でそれぞれの部局長に依頼状を送付する。

審議 2. AEL Course シラバスの枠組みについて

谷口和也准教授より、資料に基づき、AEL Course シラバスの枠組みについて提案がなされ（資料 4-1-2）、下記の質疑・応答がなされた。

(1) 評価について

- 授業時間や単位が各大学で異なるがどう調整するか。
→各大学の授業時間及び単位数に合わせて授業をつくっていただいで問題ない。授業時間数及び単位数は AEL Course 成績証明書に記載する。
- 各大学で成績基準が異なるので基準を設けてはどうか。
→成績を付ける際はスコアでの表記を基本とし、80点を最低ラインとする。それ以下の

場合は点数をつけず不可 (F) とする。

(2) 授業担当について

- ・授業担当者は複数名としてもよいか。
→AEL Course では学生交流と同時に教員間の交流も目指している。同じファカルティ内で複数担当してもよいし、連携校から教員と共同で担当してもよい。費用は集中コース担当校が負担する。
- ・連携校の教員データベース (人材バンク) を共有する必要があるのではないか。少なくとも AEL Course 委員会が必要ではないか。
→授業担当調整のみならず、AEL Course に関する連絡・協議が可能な窓口教職員を連携校におく。

(3) 授業科目について

- ・AEL Course のコース名にあるように、リーダー論やリーダーとしての資質を学べる科目を設定してほしい。
→教育リーダー論を冠した科目の開設を連携校に促す。集中セミナー期間中に外部講師などによる「リーダーセミナー」を設けてはどうか。

審議 3. 合意事項についての確認

小川佳万教授より合意事項の確認がなされた。

- ・授業名は極力重ならないように設定する。
- ・成績基準は 80 点を最低ラインとし、それ以下の場合は不可 (F) とする。
- ・3 月中に学生募集要項及びブロシュアを完成させ、登録を開始する。
- ・AEL Course 実務者教職員の推薦を研究科長から連携校の部局長に正式に依頼する。
- ・2 月 14 日までに AEL Course シラバスをフォームに合わせて提出する。

Making General Agreement for Designing of **AELC** Courses

Director, of AJP
Graduate School of Education, Tohoku University

Professor Dr Yoshikazu OGAWA

Overview

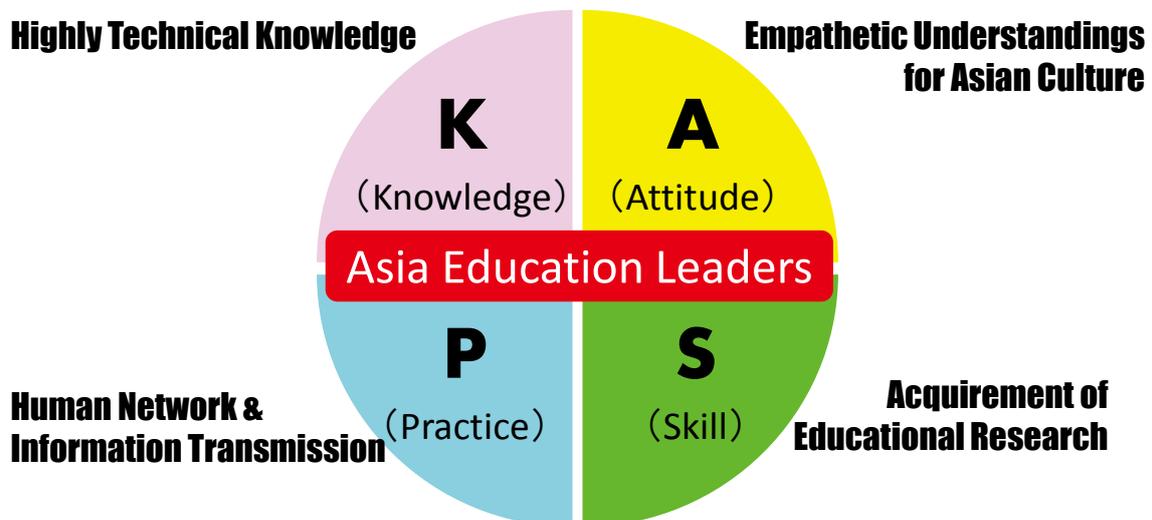
Aims of **AELC** (Asia Education Leader Course)

Developing Professionals of...

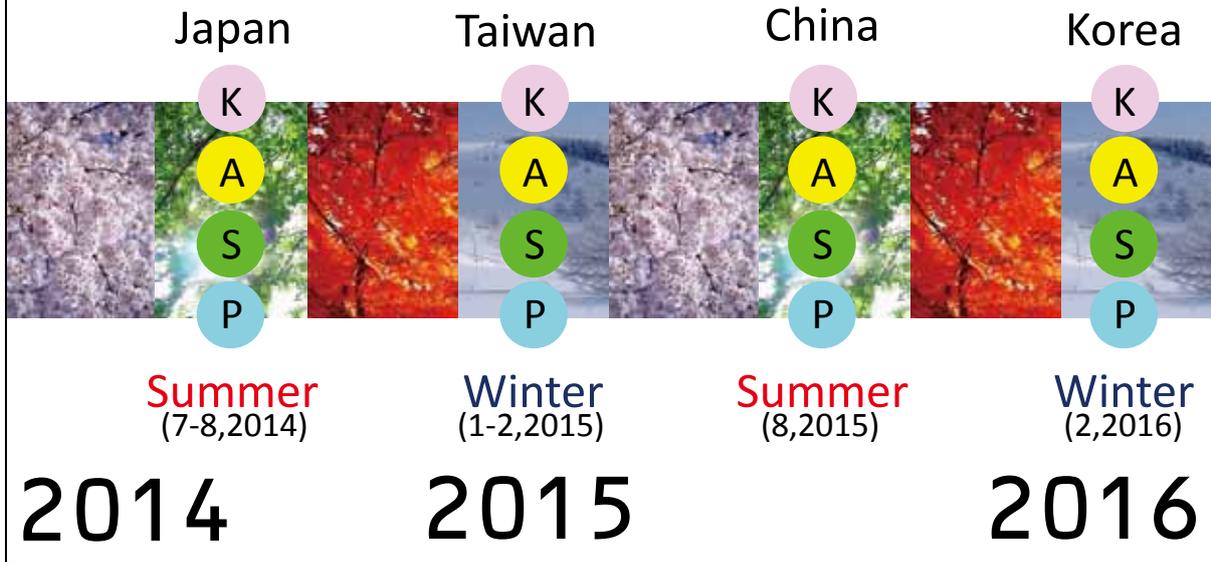
- 1) **Researchers** in Education
- 2) **Leading Teachers** of Schools
- 3) **Administrators** of Education

Who address the **Issues** and **Challenges**
faced by the **Asian** Societies

AELC is Consisted from **4** Clusters of Performances



First Season of 2 Years (Apr. 2014-Mar.2016)



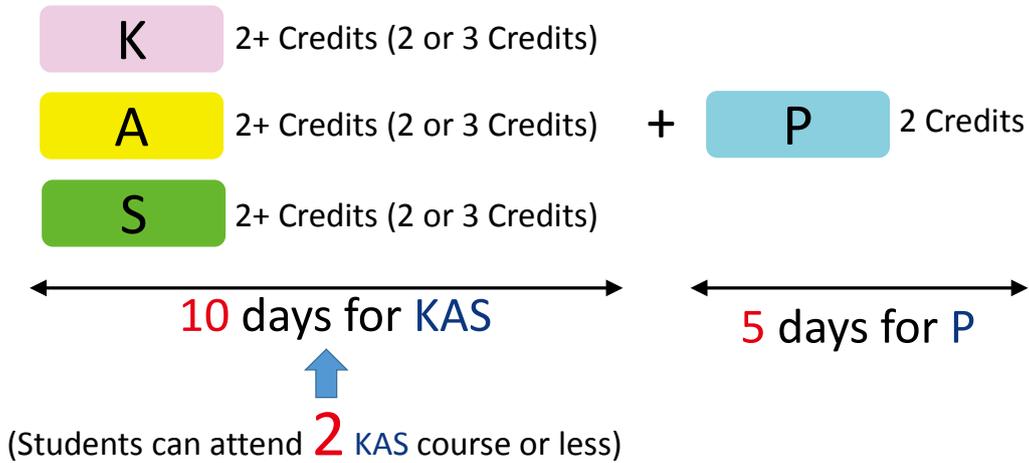
Partner Universities



		Japan	Taiwan	China	Korea
K	Contemporary Education Issues in Asia				
	Educational Policy in Asia			K is Required	
	Educational Technology				
	Establish New Course				
A	Global Citizenship				
	Education and Culture of Asia			A is Required	
	Multicultural Education in Asia				
	Establish New Course				
S	Data Analysis for Surveys				
	Case Study Method				
	Class Management in Asia				
	Establish New Course				
P	Research Study	I	II	III	IV

Curriculum Design

Each University prepares **ALL** KASP Clusters



Students should...

- Fulfill **8** Credits for KAS and **4** Credits for P
- Stay **Home** and **Other** Univ. at Least

Curriculum is designed to lead these requirements
(Course Menu, Period, Credits and so on)

In the Case of TOHOKU University



A

Global Citizenship
(2 credits)

K

Contemporary Education
Issue in Asia
(2 credits)

P

Research Study I
(2 credits)

S

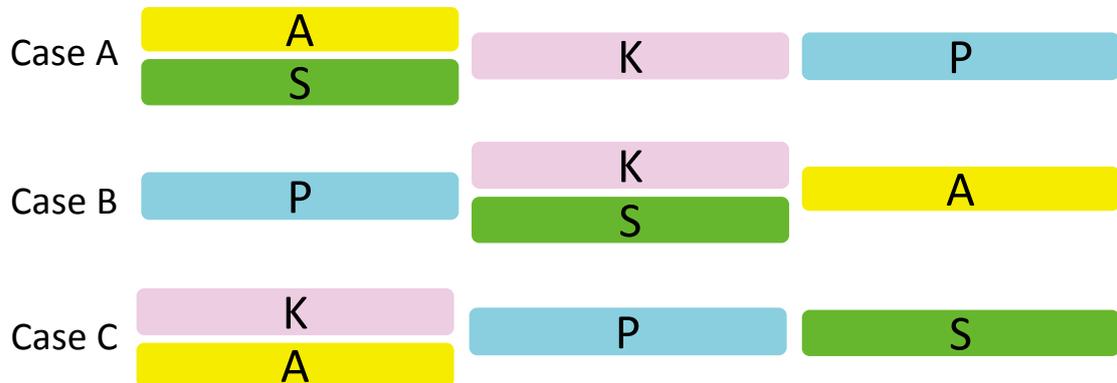
Data Analysis for
Survey
(2 credits)

15 days Curriculum can be designed FREELY



- 1) **P** should be Independence
- 2) **Block** Students to attend **ALL KAS** during One Stay

15 days Curriculum can be designed FREELY

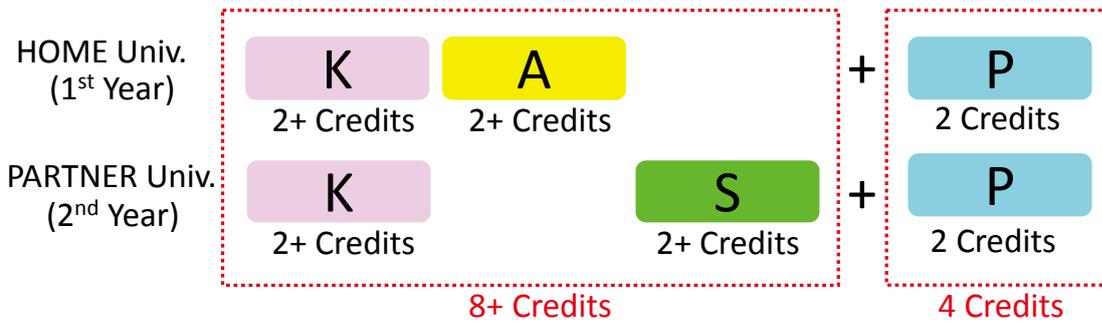


- 1) P should be **Independence**
- 2) **Block** Students to attend **ALL KAS** during One Stay

From Students' View

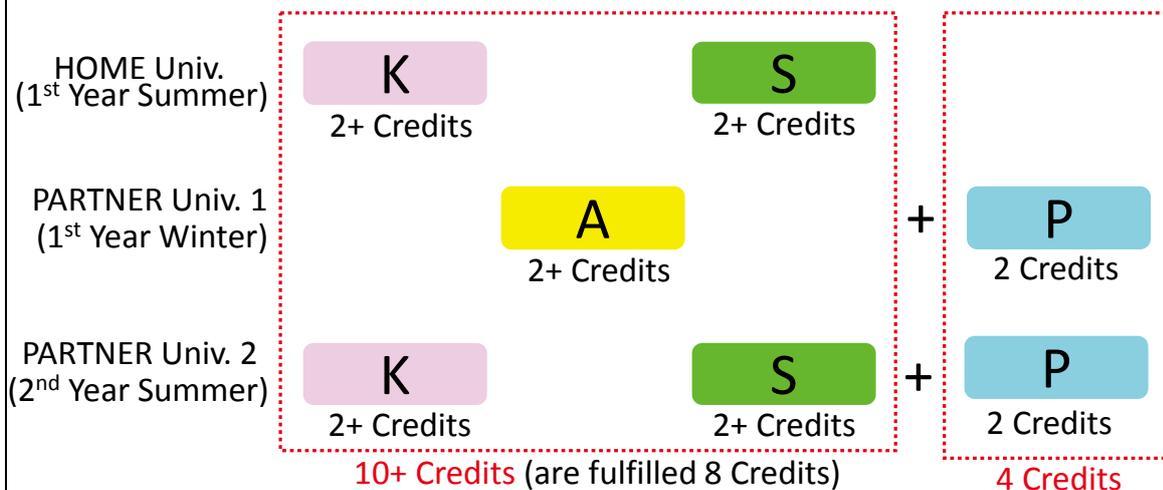
Students: Case A (Minimum Stay)

\longleftrightarrow 10days for **KAS** \longleftrightarrow 5days for **P**
 Students can attend only **2** or less courses from **KAS** Course during His/Her Stay



Students: Case B

(Students Who want to Stay Abroad More)



Students will...

- Study **KAS** at **One or More** Partner Univ.
- Experience **P** in **One or More** Oversea Area
- Study with **Students** from **Partner Univ.**

Details of AELC Courses

Character of AELC Courses

- 1) **Intensive** Course
- 2) **English** Only
- 3) **New** Established or **Existing**
- 4) **Closed** or **Open**

Applicable Students

- 1) **Regular Master Students** of Each Schools
- 2) Adequate **English Ability** for The Course

-HOME Univ. Select Students

AELC Transcript

- 1) At the end of the intensive course, **AELC Transcript** (List of Recognized Courses and Score) are Issued for the students.
- 2) Credits of Lessons in **HOME** Univ. are recognized to **Home** Students
- 3) Credits of Lessons in **Partner** Univ. are treated by Students' **HOME** University



TOHOKU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION
27-1 Kawanchi, Aoba-ku, Sendai, 980-8578 JAPAN

AELC TRANSCRIPT OF SCHOLASTIC RECORDS

Name: _____ (M / F) Date of Birth: _____
Address: _____ Home University: _____

YEAR: Jul 24, 2014 – Aug 7, 2014

Subject/Area	Subject	Score	Grade	Credits
High Professional Knowledge	Contemporary Education Issues in Asia	—	—	—
Foreigner Attitude toward Asia	course (Semester)	—	—	—
Experience in Field	Research Study I	—	—	—
Total Credits				—

Score: 1. Grading System:
 3=Excellent(90~100), 4=Good(80~89), 3=Average(70~79), 2=Below Average(60~69), 1=Failure(<60)
 2. One credit is obtained at 60 minutes / 20 minutes / 33 weeks

I certify the validity of the above information.

Date of Issue: _____

Kazuo HONGO 
Dean
TOHOKU UNIVERSITY
Graduate School of Education

Certificate of Completion

This is to certify that

Name: **Taro, TOHOKU**

Date of Birth: August, 16, 1980

University: Tohoku University

has successfully completed

Asia Education Leader Course

Granted: March 28, 2014



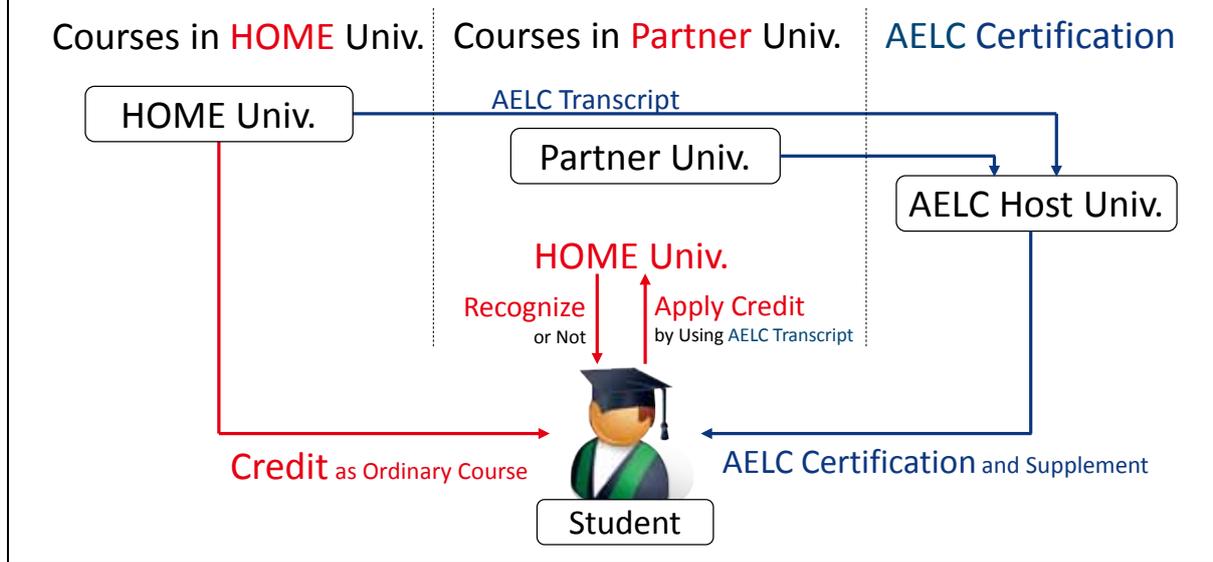







AELC Transcript

Recognition of Credit AELC Courses



Payments

Student's Payments for AELC

- 1) Payment for Courses are FREE
- 2) Travel and Accommodation are Student's Expenses
- 3) HOME Univ. are expected to Prepare Scholarship
- 4) Receiving Univ. are expected to Prepare/Introduce Reasonable Accommodations

Thank you

Making General Agreement for Designing of **AELC** Courses

Deputy Director, of AJP
Graduate School of Education, Tohoku University

Associate Professor Dr Kazuya TANIGUCHI

Overview of **AELC** Course

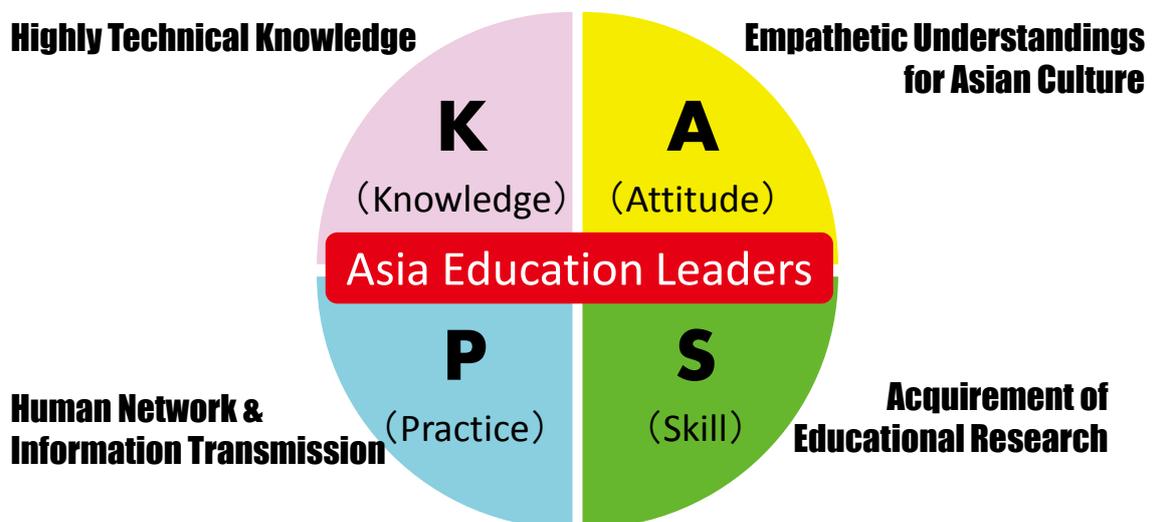
Aims of **AELC** (Asia Educational Leader Course)

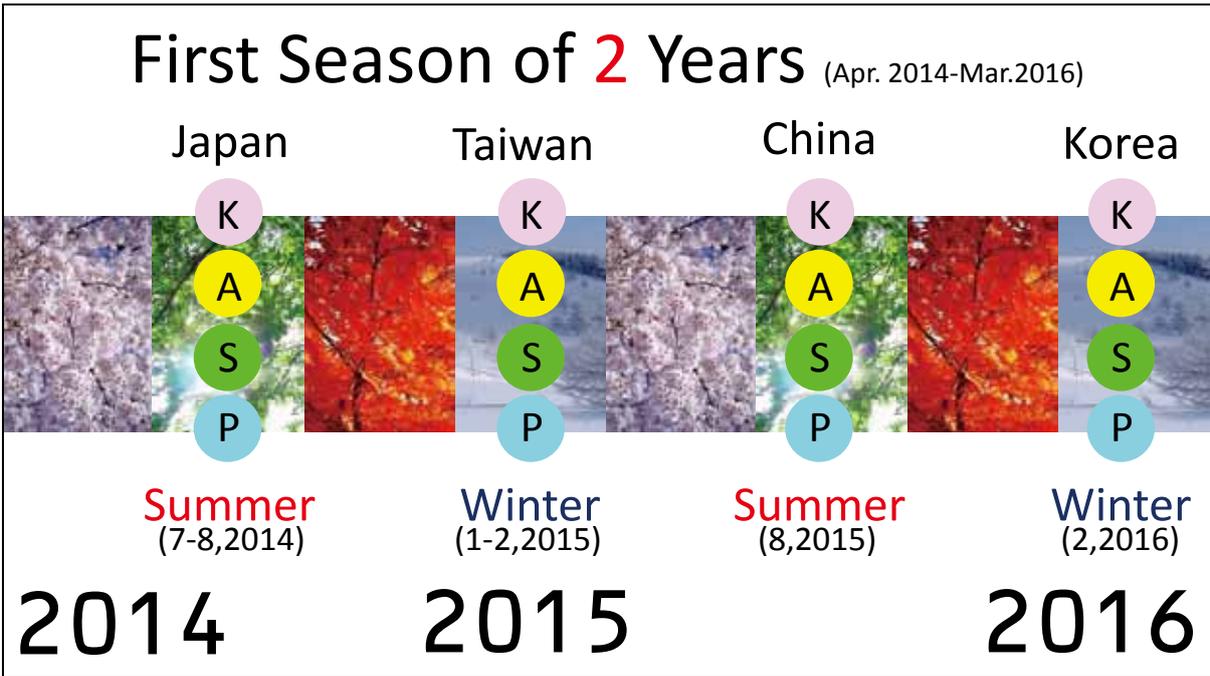
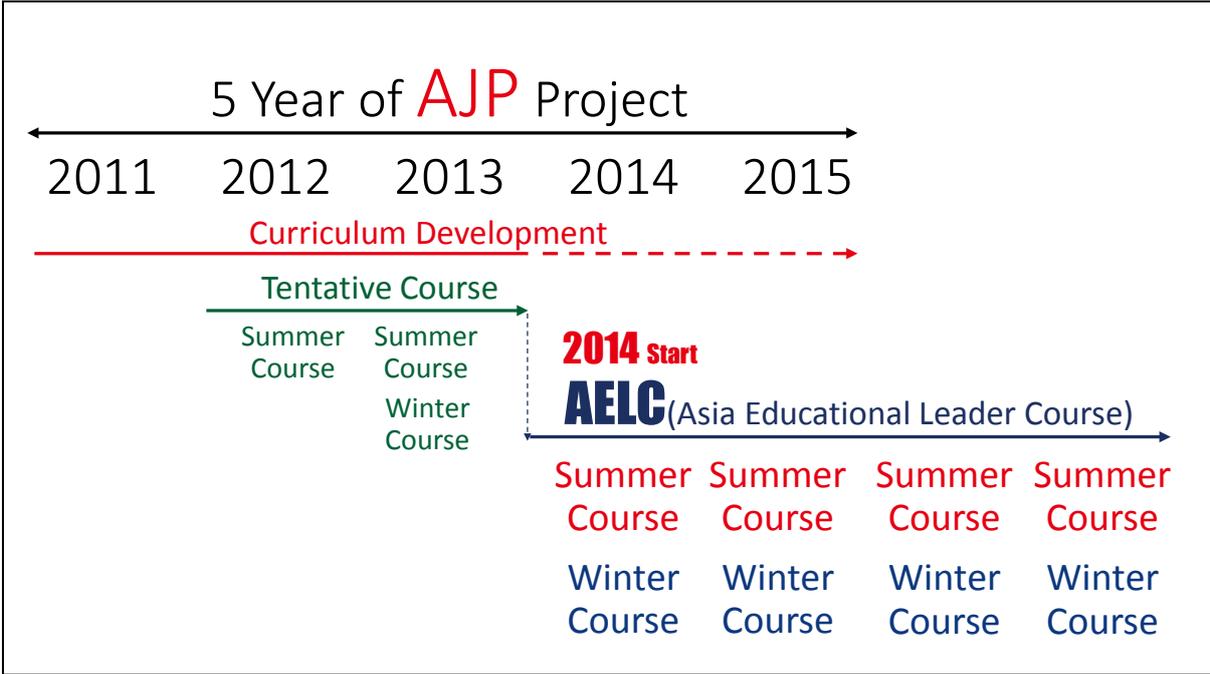
Developing Professionals of...

- 1) **Researchers** in Education
- 2) **Leading Teachers** of Schools
- 3) **Administrators** of Education

Who address the **Issues** and **Challenges**
faced by the **Asian** Societies

AELC is Consisted from **4** Clusters of Performances





		Japan	Taiwan	China	Korea
K	Contemporary Education Issues in Asia				
	Educational Policy in Asia				
	Educational Technology				
	Values & Innovation in China's Educational Policy				
A	Global Citizenship				
	Education and Culture of Asia				
	Multicultural Education in Asia				
	Moral Education of Children in China				
S	Data Analysis for Educational Research(J)(T)	(J)	(T)		
	Advanced Data Analysis				
	Case Study Method(T)(K)		(T)		(K)
	Class Management in Asia				
P	Children and Youth in Asia				
	Research Study (T)(C)(K)		(T)	(C)	(K)

Agreement

1. Using Different Course Name
2. When it can't...
Add Country Sign (Like J)

Please Change the Name

	Japan	Taiwan	China	Korea
P	Children and Youth in Asia (as Research Studies)			
 (as Research Studies)			
 (as Research Studies)			
 (as Research Studies)			

Making General Agreement for Designing of **AELC** Courses

Character of **AELC** Courses

1) **Intensive** Course

Tohoku⇒90min × 15times are guaranteed
Depends on Each University Case

2) **English** Only

3) **Active Learning** is Recommended

(Discussion, Observation, Research, Internship)

Character of **AELC** Courses

1) **Existing** or **New Established**

Using Existing Courses are Allowed

2) **Open** or **Closed**

Ordinary Graduate Students are Allowed to Attend

Case 01

Contemporary Education Issues in Asia

By Professor Yoshikazu OGAWA

This course is...

- former **Summer Course** redesigned for **AELC** students.
- located in our **optional course** list.

However...

- open** to Graduate Students of our university.
- Our students who hope to attend the course can **get our Univ.'s credit** as Optional Course.

Case 02

Global Citizenship

By Associate Professor Kazuya TANIGUCHI

This course is...

- located in our **Curriculum & Instruction** Course.
(Lecture: Curriculum Studies 2)
- designed for both **Tohoku** and **AELC** students.
- fully open** to ordinary graduate students.

Case 01

Contemporary Education Issues in Asia

By Professor Yoshikazu OGAWA

This course is...

- former Summer Course redesigned for **AELC** students.
- located in our optional course list.

However...

- **open** to Graduate Students of our university.
- Our students who hope to attend the course can **get our Univ.'s credit** as Optional Course.

Our Curriculum

AELC course

Curriculum and Instruction Course

Lecture 1: Curriculum Studies

Lecture 2: Curriculum Studies

Seminar 1: Curriculum Studies

Seminar 2: Curriculum Studies

Lecture 1: Educational Psychology

Lecture 2: Educational Psychology

Educational Policy Course

Lecture 1: Educational Policy

Lecture 2: Educational Policy

Seminar 1: Research Method in Sociology

Seminar 2: Research Method in Sociology

Optional Courses

Schools in Asia

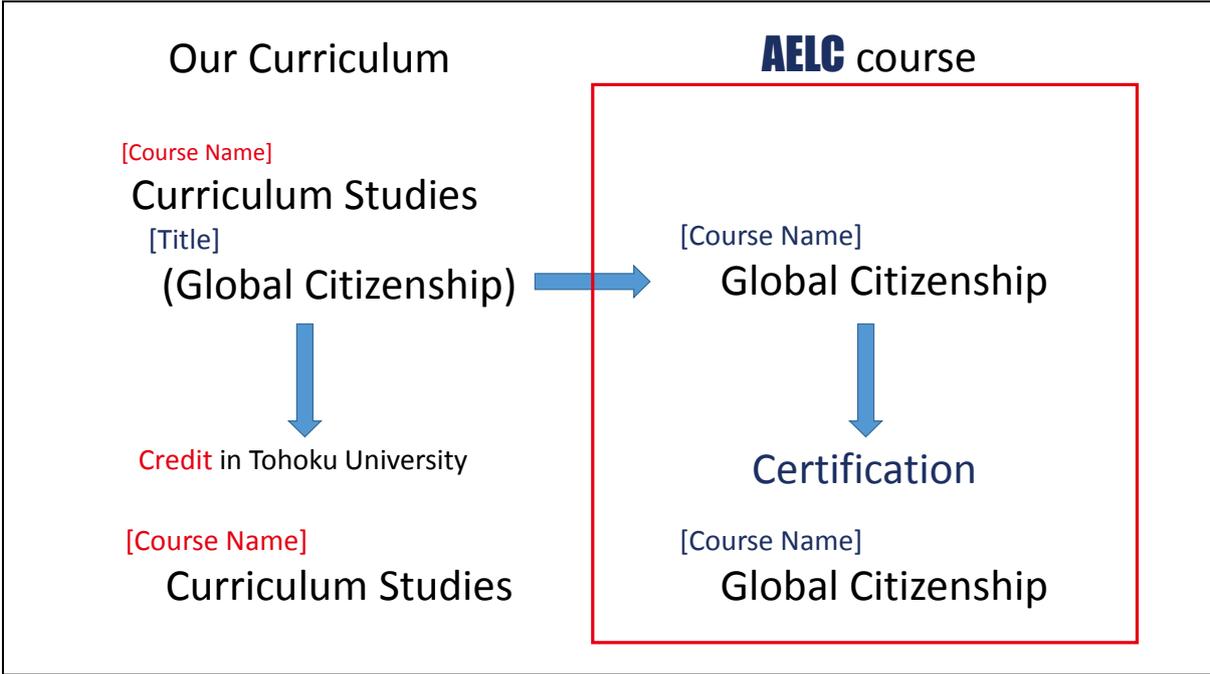
Children and Youth in Asia

→ Global Citizenship for A

→ Data Analysis for Educational Research
for S

→ Contemporary Education Issues in Asia

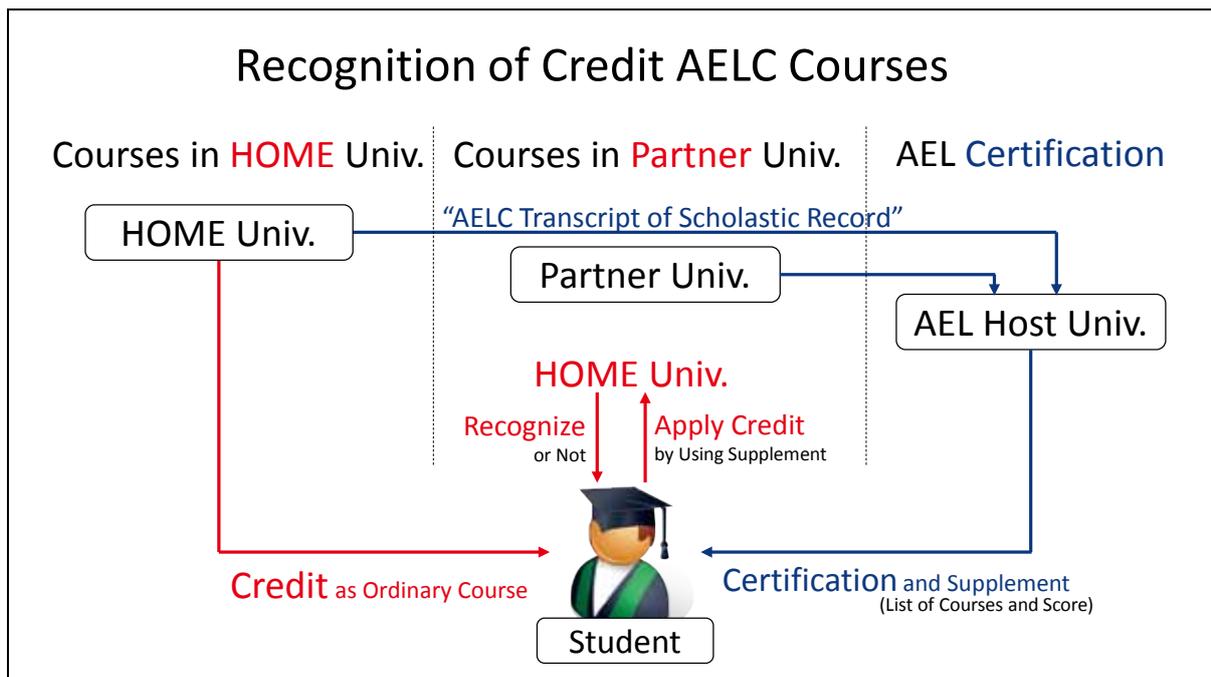
→ Children and Youth in Asia for P
for K



Certification in **AELC** Courses

AELC Certification

- 1) AELC **Certification** and **Supplement** are Issued
(List of Recognized Courses and Score)
- 2) Credits of Lessons in **HOME** Univ. are recognized to **Home** Students
- 3) Credits of Lessons in **Partner** Univ. are treated by Students' **HOME** University



Required Information

Using "AELC Transcript of Scholastic Record"

1) Subject Area & Subject Name

2) Score*
(0-100 points)

3) Credit
(2 credits, 3Credits of more, depends on)

Univ. Score	Tohoku	National Chengchi	Nanjing Normal	Korea	N. Taiwan Normal
	Summer 2014 FY	Winter 2014 FY	Summer 2015 FY	Winter 2015 FY	Winter 2016 FY
90-	AA (Excellent)		A	A+ A0	
80-89	A (Good)		B	B+ B0	
70-79	B (Average)		C	F	
60-69	C (Below Average)	F	D	F	F
-59	D (Failure)	F	F	F	F

Agreement

Students who will pass AELC should get
Over 80 points

Students who will **NOT** pass AELC
should get **F**

Thank you

アジア共同学位開発プロジェクト AELC 合同検討委員会の様子





Asia Education Leader Course について

1. 目的

Asia Education Leader (AEL) Course は、国際的教育指導者養成のための共同学位の創設を目指し、2014 年から AEL Course 証明書を発行するプログラムを開始します。AEL Course は、東アジアの教育課題に対応できる国際的視野をもった指導的人材の養成を目標としています。より具体的には、東アジアを中心に据え、①教育課題の現状を的確に分析できる教育研究者、②教育課題を認識し、教育現場で教育実践を担うことができるリーダー教員、③世界の教育改革を視野に収め、政策立案に携わることのできる教育行政関係者などの人材を育成しようとするものです。

AEL Course では、自国の文化に根差した、なおかつ他国や他の地域の文化を尊重する態度と国際的教育指導者に必要される資質・能力を Internationally-Minded Educational Professionals (IMEP) と称し、そのコアとなる 4 つの要素を“KASP”として提唱しました。つまり、①高度に専門的な知識 (Knowledge)、②東アジアに対する理解と共感的態度 (Attitude)、③教育研究技法と東アジアの言語の習得 (Skills)、④世界に開かれた人的ネットワークの形成と情報発信 (Practice) の 4 つです。本プログラムでは、この 4 つの領域をアジア諸国で学べるように計画されています。

2. 本プログラムの連携大学・部局

東北大学大学院教育学研究科 (日本)、国立政治大学教育学院 (台湾)、国立台湾師範大学教育学院 (台湾)、南京師範大学教育科学学院・心理学院 (中国)、高麗大学校師範大学 (韓国)

3. 対象学生と募集

連携大学の大学院に在籍している者から希望者を募集します。必要があれば、各所属大学にて随時選抜を行いません。AEL Course に登録した学生は AEL Course 学生と称します。

応募資格

- (1) 連携大学に所属する大学院の正規学生
- (2) 英語による講義聴講が可能な学生

4. AEL Course Certificate の授与条件

- ・ AEL Course に指定されている所定の科目をすべて受講し、所定の成績を収めた学生には、卒業時に AEL Course Certificate が授与されます。
- ・ KASP 科目から 12 単位以上 (6 単位は海外で履修) の履修が AEL Course Certificate の授与条件です。

5. 費用

- ・ 登録料、授業料は免除されます。

- ・渡航費、宿泊、海外旅行保険料などは各自負担です。

6. 授業開講会場と時期

授業開講時期は、連携大学ごとに7月～8月、1月～2月の間に、およそ15日間程度の日程で開催されます。授業開講会場は、2014年7月～8月：東北大学、2015年1月～2月：国立政治大学・国立台湾師範大学、2015年7月～8月：南京師範大学、2016年1月～2月：高麗大学校で開講される予定です。

7. 単位と単位認定

それぞれの科目に設定されている単位数は、その授業が開講される連携校によって異なります。所属大学で開講されている科目を履修する場合は正規の単位として認められます。所属大学以外の連携大学で聴講した科目については、所属大学で単位として認められる場合と認められない場合があります。

尚、連携大学で聴講した場合、連携大学からはAEL Course独自のフォーマットに基づく受講証明書（授業科目の内容、授業時間数、成績評価の基準、授与される単位数、当該学生の履修成績を明記）を発行します。

5 イベント報告

国際セミナー

国際シンポジウム報告

交流協定報告

5-1 国際セミナー

本プロジェクトでは、本研究科の教員との研究交流を促進するため、国内外から研究者を招き、国際セミナーを開催している。

本年度は、1名の研究者が本研究科の客員教員として1ヶ月間滞在しながら共同研究等を行った。

表 5-1 客員教員一覧

名前	所属大学	滞在期間
陳 陳 准教授	中国・南京師範大学	2013.08.01～2012.08.31

今年度行われた国際セミナーは表 5-2 の通りである。なお、詳細については発表資料を参照されたい。

表 5-2 国際セミナー一覧

日 時	発表者	所属	タイトル	発表資料
2013/8/26	陳陳 准教授	南京師範大学	The Impact of Perceived Parenting on Chinese Adolescents' Achievement Motivation and Academic Achievement	5-1-1

The Impact of Perceived Parenting on Chinese Adolescents' Achievement Motivation and Academic Achievement

Chen Chen

School of Psychology, Nanjing Normal University
August 26, 2013, 17:30-18:30, 11F Hall

Outline

The research problem

The why of the study

The how of the study

Results

Discussion and implications for education

1. The research problem

❖ Via quantitative and qualitative research approaches to examine the relationship of perceived parenting styles and parenting practices to adolescent students' achievement motivation and academic achievement

❖ To investigate which construct, perceived parenting styles or parenting practices, is the stronger predictor of achievement motivation and academic achievement

2. The why of the study

2.1 The importance of achievement motivation and academic achievement for adolescent students

Achievement motivation and academic achievement are two important indicators of students' school success and healthy development (Calfee & Berliner, 1996; Darling, Cumsille, & Martinez, 2007; Donnellan, 2002; Dweck & Elliott, 1983; Eccles, 1991, 2004; Maehr & Meyer, 1997).

▪ Achievement motivation has long been regarded as one lens to understand students' interest, engagement, and persistence in learning activities, which, in turn, determines student learning and school success (Gilman & Anderman, 2006).

▪ Regarding academic achievement, good or poor academic achievement has far-reaching significance for students' immediate psychological development, the possibility of entry to higher education, and their future careers and citizenship (e.g., Donnellan, 2002; Guerin, Gottfried, Oliver, & Thomas, 2003).

2. The why of the study

2.2 The need to understand adolescent students' achievement motivation and academic achievement as they relate to family context

➤ Theoretically, family context is one of the immediate environment for individuals' development.

➤ Empirically, although research findings have shown the association of parenting styles and parenting practices to achievement motivation and academic achievement, there are still some research gaps.

➤ Some main research gaps

▪ The participants in the majority of published studies on the relationship between parenting and achievement motivation were elementary school children, undergraduates or adults (Coffman, 2001; Dawson, 1997; Gonzalez, 2005; Hein & Lewko, 1994).

▪ Only a few empirical research (e.g., Pong, Hao, & Gardner, 2005) has differentiated and examined parenting styles and parenting practices simultaneously, according to the contextual model of parenting (Darling & Steinberg, 1993).

▪ Few measures of achievement motivation have been grounded in the achievement goal approach (Elliot, 2005), one of the prominent approaches in the contemporary achievement motivation literature.

▪ The cultural differences in the research results on how parenting styles and parenting practices are related to academic achievement call for further research to understand better the effect of parenting styles and parenting practices in different contexts.

2.3 Theoretical frameworks of parenting and achievement motivation in this study

➤ The 2 × 2 achievement goal framework (Elliot & McGregor, 2001)

▪ Definition of achievement goals

----The aim that one is committed to in guiding and sustaining his or her behavior in achievement settings (Elliot & Fryer, 2008; Elliot & Murayama, 2008)

----Some researchers also view achievement goals as the meaning or purpose for engaging in academic behavior, that is, why a student engages in achievement-related behavior (c.f., Kaplan, Middleton, Urdan, & Midgley, 2002).

----As one of the most prominent constructs in the contemporary achievement motivation literature, achievement goals are thought of as a "comprehensive psychological 'program' with 'cognitive, affective, and behavioral consequences'" (Elliott & Dweck, 1988, p.11)

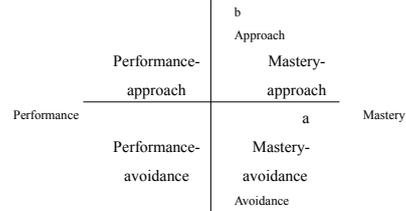


Figure 1 The 2 × 2 achievement goal framework

- Competence is the core of achievement goal approach
- Two dimensions: mastery-performance (how competence is defined) & approach-avoidance (how competence is valenced)
- Adaptive vs. maladaptive achievement goals

2.3 Theoretical frameworks of parenting and achievement motivation in this study

➤ Parenting styles and parenting practices (Darling & Steinberg, 1993)

Parenting can be decoded into three aspects: socialization goals, parenting practices that help children to reach these goals, and parenting styles, an emotional climate within which socialization occurs.

Parenting styles: "a constellation of attitudes toward the child that are communicated to the child and that, taken together, create an emotional climate in which the parents' behaviors are expressed" (Darling & Steinberg, 1993, p. 488).

Parenting practices "are behaviors defined by specific content and socialization goals" (Darling & Steinberg, 1993, p. 492).

➤ Academic achievement

In this study, academic achievement is measured by adolescents' final exam scores in three main subject matters, Chinese, English, and Mathematics.

2.4 Research questions and research hypotheses

➤ Research question 1: Do parenting styles and parenting practices statistically predict achievement goals and academic achievement (Chinese, mathematics, and English)? If so, how?

Research hypothesis 1: Parenting styles and parenting practices will statistically predict achievement goals, with more accepted and supportive parents tend to have children with more adaptive achievement goals.

However, no specific hypotheses will be made on the prediction of academic achievement from parenting, given the cultural differences in the effect of parenting on academic performance.

➤ Research question 2: Which construct, parenting styles or parenting practices, is the stronger predictor of achievement goals and academic achievement?

Hypothesis 2: Considering little research on this topic, no specific hypothesis will be made.

3. The how of the study

3.1 Participants

➤ Seven hundred and seventy-five (775) students, of whom 384 were males and 391 were females;

➤ The average age was 15.69 years (SD=1.61), ranging from 11.75 to 19.00 years;

➤ Two hundred and fifty-nine (259) students were at the junior high school level and 516 students were at the senior high school level, with 172, 82, 267, and 249 students in 7th, 8th, 10th, and 11th grade respectively.

➤ Focus group: after the questionnaire survey, four groups of 6 high school students from one of the three investigated high schools joined in the interview

3. The how of the study

3.2 Measurement

➤ The Achievement Goal Measure-Revised (AGM-R, Elliot & McGregor, 2001)

33 items, among them each five items measuring 4 achievement goals;

7-point Likert scale

The sample items go as follows:

It is important for me to learn as much as I can.
I worry often that I may not learn as much as possible.
It is important for me to do well compared to others in learning.
I just want to avoid doing poorly in learning compared to others.

3.2 Measurement

➤The Parenting Style Index (PSI, Steinberg, Dornbusch, & Brown, 1992; Steinberg, et al., 1994)

26 items, measuring parental acceptance, strictness, and psychological autonomy granted

4-point and 3-point Likert scale for different subscales

The sample items go as follows:

I can count on my parents to help me out, if I have some kind of problem.
When I get a poor grade in school, my parents make my life miserable.
In a typical week, what is the latest you can stay out on Friday or Saturday night?
How much do your parents REALLY know what you do with your free time?

3.2 Measurement

➤Parenting practices

An inventory mainly constructed in the Chinese context (Jiang, 2003); 31 items, measuring parental expectations, parental supportiveness, parental monitoring, parental academic involvement, and parent-child sharing activities

5-point Likert scale

The sample items go as follows:

My parents expect me have a positive learning attitude.
My parents encourage me to develop good study habits.
My parents check whether I have done my homework.
It is a family rule that I cannot have any entertainment until I finish all homework.
When I study at home, my parents work as co-learner together with me.
Do your parents and you go to the following places together (i.e., Exhibition, museum, bookstore, etc.)

4. Results

4.1 Psychometric properties of the instruments

Table 1. Goodness of fit statistical indices of models

Model	Chi-square(χ^2)	df	p-value	RMSEA	NNFI	CFI
Achievement goals	451.40	171	1.65	.07	.91	.97
Parenting styles	451.40	174	2.25	.07	.91	.97
Parenting practices	1255.11	513	2.27	.07	.91	.97
Good model fit			2.00-3.00	<.05	>.90	>.95

Note. RMSEA = Root Mean Square Error of Approximation; NNFI = Non-Normed Fit Index; and CFI = Comparative Fit Index.

All the subscales of the AGM-R, the PSI, and parenting practices inventory were above .70.

4. Results

4.2 School, grade, and gender differences in key variable dimensions

- School reputation and university enrollment rate: mastery-approach goals
- Senior high school students: lower in mastery- approach, performance-approach, and mastery-avoidance goals; less perceived parental supportiveness, monitoring, homework involvement, and parental sharing activities
- Male students: scoring lower than females in both Chinese and English courses; perceiving less supportiveness and more monitoring

4.3 Predicting achievement goals from parenting styles and parenting practices

Table 2. Regression coefficients on the prediction of achievement goals from parenting

	Achievement goal			
	Mastery-approach goal	Mastery-avoidance goal	Performance-approach goal	Performance-avoidance goal
Positive parenting practices	.001	-.001	.001	-.001
Negative parenting practices	-.001	.001	-.001	.001
Parenting practices	.001	-.001	.001	-.001
Parenting styles	.001	-.001	.001	-.001

4.4 Predicting academic achievement from parenting styles and parenting practices

Unexpectedly, parenting styles did not significantly predict all the three subjects.

Parental monitoring negatively predicted all the three subjects (Chinese, mathematics, and English);

Parental supportiveness only positively predicted performance in Chinese;

Parental sharing activities only negatively predicted performance in Chinese;

4.5 Which construct is the stronger predictor?

According to the variance the two constructs explained (R^2), **parenting practices** seemed to be the stronger predictors of both students' achievement goals and performance in Chinese, math, and English.

4.6 Focus group results

➤ Admitting parent importance

For example, three boys in one group mentioned either that “*Parents’ guidance is direct and important*” or “*The key persons around me, such as parents, caring teachers and friends, their expectations and help affect me*”.

➤ Focusing more on parents’ concrete behaviors or practices, rather than the general family climate.

For example, “*Parents’ psychological support, such as expressing their happiness when I achieved good performance, is very motivating. No need external rewards*”.

“*...keeping adequate distance from parents is good, better than supervised and monitored by them when I lived at home every day*”.

“*My parents do not show strict pushing and pressure on me, though I still have a kind of potential pressure*”.

4. Discussion and implications for education

The role of authoritative parenting style

The cooperation of parenting expectations, supportiveness, and sharing activities for adaptive achievement goals

The role of parental monitoring

The stronger predictive power of parenting practices

Thank you very much!

「国際シンポジウム」報告書

目的

本プロジェクトでは、共同学位による国際社会で活躍できるリーダー的教育指導者の育成という観点から、その基盤となる多様な文化や社会を持つアジアにおける共通のシティズンシップ像の構築を課題に国内外の専門家を招へいし、シンポジウムを開催する。このシンポジウムでは、①アジア社会の多様性、②教員養成の基盤、③模索されている先進的実践との関連でアジアのシティズンシップ教育について論じる。

実施状況

詳細は以下の通り。

グローバル人材育成とシティズンシップ教育
ーアジア共通の教育の基盤とは何かー

コーディネーター：谷口 和也

日時：2014年1月11日（土）13：30～17：15

場所：TKP ガーデンシティ竹橋 ホール11G

開会の挨拶

基調講演

アジア共同学位開発プロジェクトの目指すもの

講演

アジア諸国におけるグローバル人材育成
教員養成とアジアのシティズンシップ

Diversity of Asian Region and Citizenship Education

(なお、プログラムや発表資料等は別冊を参照のこと。)

国際シンポジウム「グローバル人材育成とシティズンシップ教育
—アジア共通の教育の基盤とは何か—」を終えて

東北大学 谷口 和也

東北大学大学院教育学研究科のアジア共同学位開発プロジェクトは、2011年度からスタートし、現在、全5年間の期間のうちの3年が過ぎようとしています。これまでは共同学位の開発に関わる調査及び開発研究を行ってきましたが、これから日本・中国・韓国・台湾からの5つの大学をまたいだカリキュラムが実行に移されようとしています。2014年の1月に行われた会合は、我々が目指すべき人材育成についてこれまでの調査・開発研究の成果の集大成としてシンポジウムで議論するとともに、各大学の代表による実務者会議を開いて実施のための細部を煮詰めるためのものでした。

国際シンポジウムは、2014年1月11日に東京のTKP ガーデンシティ竹橋で、「グローバル人材育成とシティズンシップ教育—アジア共通の教育の基盤とは何か—」と題して開催されました。本来、教育はドメスティックな営みであり、各国の国民・市民育成を目標としてカリキュラムが構成されています。その中で、共同学位の先進地域であるヨーロッパには、「ヨーロッパ市民」とでも言うべき緩やかな意識も存在しており、ヨーロッパ評議会においても各種のシティズンシップ教育の教材が開発されてきています。これまでの報告書で述べてきたように、本プロジェクトは、このヨーロッパの高等教育制度をモデルとした「アジア版エラスムス・スミンドゥス計画」とでも言うべきものを目指して取り組んできました。しかし、翻って我々のプロジェクトが基盤とする東アジア地域は、モデルとなったヨーロッパのような「東アジア市民」と言う様な共同体意識はあるのでしょうか。我々は、何に教育の基盤において国を超えて活躍できる教育の専門職を育て、将来の人材を育成できるのでしょうか。これらの問題をプロジェクト後半の実施段階を前にしてもう一度確認すべきではないか、そのような考えから先述のタイトルが生まれました。

本シンポジウムは、本文にも紹介したように本郷一夫（東北大学大学院教育学研究科・研究科長）の基調講演と、パネリストである小川佳万（同教授・本プロジェクト・ディレクター）、水山光春教授（京都教育大学）、Win On LEE 教授（シンガポール NIE）のによる提案、そしてフロアからの活発な質疑応答からなります。

このシンポジウムの対立軸は、①International-Minded か Global Minded か、②Attitude か Literacy か、③多様性と共通性の問題の三つあったように思われます。

①に関しては、まず当研究科の本郷教授の発言がありました。氏が被災地支援の中での地域ごとの文化的・社会的文脈の多様性とこれを基盤とした復興支援のための人材育成の必要性を感じた経験を披露し、東アジア各国で活躍できるグローバル人材とは、自国の文化に根差し、なおかつ他国や他の地域の文化を尊重する態度を持った人材であると定義しました。そして「グローバル」な人材に必要な態度として、あえて Global Mind でなく Inter-National という語を使うことを主張しました。これに対して、②とも関係しますが水山教授は、本来の活動的な市民が備えるべき資質とは、政治的で民主的な行動ができる Literacy 人材であり、

それは各国共通のものであるという考えを示されました。LEE 教授も、グローバル人材が備えるべき資質として、知識をどのように扱うか。知識を創造したり関連付けたりする Literacy を示しつつも、その背景には自ら問題を定めて指向性を持って解決していくような一種の Attitude の重要性を強調されていたように思われます。また、小川教授は日本人学生の、LEE 教授はアジア人学生のデータを引用され、外に向かう意欲や能力に対する自尊心といった点にも言及され、グローバル人材としての備えるべき Attitude について論じられました。さらに、③多様なアジアの実情の中でどう共通性を見出し、教育において我々が共通する問題を解決していくべきか、特にパネリストどうしの議論の中で活発なやり取りがなされました。

これらの議論は、翌日のカリキュラム会議でも重視されました。翌 12 日におこなわれたカリキュラム会議は、本来、カリキュラムやシラバスの作成、事務組織の問題、成績評価のすり合わせなど各国大学のコース担当代表による実施体制についての打ち合わせです。しかし、その中で少なからぬ時間、「我々はアジアのグローバル人材育成のためにどんな授業が提供できるか」が話し合われました。会議出席者の多くは、前日の国際シンポジウムにも出席していましたので、それを踏まえて「我々は共通のグローバル人材を目指して共通の基盤を持つ授業を提供すべきか」「あるトピックに対して四つの地域をすべて踏まえて議論しなければならないか」などの議論となったのです。結局のところ、「この情報化の時代に、なぜ学生が四か所をまわる意味があるのか」を考えた時、その国の文化的・社会的文脈の多様性を経験し、その中で各国の学生が協力して問題を解決していくことにこそカリキュラム上往還する意味があること。その中で自国の文化に根差し、なおかつ他国の文化を尊重する態度を持った人材を育成すべきであるとの方向に落ち着いたようです。

先に述べたヨーロッパの「エラスムス・ムンドゥス計画」に比べ、人材の流動性においても機関の組織化においても、アジア各国の教育界におけるグローバルな人材育成の基盤は必ずしも整っているとは言えません。しかしながら、今回、LEE 教授がプレゼンの中で述べたようにアジアほど多様な地域はありません。その多様性や山積する課題の中で、学生が各国を行き来しながら協働して新たな地の領域を切り開き問題に対処していくことができるのが、東アジアを基盤として行われる本プロジェクトの強みであると言えるでしょう。

本プロジェクトは、この 4 月から AEL(Asia Education Leader)Course を派生し、新たなステージに踏み出します。2014 年夏の東北大学での集中コースをふり出しとして、台湾→中国→韓国と各国と地域をめぐりながら学生が自由に授業を履修し、東アジアの実践的な教育問題に取り組んでいきます。今後、参加各大学の教員と学生の共同の学びの中で、新たな人材が生み出されていくことを期待しています。

「交流協定」報告書

目的

本プロジェクトの最終目的であるジョイント・ディグリーを開発するため、前段階として、海外大学との部局間「学術交流に関する協定書」及び「学生交流に関する覚書」を結び、学生交流や研究交流を深めていくこととする。

実施状況

今年は下記のとおり連携校と交流協定を締結している。

2013年11月15日	国立台湾師範大学教育学院	「学生交流に関する覚書」
2013年11月16日	国立政治大学教育学院	「学生交流に関する覚書」
2013年11月27日	南京師範大学心理学院	「学術交流に関する協定書」 「学生交流に関する覚書」
2013年11月27日	南京師範大学教育科学学院	「学生交流に関する覚書」
2013年11月29日	華東師範大学心理与認知科学学院	「学術交流に関する協定書」 「学生交流に関する覚書」
2013年11月29日	華東師範大学教育科学学院	「学術交流に関する協定書」 「学生交流に関する覚書」
2014年03月28日	高麗大学校師範大学	「学生交流に関する覚書」
2014年03月28日	ソウル大学校師範大学	「学術交流に関する協定書」 「学生交流に関する覚書」

他、北京師範大学教育学部との「学生交流に関する覚書」を来年度内に予定している。

6 広報活動

ニューズレター

ホームページ

「ニューズレター」報告書

目的

ニューズレターを定期的（年4回）に発行し、調査報告・実施成果に関わる情報公開を行うこととする。よって、改革プログラムの進捗状況を広報し、広く批判・意見を受け入れ、プログラムの更なる充実を図る。

実施状況

2013年4月に第4号、7月に第5号、2014年2月に第6号が発行された。なお外国との接点が多いため、日本語と英語の2つの言語版を作成している。

2014年3月末付で第7号が発刊される予定である。

また、HPに掲載し、PDFファイルでの参照とダウンロードを可能にした。

第4号（目次）

- ・高麗大学校師範大学との合同カリキュラム委員会を発足
- ・国際シンポジウム「東アジアの高等教育の行方
— 共同学位プログラム創設を目指して—」の開催
- ・第6回、第7回の国際セミナーを開催
- ・2012年度下半期進捗状況（3月末日現在）

第5号（目次）

- ・高麗大学校師範大学と連携協議会を開催
- ・集中セミナーin 仙台を実施
- ・海外教育演習を開設
- ・2013年度上半期進捗状況（7月末日現在）

第6号（目次）

- ・国際セミナーを開催
- ・連携大学との細則締結
- ・サマーコース2013を開催

具体的には資料 6-1-1として添付した通りである。



AJP PRESS

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2013.SPRING

Vol.04

韓国・高麗大学校との 合同カリキュラム委員会を発足

2013年3月8日(金)、アジア共同学位開発プロジェクトは、東北大学大学院教育学研究科と高麗大学校師範大学による合同カリキュラム準備委員会を開催しました。高麗大学校師範大学からは、朴賢淑副学長、朴仁雨教育学科主任、韓龍震教授が参加しました。

合同カリキュラム準備委員会では、まず、清水助教からプロジェクト概要と今後のミッションについての説明がありました。その後、準備された各種議題について協議しました。

協議の結果、「東北大－高麗大合同カリキュラム委員会」(以下、合同カリキュラム委員会)が正式に発足され、実務者によって組織される連絡協議会を月1回開催することが決定しました。



合同カリキュラム委員会のミッションは、ジョイントディグリープログラムの開発をめざし、単位互換、評価、成績管理、学位授与、質保証に至るプロセスを整理・推進することです。また、プログラムを運営する上で生じる課題を抽出し解消方法を協議します。国の法律や制度、習慣も違う中で進める国際プロジェクトの場合、大学間レベルでの解決が難しい課題に直面することも少なくありません。そういった課題にも果敢に挑戦し、新たな地平を切り開くことが我々の大きな目標です。

本郷研究科長は、挨拶で、「直接顔を合わせ、意見交換を行なう重要な会議です。お互い協力しながらよりよいものを創り出していきたい」と述べました。アジア共同学位開発プロジェクトは、今後高麗大学校をはじめ、アジアの大学とともに、さらなる連携を図りながら、高等教育の発展に寄与していきます。



 ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

国際シンポジウム「東アジアの高等教育の行方—共同学位プログラム創設を目指して—」



2013年2月21日、東北大学文科系総合研究棟11階大会議室にて、4名の客員教員(申正撤准教授【韓国・ソウル国立大学校】、梁忠銘教授【台湾・国立台東大学】、胡建華教授【中国・南京師範大学】、鄭同僚准教授【台湾・国立政治大学】)を講演者として国際シンポジウムを開催いたしました。その目的は、①世界でも高等教育を取り

巻く環境の変化が特に著しいとされる東アジア諸地域における各国・地域の高等教育に関する最新の改革動向や、独自の取り組みを把握すること、②そうした動向を踏まえた上で、東北大学教育学研究科の取り組みである共同学位開発プロジェクトがその中にもどのように位置づき、将来どのような形に発展するかを明確にする

手がかりを得ることです。

シンポジウムでは、本郷研究科長による開会の挨拶に続き、清水プロジェクトリーダーより基調講演「東アジアの高等教育の行方—共同学位プログラム創設を目指して—」がなされました。そのなかで、まず、本プロジェクトは、流動性の比較的高い研究者や専門職と、これまで流動性の低かった

国際セミナーを開催

東北大学教育学研究科共同学位開発プロジェクトでは、国内外の研究者との交流を促進するため、国際セミナーを開催しています。第6回国際セミナーではロンドン大学よりJohn O'regan先生、第7回国際セミナーでは同志社大学より山田礼子先生をお招きしました。



等教育の行方 「プログラム創設を目指して—」の開催

教員の中間の人材、すなわち、政策立案者やリーダー教員などを育てることを念頭に置いているために、「アジア共通の文化」を基盤としながら、教育学、教育心理学を含む幅広い領域を含んだ共同カリキュラムの作成、フィールドワークやサマーセミナーなどの実施を予定していることが報告されました。その際、特に東日本大震災後に高まった子どもたちのメンタルケアに関連する内容をフィールドワークに取り入れることで、共同学位創設に対して東北大学独自の貢献ができることと提案されました。

続いて、4名の客員教員より講演が行われました。申正撤准教授による講演「ポスト大衆化時代の大学像—教育研究システム再構成—」では、現在の大学の変化について、①エリート養成から「ポスト大衆化=Post-massification」の時代になったこと、②経済におけるグローバル化によってWCU (World Class University) の影響力が増大したことで知識の生産に重点が置かれる一方で、研究が教育と直結しないために、「研究成果を教える」ことが困難となってきたことが指摘されました。

梁忠銘教授による講演「国際化における大学の社会と地方に対する役割—台東大学の例を中心に—」では、地方都市の国際化推進に対する大学の貢献について、国立台東大学での経験が報告されました。例えば、同大学では国際交流事務センターを設立しその事業を統括することで、地方都市での円滑な国際交流を促していることや、国際化推進のための遠隔教育、海外教育見学の企画や国際会議の開催に協力していることな

どが報告されました。

胡建華教授による講演「中国における高等教育の新たな改革」では、中国で推進される国際化事業が報告されました。中国では、1990年代後半以降、高等教育の入学者が急激に増加したことを受け、2012年に教育部は「高教30条」(教育部の高等教育の質を全面的に高める若干の意見)において、高等教育は量的発展よりも質を重視すべきであると指摘しました。そこで、中国の高等教育機関がその質的向上を目指すなかで、いかに国際化へ対応しているかについて、報告がなされました。

鄭同僚准教授による講演「ボリスの建設—国立政治大学における全寮制カレッジの経験から—」では、国立政治大学が創設したレジデンシャル・カレッジの紹介がなされました。このレジデンシャル・カレッジは、古代ギリシャのボリス(都市国家)のように、多くの機能が集約された大学において学生が共同生活を送り、多様な問題に対応する「総合力」を身に着けるものであります。また、それには、グローバル人材に必要とされる様々な知的能力の育成といった効果も含まれていると報告されました。

引き続きディスカッションの中では、共同学位の創設について具体的な議論がなされました。その中で、共同学位を創設していくに当たり必要となる基本的姿勢は「プラグマティズム」であることが指摘されました。今後、プラグマティックな行動力も伴いながら、新しいタイプの教育を仙台から発信できるように努めてまいります。



【第6回国際セミナー】

2012年10月18日

'English as a World Language: Some Perspectives on Teaching and Learning in a Globalized Age'

ロンドン大学 John O'regan 上級講師

【第7回国際セミナー】

2012年12月6日

「国際的共同教育の現状と課題—同志社大学の事例から—」

同志社大学 山田 礼子 教授





2012年度下半期進捗状況 (3月末日現在)

シンポジウム・セミナー

- 2012年10月18日(木) セミナー「高等教育の国際化⑥」(講師: John O'Regan/Institute of Education, University of London、Mike Winter/Institute of Education, University of London)
- 2012年12月6日(木) セミナー「高等教育の国際化⑦」(講師: 山田礼子教授/同志社大学)
- 2013年2月21日(木) 国際シンポジウム「東アジアの高等教育の行方—共同学位プログラム創設を目指して—」(基調講演: 清水禎文プロジェクト・サプリーダー/東北大学大学院教育学研究科、講師: 申正撤准教授/韓国・ソウル国立大学校師範大学、梁忠銘教授/台湾・国立台東大学師範学院、胡建華教授/中国・南京師範大学教育科学学院、鄭同僚准教授/台湾・国立政治大学教育学院)

海外短期研修

- 2013年3月20日(水) 高麗大学校(韓国・ソウル市) ~ 23日(土)

連携事業

- 2013年3月29日(金) 杭州師範大学(中国・杭州市)との学術交流協定調印式

国内調査

- 2012年10月18日(木) NAIST東京フォーラム(東京都)
- 2012年11月22日(木) NIAD-UE国際セミナー(東京都)

海外調査

- 2012年10月15日(月)~21日(日) ソウル国立大学校(韓国・ソウル市)
- 2012年11月4日(日) 北京師範大学(東京都にて会議)
- 2012年11月6日(火)~7日(水) ソウル国立大学校、高麗大学校(韓国・ソウル市)
- 2012年11月24日(土)~30日(金) 南京師範大学(中国・南京市)、浙江大學(中国・杭州市)、杭州師範大学(中国・杭州市)、華東師範大学(中国・上海市)
- 2012年12月2日(日)~5日(水) 国立政治大学・国立台湾師範大学(台湾・台北市)
- 2013年2月26日(火)~3月3日(日) 東北師範大学(中国・長春市)
- 2013年3月11日(月)~16日(土) ロンドン大学(英国・ロンドン市)、ブリュッセル大学協会(ベルギー・ブリュッセル市)

プロジェクト客員教員

- 申 正撤 准教授 (韓国・ソウル国立大学校) 2012年10月17日~2013年2月28日
- 梁 忠銘 教授 (台湾・国立台東大学) 2013年1月7日~2013年3月15日
- 胡 建華 教授 (中国・南京師範大学) 2013年1月22日~2013年3月28日
- 鄭 同僚 准教授 (台湾・国立政治大学) 2013年1月25日~2013年2月24日



AJP ASIA
JOINT-DEGREE
PROJECT

東北大学 大学院教育学研究科
アジア共同学位開発プロジェクト事務室
TEL: 022-795-3756 E-mail: ajp@sed.tohoku.ac.jp
www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/



AJP PRESS

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2013.SPRING

Vol.04

Establishment of Joint Curriculum Committee with Korea University, Korea

The Asia Joint-Degree Project held a Joint Curriculum Committee meeting between the Graduate School of Education of Tohoku University and Korea University on Friday, March 8, 2013. Participants from Korea University were Vice President PARK Hyunsuk, Department Head PARK Innwoo, and Prof. HAHN YongJin.

At the beginning of the meeting, Assist. Prof. Shimizu provided the outline of the project and an explanation of the scheduled mission of the Committee. Participants then discussed pre-determined agenda items.

As a result, the "Tohoku University and Korea University Joint Curriculum Committee" (hereinafter referred to as the "Joint Curriculum Committee") was officially launched and it was decided to hold a monthly working-level liaison meeting.

The mission of the Joint Curriculum Committee is to organize and pro-

vide the process involving credit transfers, evaluation, academic records management, degree conferment and quality assurance, in order to develop a joint degree program. The Committee also identifies issues arising from the operation of the program and discusses measures to address them. In implementing an international project between universities in different countries, those involved often face issues attributed to the different laws and regulations, systems and customs, which are difficult to solve at the university level. The Committee is ready to take on these challenging issues and will open up a new frontier.

Dean Hongo of the Graduate School of Education said in his address: "This is an important face-to-face meeting to exchange our opinions. I hope we will cooperate to further improve the project." Through the Asia Joint-Degree Project, we will enhance collaboration with Korea University and other Asian universities to contribute to the development of higher education.



International Symposium on “Higher Education in East Asia Tomorrow”



On February 21, 2013, an international symposium with four visiting professors as speakers was held in the Large Meeting Room, 11F, New Humanities Building, Tohoku University. The speakers were: Assoc. Prof. SHIN Jungcheol (Seoul University, Korea), Prof. LIANG Chung Ming (National Taitung University, Taiwan), Prof. HU Jianhua (Nanjing Normal University, China) and Assoc. Prof. CHENG Tung Liao (National Chengchi University, Taiwan).

The objectives of the symposium were 1) to understand the latest trends in higher education reform in East Asian countries, where the envi-

ronment around higher education is changing particularly rapidly, and where efforts unique to each country to achieve reform are being made, and 2) in light of such trends, to seek to clarify the positioning of the Joint Degree Program of the Graduate School of Education, Tohoku University, and its future direction.

Following the opening address by HONGO Kazuo, Dean of the Graduate School of Education, the project sub-leader SHIMIZU Yoshifumi presented the keynote lecture, “Higher Education in East Asia Tomorrow: In Search of the Joint Degree Program.” In his lecture,

he explained that the project focuses not only on researchers and specialists who have relatively high mobility, but also on middle-tier faculty members, such as policy makers and leading teachers, who have been less mobile, and that, for this reason, the joint curriculum will be designed in such a way as to include a wide range of disciplines, including education and educational psychology, on the basis of “the culture common throughout Asia.” He also added that it is planned to provide fieldwork opportunities and summer seminars. In regard to fieldwork programs in particular,

International Seminars

The Joint-Degree Project of the Graduate School of Education of Tohoku University organizes international seminars to promote exchange among researchers in Japan and abroad. Dr. John O'Regan of the University of London was invited as the speaker for the Sixth International Seminar and Prof. YAMADA Reiko of Doshisha University spoke at the Seventh International Seminar.



: In Search of the Joint Degree Program”

he proposed to incorporate issues related to mental health care for children, a topic that has been raised particularly since the Great East Japan Earthquake, so that Tohoku University will be able to contribute to creation of the Joint Degree Program in its own way.

After the keynote lecture, the four visiting professors gave lectures. Assoc. Prof. SHIN Jungcheol gave a lecture entitled “The Future of University in Post-Massification: Redesigning Teaching and Research Systems.” He noted and explained some of the changes that universities are currently undergoing, for example, 1) how university education has changed from education for elites to education in the post-massification era; and 2) while emphasis is placed on producing knowledge due to the increasing influence of world-class universities (WCUs) as a result of the globalized economy, it has become difficult to “teach research outcomes” because research and education are not directly connected.

In the lecture by Prof. LIANG Chung-Ming entitled “Roles of Universities in Society and Regions in Internationalization -- With Focus on the Experience of National Taitung University,” he reported the experience of National Taitung University in relation to promoting the internationalization of local cities. For example, the university established the International Exchange Administration Center to facilitate international exchange in local cities through centralized management of relevant projects. It also cooperates in planning distance education and inspection of overseas education as well as in organizing international conferences to help promote internationalization.

Prof. HU Jianhua gave a lecture on “New Reform of Higher Education in China” to report internationalization projects promoted in China. The number of students entering higher education had rapidly increased in China since the latter half of the 1990s. In response, in 2012, the Ministry of Education (MOE) stated in its “30 Articles on Higher Education” (the MOE’s views on improving the overall quality of higher education) that, in developing higher education, emphasis should be placed on quality rather than quantity. The professor reported in his lecture the efforts that have been made by higher education institutions in China to achieve internationalization while aiming to improve their quality.

In his lecture entitled “Building the Polis - Residential college experience from National Chengchi University in Taiwan,” Assoc. Prof. CHENG Tung Liao introduced the residential college established by National Chengchi University. This residential college is designed in such a way that the students living together at the university can enjoy many integrated functions like in a polis, the ancient Greek city-state, so that they are able to acquire an “overall ability” to address diverse issues. According to Prof. Cheng, this approach also has the effect of developing the intellectual capability of those who are to play international leadership roles in the future.

Following the lectures, the participants discussed specific issues related to the creation of the joint degree program. During the discussion, it was indicated that the basic attitude required in creating the joint degree program is the attitude of “pragmatism.” Our efforts will be focused on creating and spreading a new type of education from Sendai while maintaining a pragmatic attitude.



The Sixth International Seminar

October 18, 2012

‘English as a World Language: Some Perspectives on Teaching and Learning in a Globalized Age’

John O’Regan
Senior Lecturer (University of London)

The Seventh International Seminar

December 6, 2012

“Current Status and Issues of International Joint Education -- From Cases at Doshisha University --”

Prof. YAMADA Reiko
(Doshisha University)





Project Progress for the Second Half of Academic Year 2012 (as of the end of March 2013)

Symposiums and Seminars

- October 18 (Thursday) 2012 Seminar "Internationalization of Higher Education ⑥" (Lecturer: John O'Regan/Institute of Education, University of London, Mike Winter/Institute of Education, University of London)
- December 6 (Thursday) 2012 Seminar "Internationalization of Higher Education ⑦" (Lecturer: Prof. YAMADA Reiko /Doshisha University)
- February 21 (Thursday) 2013 International Symposium "Higher Education in East Asia Tomorrow: In search of the Joint Degree Program" (Keynote Speech: SHIMIZU Yoshifumi, Project sub-leader/Graduate School of Education, Tohoku University; Lecturer: Assoc. Prof. SHIN Jungcheol /Seoul National University, Korea; Prof. LIANG Chung Ming /National Taitung University, Taiwan; Prof. HU Jianhua /Nanjing Normal University School of Education Science, China; Assoc. Prof. CHENG Tung Liao /National Chengchi University College of Education, Taiwan)

Short-term overseas training program

- March 20 (Wednesday) – 23 (Saturday) 2013 Korea University (Seoul, Korea)

Collaborative Project

- March 29 (Friday) 2013 Academic Exchange Agreement Signing Ceremony with Hangzhou Normal University, China

Overseas surveys

- October 15 (Monday) – 21 (Sunday) 2012 Seoul National University
- November 4 (Sunday) 2012 Beijing Normal University (meeting in Tokyo)
- November 6 (Tuesday) – 7 (Wednesday) 2012 Seoul National University, Korea University (Seoul, Korea)
- November 24 (Saturday) – 30 (Friday) 2012 Nanjing Normal University (Nanjing, China), Zhejiang University (Hangzhou, China), Hangzhou Normal University (Hangzhou, China), East China Normal University (Shanghai, China)
- December 2 (Sunday) – 5 (Wednesday) 2012 National Chengchi University, National Taiwan Normal University (Taipei, Taiwan)
- February 26 (Tuesday) – March 3 (Sunday) 2013 Northeast Normal University (Changchun, China)
- March 11 (Monday) – 16 (Saturday) 2013 University of London (London, UK), European University Association (Brussels, Belgium)

Domestic surveys

- October 18 (Thursday) 2012 NAIST Tokyo Forum (Tokyo)
- November 22 (Thursday) 2012 NIAD-UE International Seminar (Tokyo)

Project Visiting Professors

- Assoc. Prof. SHIN Jungcheol (Seoul National University, Korea) October 17, 2012 – February 28, 2013
- Prof. LIANG Chung Ming (National Taitung University, Taiwan) January 7, 2013 – March 15, 2013
- Prof. HU Jian Hua (Nanjing Normal University, China) January 22, 2013 – March 28, 2013
- Assoc. Prof. CHENG Tung Liao (National Chengchi University, Taiwan) January 25, 2013 – February 24, 2013



AJP ASIA
JOINT-DEGREE
PROJECT

Graduate School of Education, Tohoku University Asia Joint-degree Project Office
TEL: +81-22-795-3756 E-mail: ajp@sed.tohoku.ac.jp
www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/en/



AJP PRESS

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2013.AUTUMN

Vol.05

高麗大学校師範大学と 連絡協議会を開催

2013年5月20日(月)、東北大学大学院教育学研究科アジア共同学位開発プロジェクトでは、テレビ会議システムを活用して高麗大学校師範大学と連絡協議会を開催いたしました。連絡協議会では、本研究科と高麗大学校師範大学が共同学位創設を目指すうえで解決すべきと考えられる、単位互換制度の確立、成績管理方法の統一化、質の保証といった様々な課題に取り組みます。当然、こうした課題について、国境を越えた高等教育機関同士が解決していくには、多くの時間と労力が必要となります。今後も、テレビ会議システムを利用して高麗大学校との協議の場を定期的に設けることで、多様な課題に迅速に対応しながら共同学位開発へ向けて努めて参ります。

また、連絡協議会では、共同学位開発において極めて重要となる「共同科目」の開設準備を推進していくことが確認されました。「共同科目」は、本研究科と高麗大学校が共



同設計する科目であるため、今後、各大学における「共同科目」の担当者を中心としながら、より質の高いカリキュラムを構築することを旨として議論を交わしていきます。

さらに、共同学位開発に向けたこうした議論に加え、大学院生ワークショップの開催についても意見交換を行いました。具体的には、両大学の大学院生の成果報告会を年度末に共同で開催するなど、大学院生同士の交流の場を設けることが提案されました。そうした環境整備によって学生の海外への移動を促すことは、アジア共同学位開発プロジェクトが目指す、国際的視野を備えた人材の育成にもつながると考えます。

今後、テレビ会議システムを活用して高麗大学校との連絡協議会を継続的に行いながら、学生の移動を伴った特色のある共同学位プログラムの開発を目指します。

集中セミナー in 仙台を実施



東北大学大学院教育学研究科アジア共同学位開発プロジェクトでは、2013年7月22日から24日に、「集中セミナー in 仙台」を実施いたしました。同セミナーは、日本語学習経験を有する海外の大学院生を招き、日本語による授業実践の可能性を探るとともに、国境を越えた学生同士の交流を促進することを目的としております。今年度は、高麗大学(韓国)から2名、東北師範大学(中国)から4名、南京師範大学(中国)から3名、国立政治大学(台湾)から1名、さらに東北大学から8名の学生が参加しました。

セミナーは、講義(1)～(5)に加え、フィールド・トリップとしての高校訪問、学生交流会、発表会によって構成されました。講義では、現代日本において生じている青年の諸問題について理解するとともに、自国におけるそれとの対比を通して、心理的諸問題の文化的影響に関する考察力を涵養することを目的といたしました。



	講義タイトル	講師
講義(1)	青年とはどのような時期か	神谷 哲司 准教授
講義(2)	現代日本の学校から職場への移行	三輪 哲 准教授
講義(3)	現代日本の青年の学習の特徴	深谷 優子 准教授
講義(4)	現代日本における青年の心理学的特徴	神谷 哲司 准教授
講義(5)	現代日本における青年期の諸問題と心理的支援	若島 孔文 准教授

講義(1)では、青年期に関する心理学的定義や特徴とともに、歴史の中で「子ども」や「青年」がどのように出現してきたのかについて説明がなされ、青年期の構造について理解を深めました。

講義(2)では、青年期にある若者にとって重要な人生の転機となる、就職に焦点が当てられました。教育社会学では「学校から職場への移行」として研究対象とされる就職について、変わりゆく社会の姿やその日本独特な仕組みを学びました。

講義(3)では、日本における青年の学力や学習意欲、学習方略などについて扱いました。全国学力・学習状況

調査の結果や、生徒・学生が用いる記憶方略やノートテーク方略といった具体例から、現代日本の青年の学習の特徴を学びました。

講義(4)では、第二次世界大戦後の日本において、高度経済成長からバブル崩壊といった社会経済的背景のなかで家族の変容とともに生じてきたと考えられる現代的な青年がもつ特徴について考えました。

講義(5)では、現在日本における青年期の諸問題として、いじめ、不登校・ひきこもり、家庭内暴力などを取り上げました。事例を示しながら解説が加えられ、その心理支援の実際の方法や考え方について理解を深めました。



集中セミナー in 仙台 スケジュール					
	I 8:50~10:20	II 10:30~12:00	III 13:00~14:30	IV 14:40~16:10	V 16:20~17:50
7月22日(月)	開講式 オリエンテーション	講義(1)	講義(2)		講義(3)
7月23日(火)	フィールド・トリップ(仙台市内の高校訪問)			講義(4)	
7月24日(水)	講義(5)	学生交流会	発表会準備	発表会	修了式

フィールド・トリップでは、仙台市内の高校を訪問し、校内見学に加えて授業観察も行いました。その際、参加学生からは日本の高校に関する多くの質問が積極的に投げかけられ、彼らにとって非常に有意義な経験となったことが伺えました。また、学生交流会では、講義(1)~(5)を通して学んだ内容に関連する議論を学生同士で活発に繰り広げました。そして、発表会では、セミナーを通じて修得した

内容を各自パワーポイントにまとめ、報告しました。

3日間という短い期間ではありましたが、セミナーを通して異国の学生同士が交流する大変貴重な機会を設けることができました。今後も、学生や教員同士が国境を越えて積極的に交わる場を創り出すよう取り組んで参ります。



海外教育演習を開設

東北大学教育学部では、平成25年度より学部3,4年生を対象とした「海外教育演習」を開設しております。この授業は教育学に関わるフィールドワーク研究とその技法について学び、実際にフィールドで現地調査を行なうことにより、教育現象の本質に迫ることを狙いとしております。また、同科目の履修を通じて、アジア共同学位開発プロジェクトへの学生の参加意欲が高まることも期待されます。なお、今年度のフィールドワーク先は韓国の教育機関といたしました。

今年度は、学部3年生1名、4年生2名(自由聴講生)、修士課程1年生1名の計4名が受講しました。授業の前半(全15回のうち12回)では文献を中心にフィールドワークの技法や課題などについて学ぶと同時に、訪問調査地の言語である韓国語を学びました。

フィールドワークでは、6月23日から26日まで4日間にわたり4名の引率教員とともに、韓国ソウル市にある校洞初等学校、景福高等学校を訪問しました。そこでは、例えばICTを活用した授業や英語の水準別授業を、日本の教育現場と比較をしながら観察しました。



こうしたフィールドワークを組み込んだ授業は、海外の教育現場を直接観察するという行為自体が持つ教育的効果を含むため成果も大きいと考えられますが、フィールドワークがワンショットサーベイになってしまい、十分

な期間・調査が確保できないことや、言語の壁、費用負担などが課題として挙げられました。こうした課題を解決しながら、今後も「海外教育演習」を展開させていく予定です。



2013年度上半期進捗状況 (2013年7月末日現在)

連携事業

- 2013年5月20日(月) 高麗大学校師範大学との連絡協議会開催(テレビ会議システム使用)
参加者:小川佳万教授、安保英勇准教授、谷口和也准教授、神谷哲司准教授、朴賢淑助教、田中光晴助教

集中セミナー

- 2013年7月22日(月) 集中セミナー開催
～24日(水)

海外調査

- 2013年5月28日(火) モンゴル国立教育大学(東京都にて打ち合わせ)
- 2013年6月23日(日) 【海外教育演習】慶熙大学校、校洞初等学校、景福高等学校(韓国・ソウル市)～26日(水)

国内調査

- 2013年6月28日(金) 高等教育シンポジウム「大学での学びを問い直す—主体的な学びを培う大学教育とは—」(東京都・有楽町朝日ホール)



AJP ASIA
JOINT-DEGREE
PROJECT

東北大学 大学院教育学研究科
アジア共同学位開発プロジェクト事務室
TEL:022-795-3756 E-mail:ajp@sed.tohoku.ac.jp
www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/



AJP PRESS

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2013.AUTUMN

Vol.05

Liaison Meeting with Korea University

The Asia Joint-Degree Project of the Graduate School of Education, Tohoku University, held a liaison meeting with Korea University via a teleconference system on Monday, May 20, 2013. The aim of such liaison meetings is to address the issues that need to be resolved in order to establish joint-degrees between the two universities. These issues include establishing a credit transfer system and unifying academic record management practices, as well as securing academic standards. Much time and effort is incurred by higher educational institutions in different countries to resolve issues such as these. We will continue to hold regular meetings with Korea University, taking advantage of teleconferencing, and aim to respond promptly to various agenda items towards developing a joint-degree program.

At the meeting, both institutions confirmed that they would promote preparations for opening "common subjects," which are essential in developing joint-degrees. Since these subjects are to be designed jointly,



those in charge of the subjects at both universities will continue to have mutual discussions to establish a high quality curriculum.

In addition to these discussions, both parties exchanged views on holding workshops for graduate students. Specific proposals included holding a joint year-end session for postgraduates from both universities to present their research outcomes, thus offering them an occasion for academic and social exchange. Arranging these opportunities and encouraging students to travel abroad will lead to the development of human resources with an international perspective. This is one of the ultimate goals of the Asia Joint-Degree Project.

Through continuing meetings with Korea University via teleconferencing, we aim to develop a unique joint-degree program that enables students to experience studying at each other's universities.

Intensive Seminar in Sendai



The Asia Joint-Degree Project of the Graduate School of Education, Tohoku University, held an "Intensive Seminar in Sendai" from July 22 to 24, 2013, to which overseas graduate students who have studied the Japanese language were invited. The purpose of the seminar was to explore the possibilities of teaching classes in Japanese as well as to promote interaction between students from different countries. The participants this year were two postgraduates from Korea University (South Korea), four from Northeast Normal University (China), three from Nanjing Normal University (China), and one from National Chengchi University (Taiwan), in addition to eight students from Tohoku University.

The seminar consisted of five lectures (see below), a field trip to a high school in Sendai City, an exchange meeting, and a presentation meeting. The lectures aimed to help participants understand the issues arising among young people in present-day Japan, compare these issues with those in their own countries, and develop the ability to explore how culture influences psychological problems.



	Lecture Title	Lecturer
Lecture 1	What is the Period of Adolescence?	Tetsuji Kamiya, Associate Professor
Lecture 2	Transition from School to Work in Today's Japan	Satoshi Miwa, Associate Professor
Lecture 3	Features of Young People's Modes of Learning in Today's Japan	Yuko Fukaya, Associate Professor
Lecture 4	Psychological Features of Young People in Today's Japan	Tetsuji Kamiya, Associate Professor
Lecture 5	Issues Arising among Young People and Psychological Support for Them in Today's Japan	Koubun Wakashima, Associate Professor

Lecture 1 defined adolescence and described its characteristics in psychological terms. It also explained how "the child" and "the youth" emerged in a historical context. Participants deepened their understanding of the structure of young adulthood.

The topic of Lecture 2 was young people's job hunting experiences, which is an important turning point in their lives. In educational sociology, the process in which young people attempt to find employment is a research subject known as "Transition from School to Work." Participants learned about the changing Japanese society and its unique structures.

Lecture 3 discussed academic abilities, motivation to learn, and learning strategies of young people in current Japan. The results of national surveys on academic abilities and learning conditions were introduced, as well as specific

examples of Japanese students' strategies for learning by heart and taking notes. Participants thus acquired a view on the features of student studies in present-day Japan.

Lecture 4 focused on the characteristics of young people in today's Japan. The postwar socioeconomic context, from the period of high economic growth to the bursting of the bubble economy, is believed to have changed the characters of young people, along with the transformation of their families.

Lecture 5 took up issues arising among young people in current Japan, such as bullying, truancy, social withdrawal, and domestic violence. The lecturer approached these problems by referring to specific cases. Participants gained an understanding of the actual methods of psychological support and the philosophy behind such support.



Intensive Seminar in Sendai – Schedule					
	I 8:50~10:20	II 10:30~12:00	III 13:00~14:30	IV 14:40~16:10	V 16:20~17:50
Monday July 22	Opening Ceremony Orientation	Lecture 1	Lecture 2		Lecture 3
Tuesday July 23	Field Trip (High School in Sendai City)		Lecture 4		
Wednesday July 24	Lecture 5	Exchange Meeting	Preparation for Presentation	Presentation	Closing Ceremony

At the high school visited on the field trip, participants observed the school facilities, as well as actual classes. This trip seemed to be a valuable experience for all participants as they enthusiastically asked many questions regarding Japanese high school life. In addition, there were lively discussions on the lectures at the exchange meeting. Each participant then gave a PowerPoint presentation about what they had learned through the seminar.

During this short three-day period, the seminar successfully provided valuable opportunities for students from different countries to exchange views and opinions. We will work further on creating occasions where students and faculty members can actively interact across national borders.



Overseas Academic Seminar Launched

The Faculty of Education, Tohoku University, has held its "Overseas Academic Seminar" for third and fourth-year undergraduates since the academic year of 2013. The seminar focuses on fieldwork research and methods of fieldwork related to education, and aims to explore the true nature of educational phenomena through real-world activities. It is also expected that students attending this seminar will be motivated to participate in the Asia Joint-Degree Project. The fieldwork for this year was conducted at educational institutions in South Korea.

The seminar this academic year had a total of four students: one undergraduate in their third year, two in their fourth year (non-credit students), and one in the first year of a master's program. During the first 12 of the 15 sessions, literature-based lectures on fieldwork methods and related issues were chiefly delivered. Korean language classes, the native language of the fieldwork sites, were also provided.

In the period of four days from Jun 23 to 26, the members of the seminar took a fieldtrip to visit Gyo-Dong Elementary School and Kyung-Bok High School in Seoul, with four supervising faculty members. The participants



observed classes at these schools, which included those utilizing ICT or English classes grouped according to ability, and compared them to classroom teaching in Japan.

Seminars incorporating fieldwork are considered to be very productive since direct observation of overseas educational sites itself is educationally mean-

ingful. However, some issues have emerged: participants did not have sufficient time for their research and the fieldwork ended up as a somewhat superficial one-shot survey; language barriers also impeded the fieldwork; and a cost burden was imposed on participants. We will tackle these issues and further promote and carry out such overseas seminars.

Project Progress for the First Half of Academic Year 2013 (as of the end of July 2013)



Collaborative Project

- May 20 (Monday) Liaison meeting with Korea University (Teleconference)

Participants: Yoshikazu Ogawa, Professor; Hideo Ambo, Associate Professor; Kazuya Taniguchi, Associate Professor; Tetsuji Kamiya, Associate Professor; Hyunsook Park, Assistant Professor; Mitsuharu Tanaka, Assistant Professor



Intensive Seminar

- July 22 (Monday) to Intensive Seminar
24 (Wednesday)



Overseas Surveys

- May 28 (Tuesday) Mongolian State University of Education (Meeting in Tokyo)
- June 23 (Sunday) to [Overseas Academic Seminar] Kyunghee University, Gyo-Dong Elementary School, KyungBok High School (Seoul, South Korea)
26 (Wednesday)

Domestic Surveys

- June 28 (Friday) Higher Education Symposium, "Reconsidering University Education: What Is Required for Universities to Promote Individual Learning?" (Yurakucho Asahi Hall, Tokyo)



AJP ASIA
JOINT-DEGREE
PROJECT

Graduate School of Education, Tohoku University Asia Joint-degree Project Office
TEL: +81-22-795-3756 E-mail: ajp@sed.tohoku.ac.jp
www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/en/



AJP PRESS

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2013.WINTER

Vol.06



報告を行う陳陳准教授

2013年8月26日(月)、東北大学文科系総合研究棟11階大会議室にて、陳陳准教授(南京師範大学・心理学院)による第8回国際セミナー

第8回国際セミナーを開催

「The Impact of Perceived Parenting on Chinese Adolescents' Achievement Motivation and Academic Achievement」が行われました。

セミナーでは、養育が子どもの学力(academic achievement)や達成動機(achievement motivation)の向上に対してどれほどの影響力を有するかについて明らかにした研究報告がなされました。陳陳准教授には、そうした課題を解明するために行った、様々な年代の中国人生徒を対象とした質問紙調査および聞き取り調査を通じて得られた大変興味深い分析結果をご報告して頂きました。

近年国際学力調査の結果等が目ざされ、子どもの学力向上に対して大きな関心が寄せら

れるなか、それに養育が与える影響について中国で行われた調査に基づき明らかにした研究報告は、大変貴重です。そのため、同セミナーでは専門分野を問わず多くの教員や学生が参加し多様な観点から活発な議論を行うことができました。また、特に学生にとっては、現在まさに最前線で活躍する海外の研究者が行っている研究内容に触れることで、自らの研究に対する士気も向上したようです。

今後もこうしたセミナーを定期的に開催することで、国境や専門分野を越えた研究者および学生同士の意見交換を行う機会を設け、継続的な交流を実現して参ります。

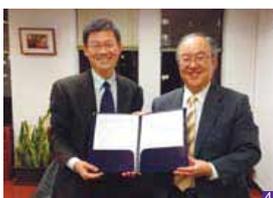
連携大学との学術交流協定書および学生交流に関する覚書を締結

東北大学大学院教育学研究科の本郷一夫研究科長は、2013年11月15日(金)から18日(月)に国立台湾師範大学教育学院および国立政治大学教育学院を、11月26日(火)から30日(土)に南京師範大学教育科学学院・心理学院および華東師範大学教育科学学院・心理与認知科学学院を訪問し、本研究科と各学院間で学術交流協定書および学生交流に

関する覚書を締結しました。

これまで、私どもはアジア共同学位の開発を目指し、様々な取り組みを行ってきました。今後、それらを踏まえて実際にプロジェクトを始動させるとき、プロジェクトへの参加学生が国境を越えて円滑な移動を行うことは極めて重要となります。このたび締結いたしました協

定は、そうした学生の円滑な移動を制度的に支えることを可能とするものです。本プロジェクトを通じて、異国の学生同士がともに学び、知識のみならずコミュニケーション能力や異文化への理解といった多様なスキルを修得することで、幅広い視野を備えた教育指導者を養成できるよう今後も努めて参ります。



- 1 国立政治大学教育学院での覚書締結
- 2 華東師範大学心理与認知科学学院との協定書、覚書締結
- 3 華東師範大学教育科学学院との協定書、覚書締結
- 4 国立台湾師範大学教育学院との覚書締結
- 5 南京師範大学心理学院との協定書、覚書締結
- 6 南京師範大学教育科学学院との覚書締結

 ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

サマーコース2013を開催



東北大学大学院教育学研究科アジア共同学位開発プロジェクトでは、2013年8月21日(水)から28日(水)まで、サマーコース2013を開催しました。同コースは、韓国、中国、台湾における提携大学との共同学位創設のための基礎として位置づいており、各大学の学生が本研究科において教授言語を英語とする授業を履修するものです。今年度は昨年度に引き続き、2度目の実施となりました。

め、講義には各国・地域における教育的課題に関する最新情報も盛り込まれました。そうした講義内容は履修学生のみならず、授業を担当する教員同士にとっても新鮮であり、教育的課題における各国・地域での共通点や国・地域による独自性に関して議論が深まりました。

サマーコース2013への参加学生は、北京師範大学(中国)より2名、南京師範大学(中国)より3名、国立台湾師範大学(台湾)より1名、国立政治大学(台湾)より2名、そして東北大学より4名でした。また、教員については、南京師範大学より1名、国立政治大学より1名、高麗大学校(韓国)より2名、東北大学より5名が授業を担当し、学生のみならず教員間の交流も図られました。

コース初日である8月21日の午前には開講式とオリエンテーションを行いました。開講式では、本郷一夫研究科長による歓迎の挨拶、小川佳万ディレクターによる開催の挨拶がなされ、その後、サマーコースへ参加する教員および学生による自己紹介が行われました。また、オリエンテーションでは谷口和也サブディレクターより東北大学の紹介や、学生がサマーコース開催中に日本で生活する際の留意点について説明が行われました。

その後、8月21日午後から24日までは「アジアの子ども」を、8月26日から28日までは「アジアの学校」を授業科目として開講しました。これらの科目は、ともにアジアにおける教育的課題をトピックとして扱うものですが、特に前者は心理学的観点に、後者は教育学的観点にたったアプローチによって講義内容が構成されました。また、これらの科目は本研究科の教員に加えて韓国、中国、台湾の提携大学における教員も担当したた



Summer Course 2013 Timetable

また、本コースは、そうした講義に加えてフィールドワークを取り入れています。具体的には、「アジアの子ども」では、仙台市ひきこもり地域支援センターである「ほわっと・わたげ」及び仙台市児童相談所を訪問し、ひきこもり、虐待、育児放棄等、子どもに関する様々な問題に対して実際に用いる解決法について現場スタッフから説明を受けました。一方、「アジアの学校」では仙台市内の高校を訪問し、授業や部活動の様子等を観察し、日本における高校生の生活について理解を深めました。このように日本の教育現場を実際に訪れ、その実態を観察する機会を多くの参加学生にとって非常に貴重な経験となったようで大変好評でした。

さらに、「アジアの子ども」及び「アジアの学校」の履修を通じて修得した内容をグループごとに発表する時間を各科目の最終講義内に設け、それに向けたグループワークの時間も確保されました。学生は、グループとして習得内容を総括するために多くの議論を重ねました。また、グループ発表の際には、各グループの発表をもとに全体討論も行いました。

サマーコース最終日である28日には、閉講式及び懇親会を行いました。閉講式では、本郷研究科長から参加学生にサマーコース2013受講証明書が授与されました。また、懇親会にはコース参加者全員が参加し親睦を深めました。コース期間中、時間を共有してともに学んだ学生たちはすでに打ち解けており、人的ネットワークが構築されたようでした。

今年度のサマーコースは2度目の開催ということもあり、比較的円滑に運営することができました。2014年度よりアジア共同学位開発プロジェクトは本格始動し、東北大学に加えて台湾師範大学、国立政治大学、南京師範大学、高麗大学といった連携大学においても授業科目を開設していく予定です。そして、参加学生はそうした連携大学間を移動しながら科目を履修します。今後、サマーコース2013で得た経験を最大限に生かしつつ、アジア共同学位開発プロジェクト全体も成功させるよう邁進して参ります。



21-Aug	10:00~	Opening Ceremony		Conference Room	
	10:00~10:05	Welcoming Remark by the Dean of Graduate School of Education			
	10:05~10:10	Opening Remark by the Director of Asia Joint-Degree Project			
	10:10~11:10	Orientation (TANIGUCHI, Kazuya)			
	11:10~12:00	Guided Tour of Graduate School of Education			
	12:00~13:00	Lunch			
Children and youths in Asia					
21-Aug	13:00~14:30	UENO, Takashi	Tohoku Univ.	Mental Health	#306
	14:40~16:10	KATO, Michiyo	Tohoku Univ.	Psychological Problems and Support System : In Case of Students in Japan	#306
	16:10~16:50	Procedure: Travel Expenses			#306
	16:50~17:50	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
22-Aug	08:50~10:20	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Actual State of Japanese NEET	#306
	10:30~13:00			Observation of Support Center for NEET "WATAGE"	WATAGE
	13:00~16:20			Observation of Sendai Child Consultation Center	Sendai Child Consultation Center
	16:30~17:50			Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
23-Aug	08:50~10:20	LEE, Sangmin	Korea Univ.	Psychological Issues of Korean Students	#306
	10:30~12:00	School Counseling Approach in South Korea			
	13:00~14:30	CHEN, Chen	Nanjing Normal Univ.	Intergroup attitudes of migrant children in China : The Association with Parenting and Peer Relationship	#306
	14:40~16:10	Mental Health of Chinese Adolescents: A Social Change Perspective		#306	
24-Aug	08:50~10:20	AMBO, Hideo	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
	10:30~12:00			Presentation and Questionnaire	
25-Aug	Free Day				
Schools in Asia					
26-Aug	08:50~10:20	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Schools in Japan 1	Jonan High School
	10:30~12:00			Schools in Japan 2	
	13:00~14:30			High School Visit	
	14:40~16:10				
	16:20~17:50			Students' Group Work to Prepare for the Presentation	
27-Aug	08:50~10:20	PARK, Inwoo	Korea Univ.	Schools in Korea 1	#306
	10:30~12:00	Schools in Korea 2			
	13:00~14:30	CHOU, Chuing Prudence	National Chengchi Univ.	Schools in China 1	#306
	14:40~16:10	Schools in China 2			
	16:20~17:50	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Students' Group Work to Prepare for the Presentation	#306
28-Aug	08:50~10:20	OGAWA, Yoshikazu	Tohoku Univ.	Asian Schools : Comparative perspective 1	#306
	10:30~12:00			Asian Schools : Comparative perspective 2	
	13:00~16:00	TANIGUCHI, Kazuya	Tohoku Univ.	Presentation	#306
	16:00~16:20	Questionnaire			#306
28-Aug	16:30~	Closing Ceremony		Conference Room	
	16:30~16:40	Closing Remark by the Dean of Graduate School of Education			
	16:40~17:00	Confer the Certificate			
	17:30~19:30	Party			Kitchn Terrace Couleur

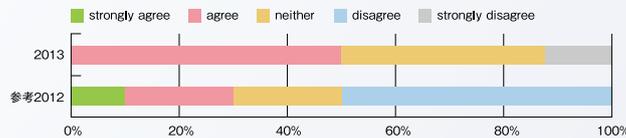


サマーコース2013 参加学生アンケートの結果

東北大学大学院教育学研究科アジア共同学位開発プロジェクトでは、サマーコース2013参加学生を対象としたアンケートを実施しました。アンケートは、5件法による段階評定及び自由記述によって構成されています。この結果を今後に活かすことで、学生のニーズにも対応した質の高いプログラムの運営を目指しています。

アンケート全体を通して、サマーコースのスケジュールに関する項目、施設および学校訪問の意義に関する項目への回答について特徴がみられました。以下ではそれらを中心に紹介します。

◆ 講義時間数 (1日当たり450分)は 適当である。



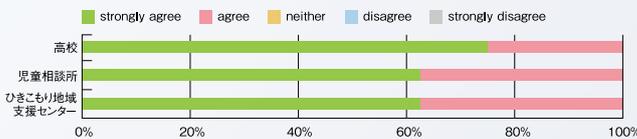
◆ 1日当たりの適当な
講義時間数は何分
であると考えますか？
300分/2名 336分/1名
400分/2名 無記入/3名

◆ サマーコースの 開催期間(8日間) は適当である。



◆ サマーコースの適当な
開催期間は何日間ですか？
10日間/2名
14-15日間/1名
15日間/1名

◆ 施設および 学校訪問は 有意義であった。



こうした結果から、参加学生は、サマーコース全体を通してスケジュールが過密であったと感じているようです。この点を踏まえ、今後は日程にゆとりを持たせ、講義のみならず異文化体験も取り入れながらスケジュールを調整する必要があります。特に評価が高かったフィールドワーク(施設や学校への訪問)を講義と連動させ、全体スケジュールにバランス

よく位置づけていくかがポイントのようです。

これらのアンケート結果も踏まえながら、より魅力的なプログラムの創設を目指して取り組んで参ります。



**AJP ASIA
JOINT-DEGREE
PROJECT**

www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/

東北大学 大学院教育学研究科 アジア共同学位開発プロジェクト事務局
TEL: 022-795-3756 E-mail: ajp@sed.tohoku.ac.jp

「ホームページ」報告書

目的

本プロジェクトに関連する各種イベントの情報を世界に発信するとともに、プロジェクトの進捗を報告する。

実施状況

サイトのフレーム作りとコーディングは（株）今野印刷に外注し、作成した。2012年3月27日にオープンされ、随時更新した。また、2012年11月には英語ホームページを開設し随時更新している。また情報の相互性を高めるべく Facebook サイトを開設し、参加者とコミュニティを形成した。

HP アドレス：<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/index.html> （日本語）

HP アドレス：<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~ajp/en/> （英語）

Facebook サイト：<http://www.facebook.com/ajptohoku>

- ・ 概要
（研究科長挨拶、ディレクター挨拶、プログラム概要、実施担当者一覧）
- ・ 活動実施内容
（国内調査報告、海外調査報告、シンポジウム開催、海外大学との提携情報、海外インターンシップ）
- ・ 調査報告・成果報告
（ニューズレター、国内調査報告書、海外調査報告書、客員教員報告書、年次報告書、シンポジウム報告書）
- ・ イベント実施情報
（シンポジウム・セミナーの情報及び報告）
- ・ 公募情報
- ・ アクセス

総括

総 括

本プロジェクトは、平成 23 年度～平成 27 年度の 5 年間、概算要求特別経費「東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究」（事業名「アジア共同学位開発プロジェクト」）として実施しています。

平成 23 年度、平成 24 年度の成果をもとに、平成 25 年度は具体的な教育プログラムの創出を目標に、関係者一丸となり、プロジェクトに取り組んできました。本稿では (1) 実施体制、(2) 海外出張・国内出張、(3) 外国人研究員（客員教員）、(4) 国際シンポジウム、(5) パイロットプログラム、(6) 共同カリキュラム開発について振り返りたいと思います。

(1) 実施体制

前年度の実施体制を引き継ぎつつ、新たな教育プログラムの創出のために、授業担当者を含めた「カリキュラム委員会」を新たに設置しました。教職員と事務局からなる推進会議を月 1 回開催しプロジェクト全体方向性や重要懸案事項の検討を行なってきました。カリキュラム委員会は週 1 回開催し、新たな教育プログラムの在り方をはじめ、さまざまな案件を処理しました。共同教育カリキュラムを集中的に議論する場を設けたことは、後に述べる Asia Education Leader Course 創出の大きな契機となりました。

事務局は、教育研究支援者 1 名を新たに採用し、専任教員 2 名、研究支援者 2 名、事務職員 1 名の専任スタッフ体制に拡充しました。次年度はさらに専任教員を採用する予定です。

(2) 海外出張・国内出張

今年度は海外の連携大学と教育プログラムの共同で開発のための交渉と国内外の関連事例調査を行ないました。交渉を含む海外調査は 4 回、国内調査 3 回を通じて、各国の大学との交流・連携を図ることができ、また、各大学の国際戦略や共同学位の実施状況など、さまざまな情報を収集することができました。これらの成果は連携事業として報告したとおりです。

(3) 外国人研究員（客員教員）

中国から 1 名の外国人研究員（客員教員）を招聘しました。本プロジェクトへの助言を含めた意見交換ができました。客員教員には、サマーコース（後述）へ協力いただき、充実した授業科目とすることができました。

(4) 国際シンポジウム・国際セミナー

「国際シンポジウム」は、本年度、1 回開催することができました。本シンポジウムはアクセスを考慮し東京で開催し、参加者も 55 名を越えました。本プロジェクトについても多くの方に知っていただくことができました。

『グローバル人材育成とシティズンシップ教育ーアジア共通の教育の基盤とは何かー』（日

英同時通訳)をテーマとして、本郷一夫教育学研究科長の基調講演の後、3人の講演者がそれぞれの視点からグローバル人材とシティズンシップ教育について報告し、フロアの参加者と活発な議論が交わされました。本プロジェクトでは、その目指す人材が備える資質として、自国の文化に根差した、なおかつ他国や他の地域の文化を尊重する態度と国際的教育指導者に必要される資質・能力、すなわち、Internationally-Minded Educational Professionals (IMEP)を提唱しています。この点を引き続き具体化していきたいと思えます。

客員教員あるいは招聘した研究者による「国際セミナー」については、本年度、1回開催しました。

(5) パイロットプログラム (集中セミナー、サマーコース、ウィンターコース)

平成25年7月、「現代日本の青年像」をテーマとしたコースを短期集中で受講する“集中セミナーin 仙台”を開催した。韓国2名、中国7名、台湾1名、本研究科の学生8名が参加しました。学生たちは3日間にわたり本研究科教員の講義を受け、最終日に成果報告会を開催しました。

平成25年8月、大学院の授業科目『アジアの子ども』『アジアの学校』(各2単位)を“サマーコース”として開講しました。

本研究科の教員のほか、中国、韓国、台湾から教員を講師として招き、英語による授業科目を提供した。中国、台湾から8名の大学院学生を招いて、受講しての意見・感想を求め、共同学位プログラムへの参考となりました。本研究科からの履修登録学生が少なかったことが今後の課題として残りました。

平成26年2月、『アジアの子ども』『アジアの学校』をテーマとしたコースを日本語で受講する“2014年ウィンターコース”を開催しました。韓国2名、中国6名、台湾4名の計12名が参加し、本研究科の学生も交流しました。これまで夏期の受入れ行事を開催してきたが、冬期の受入れ行事を開催できたことは大きな成果でした。

(6) 共同カリキュラム開発

平成25年4月、本研究科と高麗大学と共同学位カリキュラムに関する協議する東北大-高麗大合同カリキュラム委員会を発足させ、会議を行ないました(2回)。共同教育科目、単位互換等について検討し、カリキュラムの創設に向けての課題が明確となりました。その後、その他の連携大学を加え、共同カリキュラムの検討を重ね、連携大学5校で運営するAsia Education Leader Course (通称 AEL Course) を立ち上げることとなりました。

平成26年1月、南京師範大学、国立政治大学、高麗大学の連携大学の代表が参加するAELC合同検討委員会を発足させ、AELC合同検討委員会を開催しました。

4年目の平成26年度にはAsia Education Leader Courseの具体的運営を通して、共同学位開発に必要なノウハウの精査を行ない、乗り越えるべき課題点の洗い出しとプログラムがもたらす学習成果の評価道具の開発を行なっていく予定です。これまでの継続と新たな取り組みに挑戦しながら、来年度以降も「アジア共同学位開発プロジェクト」を推進し、研究者の交

流、学生の交流を通して、より質の高い大学院教育を達成するための共同学位プログラムの創設を図っていきたいと考えています。

2014年3月

東北大学大学院教育学研究科・教授

アジア共同学位開発プロジェクト・ディレクター

小川佳万

編集者

小川 佳万 アジア共同学位開発プロジェクト・ディレクター
朴 賢淑 アジア共同学位開発プロジェクト・専任教員
田中 光晴 アジア共同学位開発プロジェクト・専任教員
朴 仙子 アジア共同学位開発プロジェクト・教育研究支援者

アジア共同学位開発プロジェクト

2013年度 実施報告書

発行日 2014年3月26日
発行者 東北大学大学院教育学研究科
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター
代表者 小川 佳万
住所 仙台市青葉区川内 27-1
Tel/Fax 022-795-3756
E-mail ajp@sed.tohoku.ac.jp

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

